

B 7	12	0	8	1	0	0	0	0	1
B11. 12	32		9	3	0	1	1	1	1
C 8. 9	39	0	3	0	0	0	0	3	0
C10	19	0	1	0	0	0	0	0	0
C・D11	19	0	0	0	0	0	0	0	0
C12	19	0	0	0	0	0	0	0	0
D 7	6	0	2	0	0	0	0	0	0
D 9	14	0	3	0	0	0	0	6	0
D・E10. 11	93	0	2	0	1	1	0	0	0
D・E12	24	0	1	0	0	0	0	0	0
E 9. 10	18	0	1	0	0	0	0	1	0
F・G 9	17	1	2	0	0	0	0	0	0
E・F11・12	33	0	0	0	0	0	0	0	0
	345	1	32	4	1	2	1	11	2
B 7	0	1	1	0	0	0	0	0	24
B11. 12	0	0	1	0	0	0	0	0	49
C 8. 9	1	0	2	0	0	0	0	0	48
C10	0	0	0	0	0	0	0	0	20
C・D11	0	1	0	0	0	0	0	0	20
C12	0	0	0	0	0	0	0	0	19
D 7	0	0	1	0	0	0	0	0	9
D 9	0	0	0	0	0	0	0	0	23
D・E10. 11	1	1	0	1	1	0	0	0	101
D・E12	1	0	0	0	0	0	0	0	26
E 9. 10	0	0	1	0	0	0	0	0	21
F・G 9	0	0	0	0	0	0	0	0	20
E・F11・12	0	0	0	1	0	0	0	0	34
	3	3	6	2	1	0	0	0	414

第13表 1区3層ユニット組成一覧

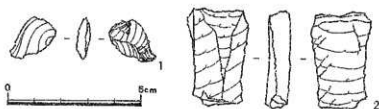
③ 石器 (第37~61図、第16~19表、図版12~22)

石器の押図作成については、区概念は無視し、層位毎に図化した。分量、出土地点等については第16~19表を参照されたい。

ア 4層の遺物 (第37図1~2、図版12-1)

1は灰色黒曜石の剥片である。打面は点状で端部はステップ気味に収束する。

2は多孔質の安山岩製剥片で風化が著しく、剥離痕もあまり明確でない。上面は折り取っているが、断面の残り具合からして設面からの加圧によるものと思われる。背面には3枚の剥離痕を認める。



第37図 石器実測図1

一イ 3層の遺物(第38~41図、図版12-2~4)

- 3~69までは3層の遺物を取り上げた。3~10はナイフ形石器である。整形手法としては
- I 二側縁加工で左右対象形、すなわち二側縁に外形線の変換点をもち、両端尖鋭にしたもの……3
  - II 二側縁加工で柳葉形~切出形に整形した小形のもの……5、6、10
  - III 剥片を横位に折断し、折断面に調整を施すもの……8
  - IV 細別可能と思われるが、遺存状態が悪いため一側縁加工を主眼に類別したのもの……4、7、9

に分類され、また施刃部位の方向も

- I 右刃としたもの……4、7
- II 左刃としたもの……3、5、6、8、9、10

に分類できる。

I類……3

3は形態が柳葉形を呈し、全体が灰色に風化している。良好な縦長剥片を素材として、基部左縁に腹面から急傾斜調整を施し、右縁上位の腹面からの急傾斜調整で打面及び打瘤を除去している。また、右縁全縁に細かい調整を行っている。背面には1条の稜を残し、2枚の同方向からの剥離がなされた痕跡を留める。

II類……5、6、10

5は透有感のある良質な黒曜石を素材にした小型のナイフである。打面を上に行っているが、打面、打瘤部ともに除去されている。左縁下部から右縁全周に急傾斜調整を行う。左縁刃部には微細な使用痕が看取される。背面に1本の稜を残し、2枚の上位からの剥離痕を留める。

6も小型のもので、打面を下位に行っている。基部左縁には急傾斜調整を腹面から行い、右縁は腹面から背面への加圧で折取り、折取り面をそのまま素材としている。下端は背面から端面を切断し、腹面側には切断前の調整痕が看取される。左縁刃部には著しい使用痕が認められる。

10は灰色黒曜石を素材にしている。全体に風化の度合いが高く、輝度は全くない。形態的には台形石器に近いが、素材の剥片を縦位に使用していることから、この類に含めた。左縁は腹面からの急傾斜調整を、右縁は腹・背面の二方から丁寧な急傾斜調整を施している。背面への調整は認められず、また刃部は一次剥離面の縁辺を利用している。

III類……8

8はやや幅広の縦長剥片を縦位に半裁するように急傾斜調整を施し、断面三角形状を呈す。端部は横位に折取り、その部位に急傾斜調整を施す。打面部は折損しているが、打突痕をわずかに留めている。全体に風化が激しく、また被熱のため部分的に茶変している。

IV類……4、7、9

4は原礫面を多く残す灰色の黒曜石で横広の剥片を素材としている。3と同様風化の度合いは高い。基部左縁には腹面・背面双方からの急傾斜調整を実施し、打瘤部、打面を除去してい

る。また素材の形状が不安定なため凹凸の激しい刃部を形成している。素材の使い方や打面の除去法など台形石器と同様であるが、茎部の不存からこの類に含めた。

7は灰色の黒曜石で風化が著しい。素材は單段打面から剥離され、フィンジーを記こしながら背面に抜けた剥片を素材としている。背面には一部原礫面を留める。基部左縁には腹面からの急傾斜調整を施している。刃部は一次剥離面の縁辺を利用したと思われるが、右方から加工で欠失している。

9は透明感ある黒曜石を素材とした不定形な剥片で、右縁の急傾斜調整により打面及び打痕は除去されている。下縁には原礫面を留める。背面には4枚の剥離痕を留めているが、最新の1枚はステップ気味に剥離しており、顕著なリングを残す。刃部はこの最終剥離によってできた左縁剥離面を利用しており、縁辺に微細な使用痕が看取される。

11～17は台形石器である。台形石器の整形手法にはいくつかの方法が存在する。すなわち

- I 両側縁に腹面からの一方向による急傾斜調整で整形し、のち平坦剥離を施すもの……11、15
- II 両側縁の急傾斜調整が、右縁は背面から、左縁は腹面から行なわれ、のち平坦剥離を実施して整形するもの……12、14
- III 両側縁に二方向からの急傾斜調整を施すものの、平坦剥離を実施しないもの……13
- IV 一側縁のみに急傾斜調整を施し、他縁は折取り面を残すもの……16
- V IVの手法に類似するが、他縁を一次剥離面を残すもの……17

に分類される。また施刃のあり方は

- I 左刃としたもの……14
- II 左刃としたもの……11、12
- III 直刃としたもの……13、15、17

に分類される。

- I 類……11、15

11は黒曜石の横広の剥片を素材としている。右縁は直線的な急傾斜調整を腹面から行い、わずかに打裂痕を留めるくらいに丁寧に打面・打痛部を除去している。また左縁は湾曲するように腹・背面から急傾斜調整を行う。この急傾斜調整の後に右方からの平坦剥離を施し、厚さを減じている。刃部は一次剥離面をそのまま利用し、軸部に対し左下がりに湾曲・斜行している。また顕著な使用痕が看取される。全体に風化度が高く、失透色の灰色である。

15は灰色を呈する粘りのある黒曜石を用いている。左縁は折取り後、急傾斜剥離をわずかに施す。これは軸部を整形するための調整と思われる。右縁は全縁に急傾斜調整を施している。この調整により打面部を除去している。刃部には微細な使用痕を認める。11の台形石器に比較すると湾曲させるような軸部作出の調整は行われない。軸部端面に原礫面を残す。

## II類……12、14

12は11とは同巧であるが、右縁を背面からの2回の加圧で打面・打瘤を除去後、急傾斜調整をわずかに施し、この部位を打面として平坦剥離を実施している点において異なっている。また左縁も湾曲するように急傾斜剥離を施し、のち1回だけ平坦剥離を実施している。軸部は11と比較すると幅広である。刃部は1次剥離面を利用し、微細な使用痕が顕著に看取される。風化により輝度のない灰黒色を呈している。

14は逆L字形に近い形態の台形石器である。素材は透明感のある良質な黒曜石の横広の剥片を使用し、打面・打瘤部即ち右縁は大きな2回の加撃で除去している。その後、右方からの平坦剥離を丁寧に施す。左縁は湾曲するように急傾斜調整を行う。またL字端部は背面側から刃部幅の調整を行っている。刃部には顕著な使用痕と思われる剥離痕を留める。

## III類……13

13は透明感ある剥片を素材としている。打面は背面からの3回ほどの急傾斜調整で除去して右縁を整形する。左縁は腹面からの丁寧な急傾斜調整を行って、湾曲気味に整形する。刃部には顕著な使用痕を認め、軸部に対し右下がりの施刃をしている。背面には腹面・主要剥離面と同方向の剥離痕を2枚留める。軸部端面に原礫面を残す。

## IV類……16

16は良質黒曜石を素材としているが、風化により輝度のない灰色を呈している。左縁は大きく折取られており、この調整で打面・打瘤部は除去される。この後、左方からの加撃で厚さを減ずる平坦剥離が1回施されるが、ステップ気味に終わっている。右縁は腹面からの丁寧な急傾斜調整が施される。刃部は一次剥離面を利用し、S字状を呈している。微細な使用痕が顕著に認められる。

## V類……17

17は透明感ある良質黒曜石製の剥片である。剥片は腹面からの加圧で折取られ、のち2回の調整が行われている。他縁は未調整のままであるが、上縁には微細な使用痕を残している。左縁は折取らないが、台形石器の範疇に考えられるものとして、この類に分類した。

18～21は掻・削器である。18は透明感ある良質黒曜石製で、調整打面から剥取された横広剥片を使用し、端面は腹面からの加撃で折取られている。右縁に腹面からやや厚く施刃している。左縁には微細な使用痕が連続的に残っている。背面には3枚の剥離面を留めている。

19は調整打面から剥取された剥片を背面側から半割して、下縁に施刃している。右側は細調整を行い、中ほどから左側は鋸歯縁石器のような荒い調整を行う。全体に風化を認める漆黒黒曜石を素材にしている。

20は右縁に原礫面を残す漆黒黒曜石を素材にしている。調整打面から剥取された剥片の端面に腹面から急傾斜に近い調整を行い、また左縁にも4回ほどの調整を行っている。腹面には打裂痕を留め、背面には1稜と2枚の剥離痕を残している。

21は輝度のない灰色に近く風化した黒曜石製である。点状打面から剥取された三角形剥片の端面に、腹面側から細かい急傾斜調整を行って施刃する。

22は灰色を呈する風化度の高い安山岩を素材とした角錐状石器である。原礫面の未調整打面から剥取された横広剥片で、端部は背面側から折断している。折断面を下にして置くこと断面略梯形状を呈する。この折断面から背面にかけて打面部まで達する調整剥離を行い、その後急傾斜調整を行っている。腹面、折断面にはほとんど調整を行わず1面加工であり、これを特徴としている。135にも素材の使用法が異なるものの類例がありこの類に類別しておく。

23・24は鋸歯状の湾曲部をもつ鋸齒縁石器である。23は灰色の黒曜石であるが、風化により灰茶色を呈している。素材は調整打面から剥取された横広の不定形剥片を用いており、右縁に2箇所を鋸歯部を作出する。腹面には打裂痕を留め、背面には腹面とは逆方向からの2枚の剥離痕を留める。

24は風化の著しい安山岩の薄い剥片を素材としている。端部に腹面から施刃し、4箇所を鋸歯状の湾曲部を作出している。左・右端は大きく折損している。

39～41は影器である。39は縞状の斑品のある薄手・良質の剥片を素材としているが、風化の度合いが高い。素材は、除去された打面部を下位に使用し、端部は腹面からの急傾斜に近い剥離で打面調整を行う。この部位から腹面に2回ほどの平坦調整を行い、頂部から左縁部に2回の櫛状剥離を行って影刃部を作出する。また反対の右縁には腹面側から連続的なやや厚い調整を施し施刃している。影器と削器の機能を併せ持った石器と認識される。

40は灰色黒曜石で、全体に風化し輝度を喪失している。調整打面から剥取された剥片の端部を、腹面から急傾斜に近い調整で施刃して搔器として機能させ、その後、折取って角錐状の素材として再生し、端面に2回の櫛状剥離を施し、影刃部を作出している。

41は調整打面から剥取された分厚い四角錐状の形態を示す剥片を素材としている。影刃部は1回の櫛状剥離で作出され、使用痕と思われる剥離が2回認められる。また影刃面に隣接する端面には数回の階段状剥離を実施している。

42～44は石錐である。42は灰色を呈する輝度のない黒曜石で、風化の度合いが高い。打面部は除去され半割されているが、本来は横広の剥片と思われる。剥片を半割した後、打面部を腹面からの2回の加撃で錐部・尖頭部を作出し、さらにこの部位に左方からの2回の調整で錐部を整えている。錐部の断面は梯形状である。

43はやや幅広の剥片端部を利用し、腹・背面から細調整を行って錐部を作出している。また錐部の磨滅によるものか腹面から尖頭部に4箇所の細調整を行い、再生している。全体に風化の進んだ黒曜石である。

44は原礫面を残す風化の進んだ黒曜石である。形状は角錐状を示し、線状打面から調整された石核の調整剥片と見受けられる。打面・打痕は背面からの加撃で除去され、この部位に細調整を施して錐部を作出している。錐部の断面は梯形状をなす。

25～38、45～55、67は剥片及び使用痕のある剥片である。25は漆黒色の黒曜石であるが茶黒色に風化している。左・右縁および下位端部は背面からの加圧で折取られる。また打面部も同様加圧で切除して整形する。左縁に使用による連続する微細剥離痕を留める。やや大きな石核から剥取されたもので、背面には直交する2稜と3枚の剥離痕を残している。

26は小石核から剥取された原礫面を多く残す剥片で、下縁部に使用による連続する顕著な剥離痕を残す。打面は狭小であるが、単設の調整打面である。漆黒の黒曜石で風化により輝度が少ない。

27は漆黒色の良質な黒曜石礫を素材としているが、わずかに風化を認める。自然打面から剥取され、左縁上位に微細な使用痕を残す剥片である。腹面には打裂痕を留める。

28は漆黒黒曜石で、全体に風化し灰茶色を呈している。小さな盪形の形態を示し、背面中央部に原礫面を残す。軸部両縁に腹面からの微細な連続した剥離痕を残す。打面・打痕部は調査時の欠損で不明。

29は透明感のある良質黒曜石で、全体に風化が進み輝度が少ない。打面部は背面側からの2回の加撃で切除し、稜をなす。この部位に剥離痕を留めている。

30は灰色に風化した黒曜石剥片で、狭小な打面から剥取されている。端面は腹面からの加圧で折取り、さらに右縁下端に調整が施され錐部のような形状を見せている。左縁に連続する微細な使用痕が看取される。

31は漆黒色の良質な黒曜石を素材にした剥片で、原礫面を留めるものの2稜をもつもので端正な範疇に入る。全体的に風化しており、経年を感じさせる。打面は未調整で原礫面を残し、点状である。周縁に微細な剥離痕を残す。

32は薄い縞状の斑晶をもつ漆黒色黒曜石であるが、風化により灰茶色を呈している。調整単設打面から剥取された縦長剥片で、打面部に打撃痕を半球形に小さく残す。背面に5枚ほどの剥離痕を残すが、石質により凹凸が激しい。周縁に微細な使用痕が看取される。

33は細かい縞状の斑晶をもつ良質な黒曜石で、灰茶色に近く風化している。打面は複数の調整打面であり、やや横長の剥片である。腹面には打裂痕を留め、端面は腹面からの加圧で折取り、未調整のままである。周縁に微細な使用痕を残す。台形石器の素材としてふさわしい剥片である。

34は風化著しい安山岩製剥片で形状は三角錐状をなす。素材は腹面尖頭付近を打点として見られる。その後右方から大きく加撃し、また上面は折取っている。素材の剥離の関係から尖頭部は三角形状をなし、錐部の可能性も併せ持っている。

35は自然打面から剥取された一部原礫面を残す縦長剥片で、若干風化している。腹面には打

裂痕を残し、背面には上・下両面からの剥離痕を5枚留めている。周縁にわずかに使用痕が香取される。

36は透明感のある黒曜石剥片で、全体に風化を認める。打面は調整打面で、腹面に打瘤・打裂痕を残す。また打瘤下でステップ気味に剥離したため、急に厚さを減じている。周縁に使用痕を認める。

37は繡状の珪晶をもつ黒曜石の不定形剥片である。狭小な調整打面から剥取されており、一部に原稜面を残す。背面には打点を転位して剥取した痕跡を7枚残している。

38は透明感ある黒曜石で、全体に風化を認める。単設打面から剥取され、端面は腹面からの加圧で折取っている。腹面には低い打瘤と打裂痕を留める。

45は右縁に原稜面を大きく残す断面三角形の剥片で、素材は透明感ある黒曜石を用いている。端面は背面からの加圧で折取り、この部位に腹面から2回の調整を行う。

46は漆黒黒曜石を素材とした剥片で、風化し輝度が少ない。狭小な調整打面から剥取され、端部はステップ気味に収束する。背面右縁には原稜面を残し、3枚ほどの剥離痕を残す。

47は繡状の珪晶をもつ灰茶色黒曜石で全体に風化を認める。素材は楔形の形状を示す。腹面左方からの加撃で剥取されたやや狭小の剥片で、剥取後打面部は腹面からの加圧で除去される。この腹面の端末に使用痕が認められる。背面には調整打面から剥取された痕跡を残す。

48は透明感ある黒曜石剥片で、単設打面から剥取されている。端面は背面からの加圧で折取っている。

49は良質黒曜石であるがわずかに風化して輝度をなくしている。調整打面から剥取された寸詰まりの剥片である。背面には打点を転位した剥離痕が3枚香取される。

50は全体に風化した透明感ある黒曜石を素材にしており、周縁に僅かに使用痕が香取される。

51は白い繡状の珪晶をもつ黒曜石を素材にしている。調整打面から剥取され、のち打面周縁は複数回調整し、その結果、階段状となっている。両縁に微細な使用痕を認める。

52は漆黒色の黒曜石であるが、風化により灰茶色を呈している。単設打面から剥取され、腹面に打裂痕を留める。背面には鋭い稜をみせ、打点を転位した3枚の剥離痕を残す。両縁下位に使用痕を認める。

53はやや輝度のある黒曜石を素材とした剥片で、右縁に原稜面を残している。端面は背面からの加圧で折取っている。

54は風化著しい黒曜石製剥片で、狭小な自然打面から剥取されている。端面は背面からの加圧で折取る。

55は安山岩製剥片で、多孔質の質の無いもので、観察が困難なくらい剥離面が著しく風化している。4層出土の2に類似するが、接合等は認められない。

67は無珪晶質安山岩の剥片で、稜線は鋭いものの風化が激しく爪先でキズが行くほどに進行している。調整打面から剥取されており、端部は腹面からの加圧で折取られている。腹面には打裂痕が残り、打瘤は低い。

56～66は細石刃である。すべて黒曜石製で殆どが欠損している。56～60は頭部の資料で、58・59は稜を1本有し、右縁には稜と直交する剥離痕を残す。即ち細石刃剥取初期段階の資料である。61～65は中位の資料。61の右縁には顕著な使用痕を残している。66は尾部の資料である。

68は無疵品質安山岩製石核で67同様の風化の度合いを示している。打面は調整しており、ネガティブな剥離痕が看取される。対向する2枚の剥離痕を留める。背面は原礫面を残している。

69は砂岩製の異形石器である。現存長35mmほどで、断面略楕円形を呈している。凸面頂部はわずかに平坦面をもち、対向する面は平坦になっている。金素母を含む砂岩で周辺から採集される原石と比較すると形状において著しく異なっており、用途不明ながらも人為によるものとして異形石器とした。なお図版11-6に出土状態を掲載しているが、立位で出土した。なお直近から14の台形石器（図版11-5）が出土している。

一ウ 2層の遺物（第42～61図、図版13～23）

70～327までは、2層出土の石器を取り上げた。

70～88はナイフ形石器である。3層の分類基準に準拠しながら分類すると

I 二側縁加工を基本とし、

一a 左右対象にするため両縁に2箇所の変換点をもち両端尖鋭にしたもの

……71～73、88

一b 変換点が1箇所、あるいはないもの……70、78

II 二側縁加工で剥片を切断し、切出形、三角形を呈する小形のもの……75～77、79、81

III 剥片を横位に折断し、折断面に調整を施すもの……85、87

V 縦長剥片を素材に一側縁のみ調整し、他縁は一次剥離面を刃部として利用するもの

……74、80、82～84、

VI 横広剥片を素材に、刃部を除く二側縁全縁に調整を施し、ノミのような片刃の形態を呈するもの……86

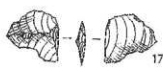
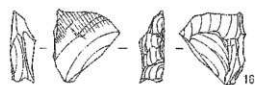
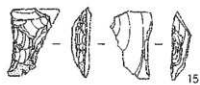
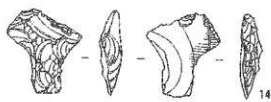
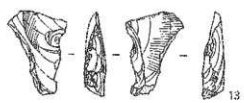
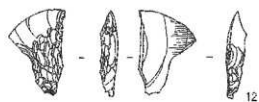
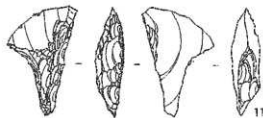
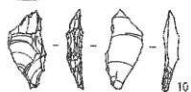
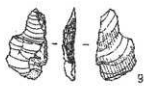
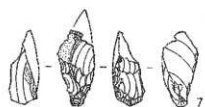
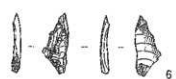
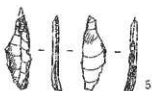
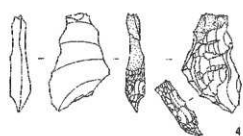
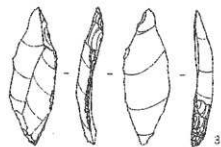
に分類ができる。また施刃の部位は

I 右刃……70、71、78、80、81、84、85、87、88

II 左刃とするもの……72～76

である。





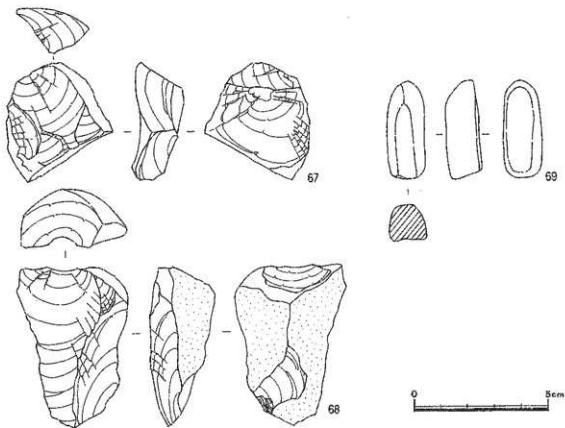
第38图 石器实测图2



第39图 石器实测图 3



第40图 石器实测图 4



第41図 石器実測図5

I-a類……71～73、88

71は薄手のやや横広の剥片を素材に、打面部を上位に位置させている。左縁全縁と右縁下位に急傾斜調整を施す。打面部は急傾斜調整により除去される。右縁上位を刃部とし、使用痕を認める。背面には2稜を残し、3枚の剥離痕を留め、一部に原礫面を残す。

72は木葉形の形態を示す。素材は灰茶色黒曜石で、全体に薄く風化を認める。打面部は下位に位置し、背面右縁、左縁基部に腹面からの急傾斜調整を行い、打面・打瘤を外し整形する。刃部は左縁にあり使用痕を認める。背面に1稜を残し、同方からの2枚の剥離面を留める。

73は原礫面を大きく残す素材を使っている。打面は左縁上位にあるが、急傾斜調整によって除去・整形する。左縁基部にも急傾斜調整を施す。

88は形状が台形状をなすが、素材の使用法からこの類に含めた。素材は打面部を下位にし、左縁全縁と右縁下位に急傾斜調整を実施して、打面部を除去し整形・調整する。背面には1稜と2枚の剥離面を残している。灰色に近い黒曜石を用いるが、風化で全体が灰茶色に変色している。

I - b類……70、78

70は原礫面を一部に残す縦長剥片を素材とし、打面部を上位に用い、打面、打痕は除去している。背面左縁上位と右縁下位に急傾斜調整を施す。急傾斜調整は腹面から行うが、左縁において1回だけ背面からの調整を行っている。また腹面基部に平坦剥離を左右両方から行う。右縁を刃部として使用痕を留める。

78は左下に原礫面を有する。左縁全縁及び右縁下位に急傾斜調整を施す。左縁の調整で先端寄りには背面から行い、打面を除去し、下位は腹面から調整する。また腹面基部には左方から基部調整を3回施す。

II類……75~77、79、81

75は不透明灰茶色黒曜石の剥片を使用し、打面部を上位にし、左縁下位、右縁上位に急傾斜調整を実施し、打面部を除去し整形する。刃部は左縁上位に一次剥離面の縁辺をそのまま利用する。

76は体部上半に原礫面を残し、刃部としている。打面部を上位にし、左縁下位、右縁全縁に急傾斜調整を施す。左縁の調整は腹・背両面から行う。

77は先端部を折損している。灰茶色不透明黒曜石を素材とし、左縁上位と右縁下位に急傾斜調整を行う。背面には2稜を見せ、右縁側に原礫面を留める。

79は先端部を折損する。背面右縁上半部は急傾斜調整を施し、下半から基部にかけて傾斜調整を行う。基部左縁は折取って整形している。刃部には使用痕が看取される。

81は良質な黒曜石剥片を素材にしている。素材とした剥片は大きかったものと思われ、背面の後縁部まで急傾斜調整を施し、幅を約半分までに細くしている。背面右縁下位にも急傾斜調整を施し整形する。刃部には微細な使用痕が残る。

III類……85、87

85は端部にかけて厚く剥離された剥片を素材とし、背面左面に原礫面を残している。剥片の打面方を横位に折取り、腹面から急傾斜調整を行う。右縁には連続的な傾斜調整を施し、割器として再機能させている。また左縁には極状剥離を実施して彫刀面としている。同様手法は39の資料にも認められる。

87は灰黒色の失透質黒曜石で、複数の調整打面から剥取された縦長剥片を素材にしている。刃部は右縁に位置し、微細な使用痕が認められ、左縁には急傾斜調整を施して整形している。背面には2稜、4枚の剥離痕が看取される。腹面には打痕を大きく残している。

V類……74、80、82~84

74はやや幅広の剥片を素材に、打面部を上位にして調整する。右縁全縁に急傾斜調整を背・腹両面から行い整形する。先端部は折損する。

80も先端を折損する資料である。背面には大きく原礫面を残す。左縁上位は折取り、下半には急傾斜調整で成形し、打面部を除去する。刃部は右縁全体に及び、素材面をそのまま利用している。

82は調整打面から剥取された良質で肉厚の黒曜石剥片を素材としている。背面左縁下位には急傾斜調整を施すが、打面・打痕は残し、上位は調整後折損している。右縁刃部も背面上位からの加圧で折損している。

83は体幹中ほどまで折損した資料である。素材は打面部を上位に用い、左縁に急傾斜調整を施して整形し、他縁は一次剥離面をそのまま用い刃部とする。上半は左方からの加圧で折損している。透明感ある黒曜石で全体に風化している。

84は灰茶色不透明の黒曜石を用い、左縁寄りに原礫面を留める。背面左縁上位は背面側からの急傾斜調整を行い、右の直線的な一次剥離面を刃部としている。先端部は折損している。

#### Ⅵ類……86

86は楔のような形態を呈する資料で、素材の使用法からは台形石器が至当とも思われるが、刃部のあり方が特異であり、この類に含めておく。素材はやや幅広の剥片を用い、左縁は急傾斜調整によって打面部を除去している。右縁は折取りと急傾斜調整で整える。刃部は湾曲し、使用痕を看取できる。素材は縞状の珪晶をもつ黒曜石で、風化により輝度を無くしている。

89～112は台形石器である。調整加工の手法から分類すると

- I 両側縁に腹面からの一方向による急傾斜調整で整形し、のち平坦剥離を施すもの……90、94、98、100～102
- II 両側縁の急傾斜調整が、右縁は背面から、左縁は腹面から行なわれ、のち平坦剥離を実施して整形するもの……99、103～105、107～109
- III 両側縁に二方向からの急傾斜調整を施すものの、平坦剥離を実施しないもの……96、97
- IV 一側縁のみに急傾斜調整を施し、他縁は折取り面を残すもの……91～93、95、110
- V IVの手法に類似するが、他縁を一次剥離面を残すもの……112
- VI 両側縁を平坦剥離に近い調整で仕上げるもの……106
- VII 小剥片を素材としたもので、百花台Ia型類似のもの……111
- VIII 横広の剥片を素材に、切出し型の形態を示すものの、平坦剥離に近い調整で仕上げるもの……89

に類別化され、また、施刃のあり方からは

- I 右刃とするもの……89、97、98、106
- II 左刃とするもの……90、93、94、99、101
- III 直刃とするもの……95、96、100、102、105、107、111

と類別化される。

#### I類……90、94、98、100～102

90は縞状の珪晶をもつ黒曜石の大形横長剥片を素材にしている。背面下部には原礫面を残す。右縁は腹面からの急傾斜調整を施し、打面を除去している。また右縁背面側から2回の加撃を

行っているが、これは器厚を減ずる平坦剥離のための打面形成である。左縁は一次剥離面を利用するが、3回ほどの調整で整形・調整している。刃部は斜交し、使用痕を顕著に認める。

94はやや分厚い横広剥片を素材としている。背面左縁の急傾斜調整は腹面より行い、打面部の除去し、右縁も腹面より2回ほどの細調整を行う。この面には一部原礫面を残している。この調整により輪部は身の厚い尖頭状をなすため、わずかな平坦剥離を実施している。腹面には打瘤の高まりが看取される。刃部は背面側からの加圧で折損し、体幹にたいし左下に斜交する。顕著な刃こぼれが看取される。

98の右縁は急傾斜調整により打面部を除去し、左縁も急傾斜に近い細調整を行い背面上部にまで調整が及んでいる。また基部から背面まで及ぶ調整を行う。刃部は左端を一部折損する。

100は楕形をなす資料で、大形の部類に属する。左縁は腹面からの急傾斜調整で打面部を除去し、のち背面に平坦剥離で調整し、また右縁も同手法で調整する。

101は背面左縁の急傾斜剥離を行った後、左方から平坦剥離で厚さを減じ、爾後右縁の急傾斜調整で打面部を除去している。また先端部に3回ほどの背面からの対向する細調整も実施されている。刃部は体幹に対しやや左下に斜交する。

102は背面左縁の腹面からの急傾斜調整により打面部を除去し、右縁も腹面からの調整で成形する。その後、右方から平坦調整を施す。刃部は大きく折損している。

Ⅱ類……99、103～105、107～109

99は打面部を腹面からの急傾斜調整で除去し、背面右縁は背面側からの急傾斜調整で整形する。その後、平坦調整を実施して厚さを減じている。

103は背面右縁の背面からの急傾斜調整で打面部を除去するものの、腹面には打裂痕を残している。その後、背面に平坦調整を実施し、厚さを減じている。左縁は腹面から急傾斜調整を施し、整形・調整する。

104は刃部を大きく欠損する資料である。背面尾部に一部原礫面を留めるものの、大きな一次剥離面が2枚ほど看取され、さらに調整痕も背面まで及んでいる。背面側の細調整は少ないものの、打面除去後の平坦剥離が右方から1回施された痕跡を残す。左縁は腹面から急傾斜調整で整形する。腹面は左方からの大きな調整剥離で打面部を除去し、その剥離痕は右縁まで届いている。

105は良質横広剥片を素材に、右縁は腹面からの急傾斜調整で打面部を除去するものの、打裂痕を留める。その後、右方から平坦調整を行う。左縁は腹面からの加圧で折取り、のち細調整を施して湾曲部を作出する。

107は右縁の背面からの急傾斜調整で打面部を除去し、その後、平坦調整を実施し厚さを減じている。左縁は腹面からの急傾斜調整で湾曲部を作出し、整形している。刃部には顕著な使用痕を残している。

108は良質な透明感ある漆黒黒曜石を素材にしている。背面右縁は大きな剥離で打面を除去し、その末端は腹面中央まで及んでいる。その後、平坦調整を施す。左縁は腹面からの急傾斜

調整を施し、のち平坦調整を実施している。刃部は一部折損するものの、顕著な刃こぼれを残している。

109は左側に作図したのが背面で、石核からの一次剥離による剥離面はポジティブ面をなし、その後、この剥片は打面から剥取されている。すなわち半割離を素材とした石核からの初期段階の剥片と想定される。背面右縁は背面からの急傾斜調整で打面部を除去し、その後、背面に右方からの平坦調整を実施して背面ポジティブ面の打瘤部の厚さを減じている。一方左縁は下位にわずかに湾曲部をなす調整を施して整形・調整する。端部は腹面からの細調整で仕上げている。刃部には顕著な使用痕を残している。

#### Ⅲ類……96、97

96は灰色黒曜石を素材とするが、風化により灰茶に変色している。扁平な横広剥片を使用し、急傾斜調整によって打面部を除去している。右縁は全縁に急傾斜調整を施す。刃部には顕著な使用痕を残している。

97の打面部は腹面右上位にあり、腹面からの急傾斜調整によって除去している。左縁は腹面からの急傾斜調整により湾曲部を作出し整形する。刃部は体幹に対し右下に斜交する。また顕著な使用痕が看取される。

#### Ⅳ類……91～93、95、110

91は背面に対向する5枚の剥離痕をもつ横広の剥片を利用している。素材は漆黒・良質の黒曜石であるが、風化が進んでいる。左縁は背面からの加圧で折取り、右縁は背面からの急傾斜調整で打面部を除去するが、完全ではない。基部は背面から折取っている。刃部は体幹にたいし直刃で、使用の痕跡を認める。

92は右縁に急傾斜調整を施す例で、左縁は縦形に折り取られ、上位は細調整を施す。先端は腹面からの加圧で折損し、刃部は消失している。素材の用い方よりしてこの類に含めておく。

93は腹面左縁上位に打裂痕跡をわずかに残す例で、素材の用い方よりしてこの類に含めた。背面には右方からの剥離による痕跡を2枚残し、1稜をなす。右縁は腹・背面より急傾斜調整を施し、打面除去・整形をしている。左縁は腹面からの加圧で折取り、未加工で使用する。刃部は体幹に対し左下に斜交し、顕著な刃こぼれを認める。灰色を呈する黒曜石であるが、風化により輝度をなくしている。

95は軸部を折損している。灰色黒曜石を素材としているが、風化により輝度がない。打面部は急傾斜調整により除去し、右縁は折取って仕上げている。軸部は腹面からの加圧で折損している。

110は刃部を右方からの加圧で大きく折損している。灰茶色の黒曜石を原材料に使用し、風化が著しい。左縁は急傾斜調整で仕上げ、右縁は軸部中央まで及ぶ剥離で調整し、のち上位を急傾斜調整で整形。腹面は左方からの大きな加圧で整形する特徴的な例である。



V類……112

112は台形石器未製品、あるいはその素材としてこの類に含めた。透明感ある良質な剥片で、端部まで残っている。左縁の打面部は背面からの急傾斜調整によって除去されるが、打瘤部が大きく残っている。その後、平坦調整を施している。調整はここまでで中断し、右縁部は未調整のままである。上・下縁に微細な剥離痕を留めている。

VI類……106

106は他の台形石器とは整形・調整手法が若干異なっている。すなわち急傾斜調整を多用することなく、平坦剥離に近い調整で整形している。まず素材の剥片は背面側からの加圧、あるいは細調整で打面部が除去され、そのため腹面左縁はステップ気味に収束する剥離面を残し、さらに腹面右縁は鈍齒縁を作出するような剥離で調整している。その後、背面側を左右からの平坦剥離で細調整して仕上っている。両縁とも急傾斜調整で整形・調整していない点、他の資料と大きく異なっている。

VII類……111

111は小型の台形石器である。素材は灰茶色の黒曜石で、風化が進んでいる。素材は横位に用い、右縁の急傾斜調整で打面部を除去している。左縁も腹面からの同様調整で仕上っている。刃部は幅広い輪郭に対し、左下に斜交している。

VIII類……89

89は幅広いやや分厚い剥片を素材にしており、風化で輝度をなくしている。背面の右縁は腹面側から細調整を施し、左縁は打面を利用して平坦剥離様の調整を行い、腹面は打面側から打瘤を除去する調整を丁寧に行っている。また左縁から2回の大きな剥離痕を残す。これらの調整によって、体幹断面は内厚の菱形を呈している。刃部は右下がりに斜交し、対向する剥離によって作出された一次剥離面を使っている。

113～115は影器である。113は調整打面から剥取された腹面に打裂痕をとどめる分厚い剥片を素材にしている。剥片端部は原礫面を残し、この部位を打面として楕状剥離を4回行い、影刀面を作出している。最初の剥離はステップ気味に終わっており、以後の剥離は再生のための細調整である。

114は捻れた長方形を呈する黒曜石剥片を素材に、上・下の調整した打面から上位は2回、下位からは1回の楕状剥離を行って影刀面を作出している。

115は原礫面を多く残す黒曜石の大形剥片を素材としている。剥片は風化により灰色を呈するが、本来は光沢のある灰色黒曜石である。打面部は腹面からの3回の大きな剥離で除去される。その後この部位を打面として、楕状剥離を7回行って影刀面を作出している。

116～126は石錐である。116は安山岩製残核を転用したもので、錐部作出のための細調整を施して仕上っている。錐部断面は梯形をなす。

117は漆黒黒曜石のやや分厚い剥片を素材にしている。打面は背面右縁下位に位置するが、背面の二次調整によって除去されている。剥片端部、すなわち背面左縁は3回の折取りで成形され、上位ではこの折取り面を打面として、先端部に細調整を施し鉋部を作出している。断面は三角形形状を呈している。

118は漆黒色黒曜石の厚手横広剥片を素材にしている。石材は薄い白の斑晶を見せるが、全体に風化し輝度が落ちている。打面は腹面右側縁の上方からの加撃で除去され、さらに上位及び下位は背面からの調整で整形されている。この調整と対面の細調整で鉋部を上下2箇所作出している。断面はともに三角形形状を呈している。

119は薄手良質の漆黒黒曜石剥片を素材としている。剥片は調整打面を持つ石核から剥取され、端部に細調整を施して鉋部を作出する。また左縁上位に急傾斜調整で施刃し、掻器の機能も兼ね備えている。

120は透明感のある良質黒曜石を素材にしている。打面は腹面側から除去し、対向する面には急傾斜調整により抉り状に調整し、鉋部を作出している。鉋部断面は梯形を呈する。

121は原礫面を残す風化著しい黒曜石の剥片を素材にしている。素材は三角形形状をなし、縞状の斑晶をもつ。背面上位に腹・背面から急傾斜の細調整を施して鉋部を作出する。断面は略三角形形状をなす。

122は粘りのある灰色黒曜石の横広剥片を素材にしている。左の作因が腹面である。腹面は剥片剥取後、右方からの大きな剝離で整形し、この部位を打面として背面の調整を施している。先端部は背面からの細調整により鉋部を作出している。断面は略梯形をなす。

123は自然打面から剥取された剥片の側縁部に、腹・背面から細調整を施し鉋部を作出している。鉋部の断面は平行四辺形状をなしている。

124は灰茶色の黒曜石横長剥片を素材にしている。剥片端部は大きく折取られ、腹面から急傾斜に近い細調整が施され、対向する縁辺には整形のための細調整を施して鉋部を作出する。鉋部断面は三角形形状をなす。

125は良質の漆黒黒曜石を素材とし、剥片剝離技術、調整手法は台形石器の手法と同様である。剥取された剥片は急傾斜調整によって打面部が除去されている。この部位に対向する縁辺に腹面から細調整を行い鉋部を作出している。鉋部の断面は略梯形形状をなす。この剥片は台形石器の刃部となる一次剝離面の未成形若しくは、製作途中の折損によるものか刃部面の整形がなされなかったため、転用したものと推察される。

126は自然打面から剥取された原礫面を多く残す剥片の両縁を折取り、この部位に細調整を施して鉋部を作出している。鉋部断面は梯形をなしている。

127～130、169は掻器である。127は光沢ある良質の黒曜石を用いている。背面は1回の打撃で打削されているが、ネガ・ポジ両相が残るように複雑に削れている。この原材は元々石核に使われ、その残核を利用して端部に急傾斜調整を施すことによって掻器として再生している。

128は灰色黒曜石の厚みがある剥片を用い、側縁に腹面からの急傾斜調整による施刃をしている。

129は漆黒黒曜石の自然面を残す剥片を用い、腹面からの打撃で打瘤を除き、同じ面からの急傾斜調整によって施刃をしている。

130は良質黒曜石の一部自然面をもつ横広剥片を用いている。上面は、正面から3回の加撃により打瘤を除去し、背面には同方向からの加撃による2枚の剥離面を残す。腹面からの急傾斜調整によって施刃をしている。

169は灰色の黒曜石で風化により輝度をなくしている。打面部は腹面からの加圧で折取り、剥片端部に5回の細調整で刃部を作出している。また右縁の端面側から槌状剥離を施して、影刀面を作出して、彫器としての機能をもたせている。

133から137は角錐状石器として一括した資料である。133は舟底状を呈する石器である。腹面を下に据えると背面中央に1稜をもち、周縁から細調整を施す。調整は稜線まで到達するもので、その後、急傾斜調整を全周にはないが実施している。腹面は2回ほどの剥離が認められるが、これは打瘤を除去する調整であろう。左図の右端には腹面から剥離した痕跡が2条認められ、細石核の可能性も指摘できるが、2面加工の角錐状石器であろう。素材は灰色黒曜石で風化により輝度を消失している。

134は灰色を呈する黒曜石であるが、風化のため輝度を消失している。角錐状を呈する石器で、断面は梯形を呈する。四面体をなしているが、調整された面はb面の一面だけである。a面は原礫面を残し、下半は下位からの剥離を行うが、a面中位でステップで収束している。b面では左右両方向から細調整を行って調整している。細調整は、下半は右方からの剥離が左縁まで達し、右縁は急傾斜調整で整形する。逆に上半は左方からの剥離が右縁まで達し、左縁側を急傾斜調整で施して仕上っている。c面もa面同様下位からの調整を施す。d面では上位からの槌状剥離を施し、腰部まで抜けている。この剥離によりb面端部の剥離面は切られている。d面の調整から彫器として、あるいは切削器として機能した可能性が最も強い。d面の槌状剥離が最終調整であるところからすると、初期の機能が果たし得なくなったため機能転化したのであろう。この資料については調整手法等からしてナイフ形石器の一種と考えられるものの、類例に乏しいためこの類に含めておく。

135はやや風化した黒曜石剥片を素材にしている。剥片は自然打面から剥取された横広剥片を縦に折断して、その折断面から細調整を施す。折断面を下にして置くと、断面略二等辺三角形形状を呈する。細調整は稜上まで達する丁寧な調整で、その後急傾斜調整を施す。腹面には打瘤を留める。折断面及び腹面には調整は施していない。稜上に使用痕跡のやや連続する剥離面が看取され、割撃の機能を類推させる資料である。

136は黒曜石剥片を素材にしているが、風化により輝度を消失している。調整打面から剥取された横広の剥片を横に折断し、この部位に腹面側から急傾斜に近い細調整を行う。背面には

腹面と同方向の2枚の剥離痕を残している。

137は灰色黒曜石を素材にしているが、風化により輝度を消失している。腹面を下にして置くと断面三角形を呈する。この3面の一次剥離面に細調整が実施されるのは1面である。打面は狭小な打面で、剥片は縦長のやや分厚い形状を示している。剥片剥取後、腹面裏部に階段状になる数回の加撃を行って打瘤を除去している。背面左面は左縁からと中央稜線から斜め細調整を施す。右縁に微細な使用痕が看取される。角錐状石器として類別したなかで、この資料のみが調整手法を異にしている。

138～139は周縁加工の石器である。138は良質の黒曜石を用い、腹面は主要剥離面をわずかに残すが、周縁より平坦剥離による調整を行う。背面も同様な手法で調整する。

139は自然打面から剥取された良質漆黒の黒曜石剥片を用い、周縁より丹念な平坦剥離の調整を両面に加えている。打瘤部は厚く背面で凸状を見せる。

140～143は鋸歯縁石器である。140は良質黒曜石の自然打面から剥取した剥片を素材としている。打面部分には剥取作業の前後に不分明であるが直接打法による調整が数回行なわれている。下縁に使用痕様の巾広な湾曲部が2箇所（aでは腹面→背面、bでは背面→腹面）認められ、背面左縁には両面への施刃をしている。

141は安山岩の点状打面から剥取された横広剥片を用い、腹面から4回の剥離で施刃をしている。

142は黒曜石の複数打面から剥取された全体に風化が進んだ横広剥片を用いる。腹面には大きな打裂痕を残す。打面のa部分は細部調整剥離が施され、b部分はa部分の調整後に右からの加撃により打面調整を行った痕跡が残っている。施刃は背面から3回の大きな傾斜剥離によって行われている。

143は複数打面から剥取された黒曜石の風化が進んだ縦長剥片を半折して用いる。左縁上部a部分に使用痕を残し、左縁b部分に背面から2箇所に加圧による施刃をしている。

144～149は抉入り石器である。144は漆黒黒曜石の自然打面から剥取した小さな剥片を用い、背面からの直接打法により凹刃の機能部を作出している。背面には自然面を残している。

145は自然面をもち打面部を腹面からの加圧で折取った剥片を用い、左縁部に腹面からの加圧によって湾曲した刃部を作出している。

146は黒曜石の自然打面から剥取され、腹面に打裂痕が顕著に残った厚手剥片を用いる。腹面からの加圧によって背面左縁部に湾曲した刃部を作出し、右縁上部に抉り部を作出している。

147は左方が腹面で、素材は灰色黒曜石のやや厚みのある不定形剥片を用い、末端部に背面から急傾斜剥離に近い調整で凹刃部を作出している。剥片の上縁は背面からの加圧で折損している。

148は灰茶色黒曜石の削片を用いる。左縁の打磨・打面は折取りで除去され、下縁には自然面を残す。右縁と上縁に傾斜調整による機能部を作出している。上縁の左端は使用のためか折損している。

149は黒曜石の背面に自然面を多く残す削片を用い、打面部の腹面から加圧して凹刃部を作出している。右縁上位に使用痕がみられる。

150は黒曜石のスポールである。ねじれた接相で断面は三角形を呈し、稜線上から細調整を施している。腹面は他面に比べ風化の度合いが新しく、これは石器が再利用された結果であろう。彫器のスポールと思われる。

151～154は細石刃核である。151は黒曜石を用い、全体に風化が進み輝度をなくしている。削片系の石核で半割した素材のネガティブ方を使っている。側面調整は積極的にには実施していないが、背面に原稜面を留めるもの、横・下方からわずかに調整を行う。打面は横から1回の加撃で作出し、細石刃剥離痕は6枚を残している。細石刃剥離面と打面の角度は90度以上の鈍角である。

152は漆黒黒曜石の角礫を素材に片面の上下、左方から側面調整を施し、もう一方の面は自然面を残している。左方からの調整により背縁を有する。打面調整は実施されてなく、自然面を打面とし、細石刃剥離面に6枚の細石刃剥離痕を残している。細石刃剥離面と打面の角度は90度に近い。

153は1区での表採資料である。黒曜石削片を素材に下縁に入念な調整を施している。打面は細石刃剥離面側から再生させているが、その後の細石刃剥取は行っていない。打面は半円状を呈し、細石刃剥離面に7枚の細石刃剥離痕を残し、30mm強の細石刃が剥離されている。背面には原稜面を留める。全体観は円錐形状で全体に風化している。

154は灰茶色黒曜石を素材とし、原礫は亜円礫である。石核は削片系石核で、半割されたネガティブ方の素材を使用している。その後、端部に左右から調整し、打面を作出している。背面調整は先行する剥離面になっており、積極的にには実施していない。細石刃剥離面は初期段階あるいは再些段階であろうかステップ気味に大きく剥離したため、機能を中断させている。素材の取り方、用い方、細調整手法、形状等151と同様である。

155～168は細石刃スポール、細石刃である。155は黒曜石を用いた細石刃核から細石刃剥離工程の最初に剥離されたスポールである。断面は三角形を呈して両端を欠き、2面に細石刃核作成時に行われた細調整の剥離を残している。

156は透明感がある黒曜石を用いる。下部を除いた後に腹面から背面への加圧による急傾斜調整を施している。断面は台形を呈する。

157は薄く透明感がある黒曜石を用いる。下部は腹面からの加圧によって折取り、断面は台

形を呈する。

158は透明感がある黒曜石を用いる。下部は腹面からの加圧によつて折取り、断面は薄く台形を呈する。両側縁に微細な使用痕を認める。

159は透明感がある黒曜石を用いる。下部先端を欠き、左縁と右縁下部に使用痕を残し背面に4枚の剥離面を残している。

160は透明感がある黒曜石を用いる。今回の調査で出土した中では巾が広いものである。打面は自然面、下部は腹面からの加圧により折取る。両側縁に使用痕を残し、断面は台形を呈する。

161は透明感がある黒曜石を用いる。下部は背面からの加圧により折取るが、腹面に圧が抜けた剥離痕を留め、断面は三角形である。両側縁に微細な使用痕を残している。

162は半透明の黒曜石を用いる。下部は背面からの加圧により折取り、断面は台形を呈する。右縁に石核調整面を残し、細石刃剥離面右端部より剥取されたものである。左縁には微細な使用痕を残している。断面は台形を呈する。

163は半透明の黒曜石を用いる。左縁寄りの剥離は左方から横位の石核調整を施した際の剥離痕である。従つて本資料は先の161とは逆の細石刃剥離面左端部より剥取されたものである。ほぼ完形であり、両側縁にわずかに使用痕を残している。断面は台形を呈する。

164は灰色黒曜石を用いる。端末部に腹面から急傾斜調整を施し、打面には2枚の調整痕を残している。断面は三角形を呈する。

165は黒色黒曜石を用いる。上端は背面から、下端は腹面からそれぞれ折取っている。両側縁に微細な使用痕を残している。断面は台形を呈する。

166は透明な黒曜石を用いる。左縁寄りに石核調整剥離痕を残す162と同様のものである。上下端を背面からの加圧で折取っている。断面は台形を呈する。

167は透明な黒曜石を用いる。先端が尖る形状であり、両側縁に微細な使用痕を残している。完形であり、断面台形を呈する。

168は灰色黒曜石を用いる。今回の調査で出土した細石刃の中では法量が大きい部類に入るものである。端部は折取られている。断面は三角形を呈する。

細石刃は総数で151本（内1本は試掘1調査区出土）出土しており、遺存の部位は完形7本、頭部58本、中位63本、尾部23本である。使用痕の有無は全体で114：37であり、多くの遺物に使用痕が残っている。内訳は完形で6：1、頭部で46：12、中位で49：14、尾部で13：10である。

細石刃の点数に比し、細石核がわずか5点（内1点は表面採集品）しか検出されてなく、遺跡外へ搬出されたのであろう。

131・132・170～184は削器である。131は灰色黒曜石の剥片を素材に用い、両面からの剥離によつて刃部を作出している。使用による加圧で折損した削器の一部と思われる。

132は黒色黒曜石の剥片を素材に用い、両面からの剥離によって刃部を作出している。本資料も131同様、使用によって折損した石器の一部であろう

17Gは安山岩の薄い剥片を素材に使用した小型のものである。腹面に平歪剥離によって刃部を作出する。

171は調整打面から剥取された黒曜石の縦長剥片を素材にしている。右縁は全縁に、左縁は中ほどに調整を施して刃部を作出し、左縁上部に細かい階段状剥離痕を顕著に残している

172は調整打面から剥取された光沢のある良質黒曜石の剥片を素材にしている。右縁下方に抉りを入れ、左縁には腹面からの加圧による微細な急傾斜剥離を施し刃部を作出している。

173は黒曜石の不定形かつ不整形の剥片を素材にしている。下縁に腹面からの剥離によって刃部を作出している。また全体に風化し輝度を失っている。

174は良質漆黒の自然面を残した幅広剥片を素材にしている。剥片は腹面からの加圧によって折取り、下縁の腹・背両面に細調整によって刃部を作出している。上縁にはわずかに使用痕が認められる。また背面に3枚の剥離面を残している。全体に薄く風化し、やや輝度が落ちて

いる。

175は調整打面から剥取された安山岩の大型剥片を素材にしている。剥片は打面反対側で背面からの加圧によって折取られ、刃部は主として背面側に作出していて、一部腹面側にも認められるが片刃の形態となっている。

176は安山岩の剥片を素材にして一次剥離が不分明な程に周縁から調整を施している。右縁上部の腹面からの打割面を除きほぼ全周に刃部を作出し、併せて左端に僅部を作出している。

177は調整打面から剥取された安山岩の大形横広剥片を素材にしている。背面側の下縁と右上縁に刃部の作出が認められる。下縁刃部はやや内湾気味であり、本資料はほぼ中央部で折損しているので原形は半月形を呈することが推定される。

178は調整打面から剥取された横広剥片を素材にしている。全体に風化している。下縁に腹面からの調整による刃部を作出している。背面の打面端辺に数箇の階段状剥離が認められる。

179は茶色黒曜石のやや厚みのある剥片を素材にしている。腹面は打面反対側の端部からの加撃で剥ぎ取り、厚さを減らしている。その縁に調整を施し、刃部を作出している。

180は横広大形の安山岩の剥片を素材にしている。この剥片の剥離作業は石核の打点を上下に180度転位して行っている。剥片の打面側に平坦剥離を施して厚みを減らし、下縁に刃部を作出している。腹面左縁に自然面が残っている。

181は安山岩の剥片を素材にしている。腹面は左右からの加撃で厚さを減らすように剥離され一次剥離面は残されていない。背面は周縁からの剥離で全面に調整加工されている。刃部は周縁両面より作出されている。ツマミが付くと縦形石匙となる

182は自然面が残る厚みのある安山岩の剥片を素材にする。腹・背両面の周縁から調整し、一次剥離面は残されていない。背面の調整は右方を細かい階段状剥離気味に剥離され、他は加圧の力が最後まで通っている。

183は左図が腹面である。安山岩の剥片を素材にしたいわゆる横形石匙である。上縁の左右とつまみ部は腹・背両面からの調整を施し、下縁の腹面に背面からの調整により刃部は作出して片刃となっている。つまみ部の挟り加工は左右ともに浅い作りである。

184は灰色黒曜石の剥片を素材にし、一次剥離面が不分明になるほど周縁からの剥離を腹・背両面に加え調整している。刃部はほぼ全周に作出している。また右端に細調整を加え錐部を作出している。図176と手法、形状ともに似ている。

200、210は剥片尖頭器の可能性が強く、剥片類とは別に類別した。200は表面の風化が激しい無斑晶質安山岩製縦長剥片を素材としたものであるが、稜線は鋭い。打面は単設打面で、背面に一部原礫面を残す。7枚の剥離面が看取されるが、左縁打面付近の左方からの2枚の剥離は、素材剥取後であり、これからすると剥片尖頭器の可能性が存在する。

210は、わずかに風化するものの輝度を認める良質な黒曜石の縦長剥片を素材としている。打面は未調整で、腹面の打瘤は拡散し低い。基部右縁に細調整が1回施され、また、背面の稜線上を何回も調整して厚さを減じている。先端部は背面からの加圧で折損し、両縁には微細な剥離痕が顕著に看取される。

185～227は剥片及び使用痕のある剥片である。185は狭小な調整打面から剥取された微細な白色粒子を含む黒曜石の剥片である。腹面には打裂痕を残すが打瘤は殆どない。背面には一部自然面があって3枚の剥片の剥離痕を残し、左縁に使用による剥離痕が残されている。

186は自然打面から剥取された輝度・透明感がある黒曜石の剥片である。腹面には打裂痕を残すが打瘤は低くしか残っていない。背面には3枚の剥片の剥離痕を残し、右縁に使用による剥離痕が残されている。

187は調整打面から剥取された良質で輝度・透明感がある黒曜石のやや横広剥片である。腹面の打瘤はやや高く残り、左下縁に微細な使用による剥離痕を認める。背面には2枚の剥片の剥離痕を残している。

188は極狭小の打面から剥取された縞模様斑晶がある黒曜石の剥片である。透明感はあるが全体に風化が進んでいて輝度が鈍く、腹面中央に打裂痕を残すような特徴のある材質である。背面には3枚の剥片の剥離痕を残し、右縁に使用による微細な剥離痕を残している。また左縁下方には後代の細文期であろうか、折取りによって大きな湾曲部を作出している。

189は狭小な調整打面から剥取された輝度・透明感がある良質の黒曜石の剥片である。一部に自然面を残して石核から最初に剥取されたものであろう。背面に3枚の剥片の剥離痕を残していて、両縁に使用による微細な剥離を認める。

190は調整打面から剥取された輝度・透明感があり、直線状の斑晶をもつ黒曜石の剥片である。腹面には打瘤が高く認められ、打裂痕を残している。背面に5枚の剥片の剥離痕が残され、いずれも打面側からの剥離である。両縁に使用による微細な剥離を認める。



191は調整打面から剥取された良質の黒曜石の剥片である。全体に風化が進んでいる。腹面の右寄りに打裂痕が残り、打面には複数の調整面を残している。剥片剥離作業は打面を90度転位して行った痕跡を背面に留めている。下端は背面からの加圧によって折取られている。

192は狭小な調整打面から剥取された輝度・透明感のある、白色粒子を含む黒曜石の剥片である。腹面に打裂痕を残し、打瘤は平坦である。背面に4枚の剥片剥離面を残している。

193は単設打面から剥取された無歪晶質安山岩の非常に風化が進んだ剥片である。剥片左縁部に腹面からの加圧による平坦剥離によって刃部を作出している。剥片の端部は剥離の際の力が小さく階段状に通っている。本資料は削器的機能を持つものであろう。

194は単設打面から剥取された横広の風化が進んだ剥片である。腹面に打裂痕が残っている。

195は厚手安山岩の剥片を素材にしている。打面及び打瘤を背面からの加圧によって除去し、二側刃が交差するように調整を加え尖頭状にしている。調整は尖頭部腹面への3回の加撃を除けばすべて背面への調整である。本資料は削器的機能を持つものであろう。

196は輝度がある黒曜石の剥片である。腹面に打裂痕・打瘤を留めるが、打面は殆ど認めないぐらいである。端末は面の凹凸が激しく終わっている。背面右半分に自然面が残り、左縁両面に使用痕を認める。

197は安山岩の横広剥片である。腹面には打面・打瘤を残さず上縁は強器のような機能を持たせ、腹面の剥離は小さく階段状で、下縁近くでフィンジ一気味の剥離である。背面は周縁からの剥離による加工痕をのこしている。

198は自然打面から剥取された黒曜石の横広剥片で、末端は凹凸を見せている。背面には一部剥離面を残し、3枚の同方向からの剥離面を留める。腹面には打裂痕を認める。左縁に微細な使用痕が看取される。

199は複数の調整打面から剥取された剥片で、背面に6枚の剥離面を留める。腹面には打裂痕を留め、端部はステップ気味に収束している。打痕は少し高い。

201は大形の安山岩製剥片である。大きな石核から剥取されており、打面は未調整打面である。腹面には大きな打裂痕を残している。背面には5枚の剥離面が看取される。縁辺は鋭利で、先端部は先鋭である。断面の形状は三角形状をなす。

202は安山岩製横長剥片である。打面は一部調整を施す。剥片は1cmほどの厚さに剥離され、端部は腹面からの加圧で折取っている。背面には3枚の剥離面を残している。

203は輝度ある良質黒曜石剥片で、角礫状の石核から剥取されている。打面は自然打面である。背面には6枚の剥離面を残し、右縁に使用痕を認める。

204は調整打面から剥取された輝度と透明感のある良質黒曜石製で、背面に6枚の剥離面を残している。腹面には打裂痕が大きく残っている。右縁に微細な使用痕を認める。

205は自然打面から剥取された輝度と透明感ある黒曜石剥片で、腹面に打裂痕を残している。背面には4枚の剥離面が看取され、左縁に連続した微細な剥離痕を認める。

206は調整打面から剥取された透明感ある黒曜石剥片で、全体に風化を認める。背面には左

縁近くに原礫面を残し、打点を90度転位して剥取した痕跡を2枚残している。右縁には不連続の剥離痕を認める。腹面には打裂痕を生じ、打痕は高い。

207は自然打面から剥取された厚みのある剥片で、背面左縁に原礫面を留めている。背面の剥離面は5枚ほど看取され、右縁に不連続の微細な剥離痕が看取される。光沢ある漆黒黒曜石である。

208は縞状の斑品をもつ風化がかなり進んだ石刃状の剥片である。打面は未調整で、腹面に打裂痕跡を認める。背面には4枚の剥離面を残し、両縁不連続の微細な剥離痕を留める。

209は台形石器用の剥片かと思わせる資料で、打面および対向する面は背面からの加圧で折取っている。腹面左縁には連続する剥離痕を認め、また背面下縁にはわずかに湾曲するように剥離痕が残っている。漆黒黒曜石でうすく風化している。

211は輝度と透明感ある薄手の黒曜石で、背面に1稜を留め、腹面と同方向からの2枚の剥離面を残している。打面部は除去され、この部位に腹面側から連続する剥離痕が認められる。

212は輝度ある漆黒黒曜石で背面中央部が高くなっている。背面は周縁よりの剥離面を留め、打面部は除去されている。

213は端面に原礫面をもつ黒曜石で、打面部は除去され、縁辺は調整により階段状になっている。背面には腹面と同方向の剥離面が3枚看取される。

214は調整打面から剥取された小型・薄手の剥片で、腹面に打痕を残すも低い。背面には4枚の剥離面が看取される。両縁に微細な剥離痕を留めている。

215は光沢ある黒曜石で、横広である。調整打面から剥取され、背面左方に一部原礫面を留める。端部には背面からの加圧による剥離痕が連続的に生じている。

216は白色の不純物を多く含む黒曜石を素材としている。打面部は除去され、のち折取り部分を細調整している。端部も背面からの加圧で折取っている。背面には1稜と2枚の大きな剥離面を残している。

217は未調整打面から剥取された良質剥片である。打面縁は調整剥離が施され、背面には4枚の剥離面を留めている。両縁に微細な剥離痕が看取される。

218は調整打面から剥取された端部に一部原礫面を留める黒曜石剥片で、背面に1稜と2枚の剥離面を留める。腹面は打痕を残し、やや高くなっている。端部は腹面からの加圧で折取っている。

219は光沢と透明感のある良質黒曜石を素材とし、剥片剥取後、打面部は折取っている。この部位に細調整を加えている。両縁には微細な剥離痕を認め、背面には3枚の剥離面を看取する。

220はやや光沢と透明感ある黒曜石で、端部に一部自然面を残している。打面部は除去し、切断面に右方から調整する。左縁にはやや厚い連続する剥離痕が、右縁には不連続の剥離痕が認められる。左縁の状況からすると削器とするのが妥当とも考えられる。

221は打面を折取った資料で、折取り後、細調整を加える。両縁には微細な剥離痕を留め、

背面には4枚の剥離面を残している。

222は調整打面から剥取された縦長の剥片で、腹面に打瘤を残している。背面には中央に1稜と4枚の剥離面を残している。両縁には不連続の剥離痕を留めている。

223は光沢ある黒曜石を素材とし、背面の一部に原礫面を留めている。腹面には打撃痕を留めるが、打面部縁辺に細調整を施しているため、打面部は線状となっている。背面には6枚ほどの剥離面を留めている。

224は狭小な打面から剥取した透明感ある剥片で、打面縁は細調整を施す。端面は原礫面を留めている。中央位に1稜と、腹面と同方向の剥離面を2枚残している。両縁に微細な剥離痕が看取される。

225は狭小な自然打面から剥取され、腹面には顕著なリングが認められる。背面には1稜と2枚の剥離面が看取され、また両縁には微細な剥離痕が認められる。

226は調整打面から剥取されたやや光沢ある黒曜石製で、打面縁に細調整を施している。背面左面に原礫面を留め、また腹面と同方向からの剥離面を残している。腹面には打撃痕を留めている。両縁には微細な剥離痕が看取される。

227は打面及び打瘤が除去された剥片で、背面には腹面と同方向から剥取された5枚の剥離面を留めている。両縁には微細な剥離痕が看取される。

228～241は石核である。228は良質の漆黒黒曜石の角礫を素材としている。a面では自然打面(e面)から3枚の剥片が剥離されているが、f面の剥離との関係から寸詰まりのやや幅広い剥片が剥取される。剥片剥離の最終段階とは思われないが、a面右端にc面からの細調整が施され、挿入し石器としての機能も持たせている。石核形状との関係から打点を90度転移させて剥離している。

229は灰色黒曜石を素材とし、風化の進んだ資料である。剥離痕からしてやや幅広い剥片を剥取しており、かつ打瘤の高いものである。石核として最終段階の残核である。

230は小孔をもつものの漆黒の良質黒曜石を素材にしている。打面は線状をなし、剥離痕の端部の多くは中心に向っている。剥離痕の形状からするとやや幅広い剥片が剥取されている。上面は甲板状をしているが、右寄りに打撃痕を残し、ポットリド・フラクチャーの特徴を留めている。

231は銜色で透明感のある良質黒曜石の小円礫を素材としている。剥離面は風化し、やや輝度を消失している。剥片剥取に際しては原礫面に打面調整を施し、やや幅広い剥片を剥離している。その後、打点を90度転位し、打面調整を行わずに剥片剥取した痕跡を留めている。

232は楕状の坯品をもつ灰茶色黒曜石の亜円礫を用い、原礫面はやや磨滅している。剥片剥離は調整打面から行われるが、当該資料は最終の剥離が体幹中位でステップ気味に収束しており、ために機能を廃止したものと思われる。打点の90度転位も残しているが、多くは上位からの剥離である。

233は黒曜石の角礫を素材にしており、残骸の資料である。剥片剥離は全て上位の自然打面から行い、やや幅広い剥片を剥取している。打面には打撃痕が半球状に顕著に残る。また剥離面と対向する面に右方からの2枚程度の剥離面が看取される。

234は光沢ある良質黒曜石の垂角礫を素材としている。剥片剥離は原礫面及び調整打面から行い、すべて上方からの剥離である。剥離痕跡からやや幅広い剥片が剥取されている。5枚ほどの剥離面が看取される。

235は風化の著しい無珪晶質安山岩の石核である。打面は未調整であり、90度転位しながら全周から剥離している。剥取された剥片はその痕跡からして大形の剥片である。

236は黒曜石円礫を素材とし、打面調整は積極的には行わず、分割面を打面として剥片剥離を行っている。剥離面からすると剥取された剥片は横広剥片であり、台形石器の素材は十分に剥取できる石核である。4枚ほどの剥離面が看取される。石核としては残骸に近い状態の資料である。

237はやや輝度のある黒曜石を素材にしており、形状は略四角錐状を呈する。剥片剥離は背面を除いて、未調整打面の全周から剥離作業を行っている。

238は黒曜石垂円礫を素材に、半割して剥取されたポジティブ面をもつ剥片を利用している。有効な剥片剥離面は一面のみであるが、これは石核背面部が薄く打割された形状によるものであろう。打面は一次剥離面をそのまま利用し、4枚の剥離面を残している。

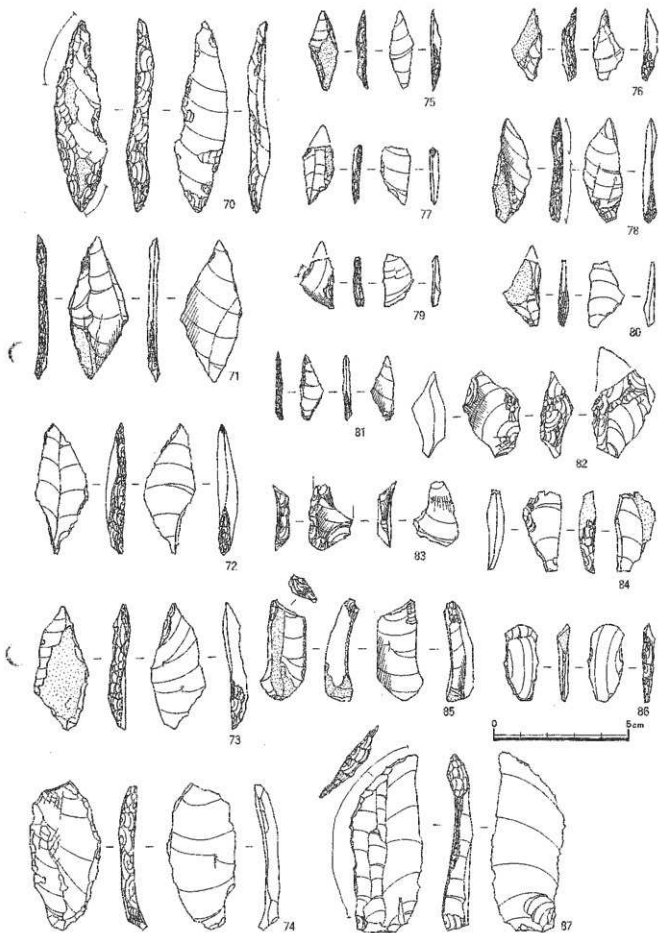
239は安山岩を素材とした石核で、素材は分割された剥片を使用しており、背面に一部原礫面を留める。分割面は石核主軸に対して直角方向から作出され、打面として利用している。また厨縁より求心的な剥離痕が認められ、両面加工様の形態を見せる。

240は無珪晶質安山岩製の石核である。打面は調整され、5枚の剥片が剥離されているが、なかにはステップ気味に収束している剥離痕も見られる。原石自体は風化が著しく磨滅しているものの、剥離面の稜線は鋭い状況を見せている。

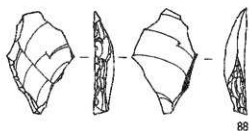
241は縞状の珪晶をもつ灰茶色黒曜石を素材としている。剥片剥離は未調整の自然打面から行われており、4枚の剥離面が看取される。剥片はやや縦長の剥片が剥取されている。打面部には打撃痕が半円状に残っている。

242～298は石鏃である。今次の調査で出土した石鏃で図化していないものを含めて第15表に掲載している。また6～8、11類について図版27-1に写真を掲載している。全173点の出土を見た。そのうちの124点の分類基準と出土傾向について第14表に掲載している。

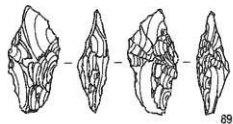
石鏃の分類は白石氏分類(註1)に準拠し、追加・改変している。平面形状、基部加工に主眼を置いた分類であるが、2層の堆積環境の状況から、異なる時期のものも包含される可能性は十分にあると思われる。なお、中には剥片を素材とした剥片鏃があるが、二偏縁平行の良好な剥片を素材とした場合、先端部の作出により当然に6～8類に分類されるものが出てくるが、これらは文中において説明している。



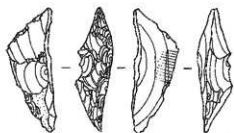
第42图 石器实例图 6



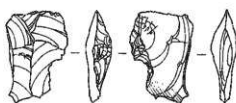
88



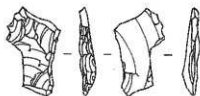
89



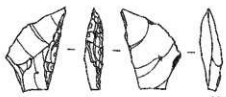
90



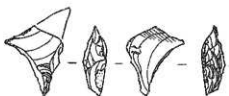
91



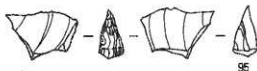
92



93



94



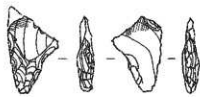
95



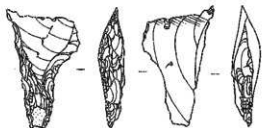
96



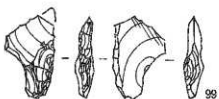
97



98



100



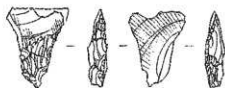
99



第43圖 石器实测圖 7



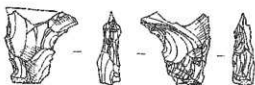
101



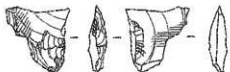
102



103



104



105



106



107



108



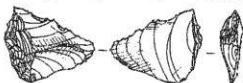
109



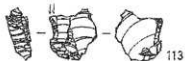
110



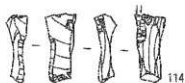
111



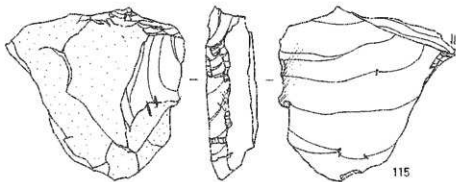
112



113



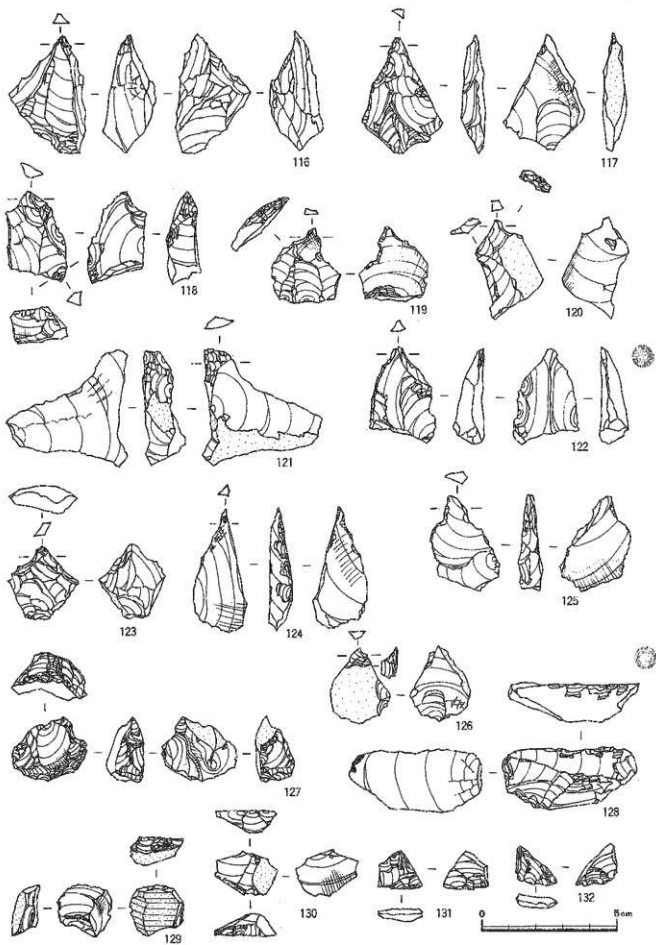
114



115

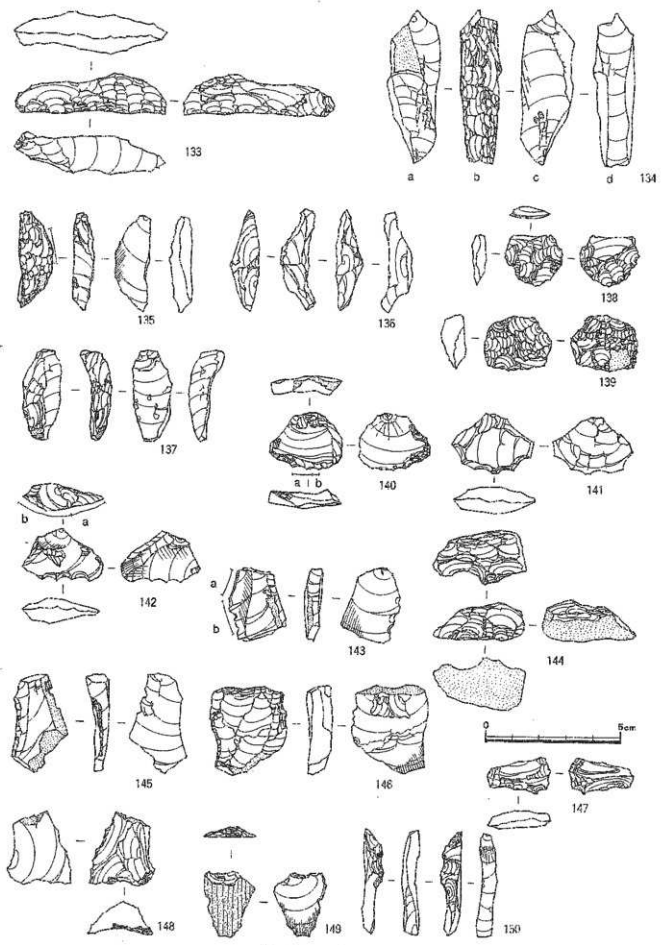


第44圖 石器尖頭圖 8

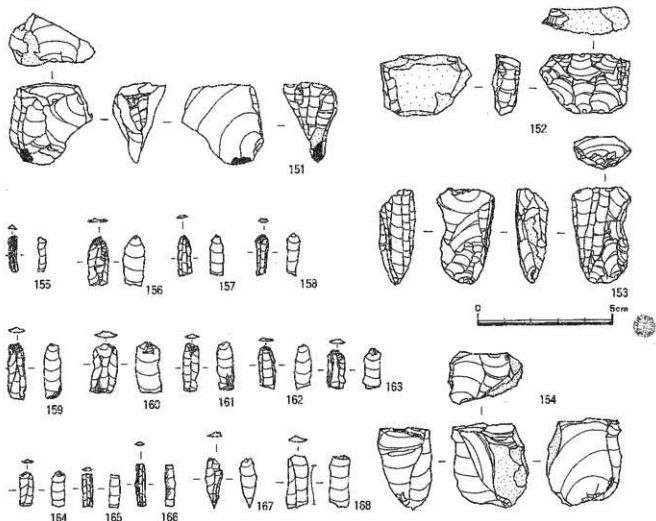


第45图 石器实测图9





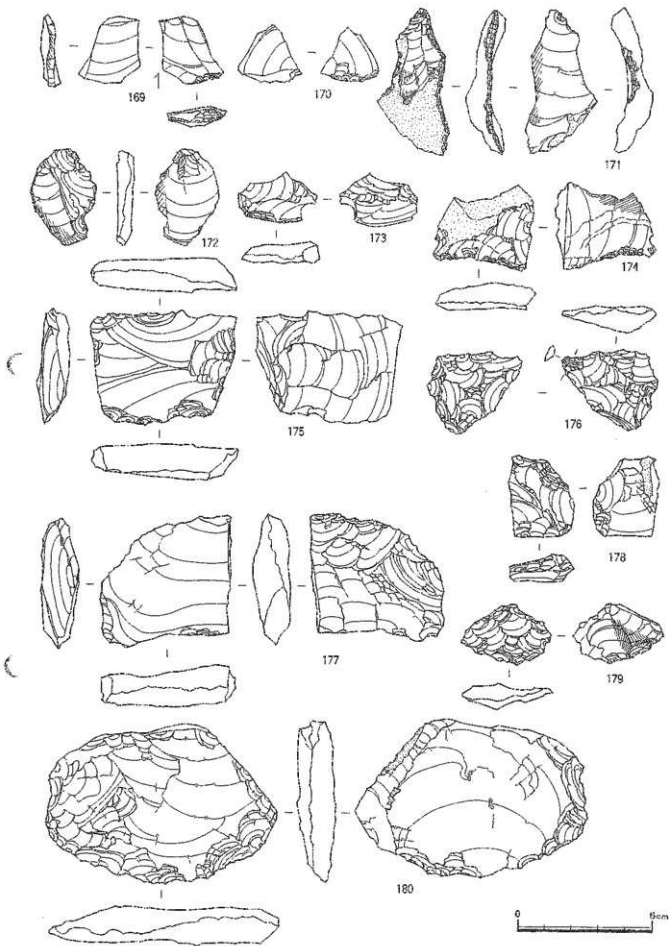
第46图 石器类图10



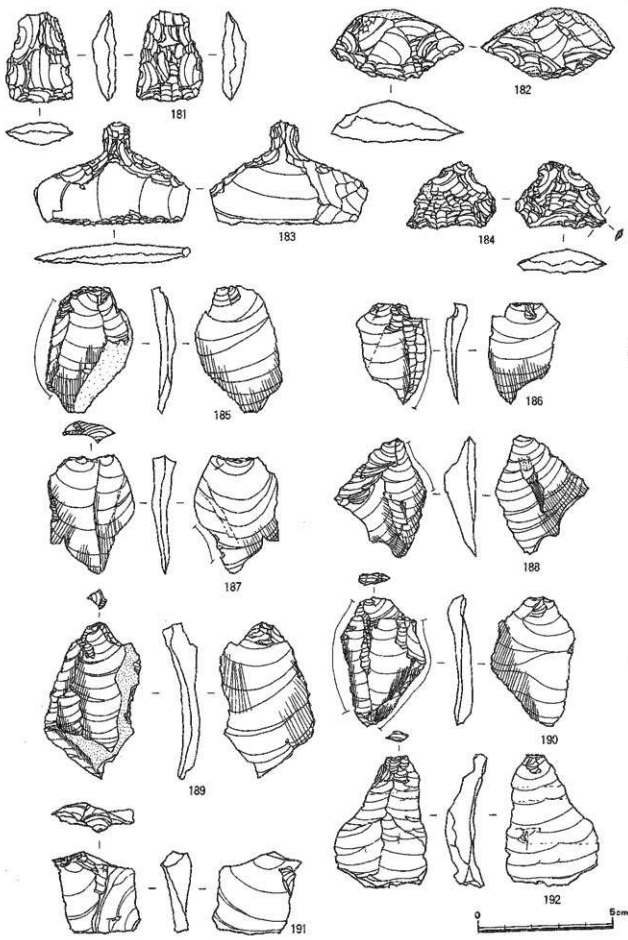
第47図 石器実測図11

まず、形式では平基無茎式と凹基無茎式に大きく分類し、さらに「かたち」で

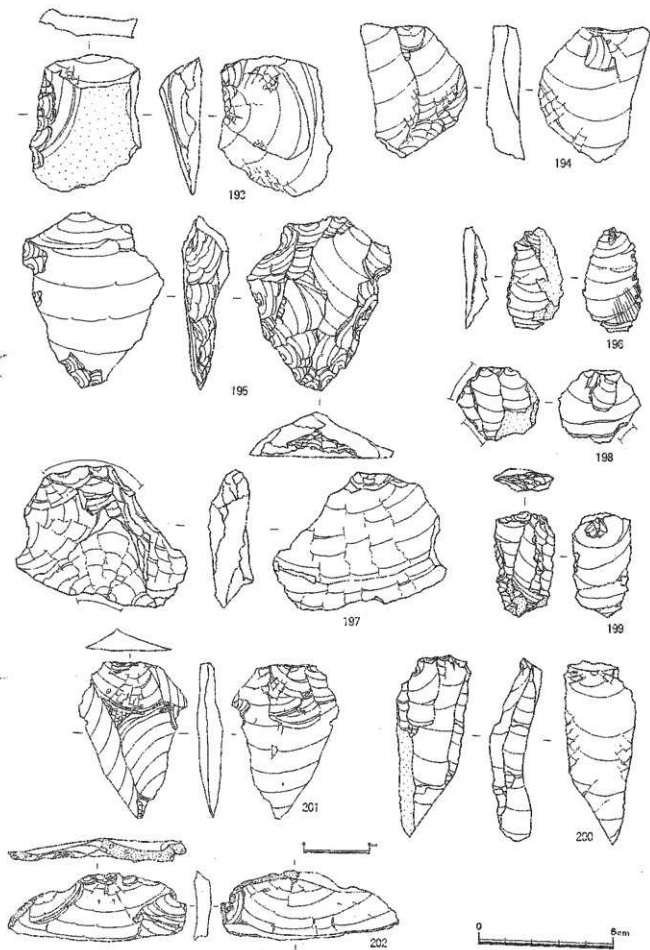
- 1 A…二側縁が直線で三角形を呈するもの
  - 2 A…二側縁が外側に湾曲するもの
  - 3 A…二側縁が内側に湾曲するもの
  - 4 A…左右が非対称形のもの
  - 5 A…基部が左右非対称のもの
  - 6 A…五角形を呈するもので、肩部が上位にあるもの
  - 7 A…五角形を呈するもので、肩部が下位にあるもの
  - 8 A…七角形を呈するもの
  - 9 A…逆ハート形を呈するもの
  - 10 A…下半は大きく外湾し、上位は1、2に類するもの
  - 11 A…2類型で最大幅が体幹中位近くにあり、大久保型、粘地型Aタイプと類別されるもの
  - 12 A…6類型で細身のもので、粘地型Bタイプに類別されるもの
- に類別され、さらに基部加工の在りかたで



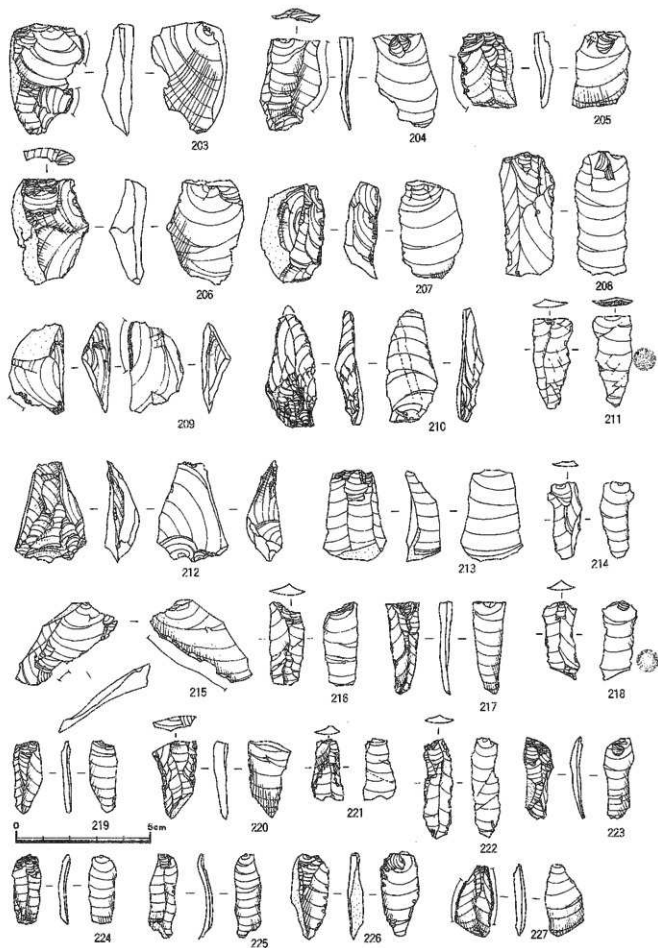
第48圖 石器実測圖12



第49图 石器实例图13



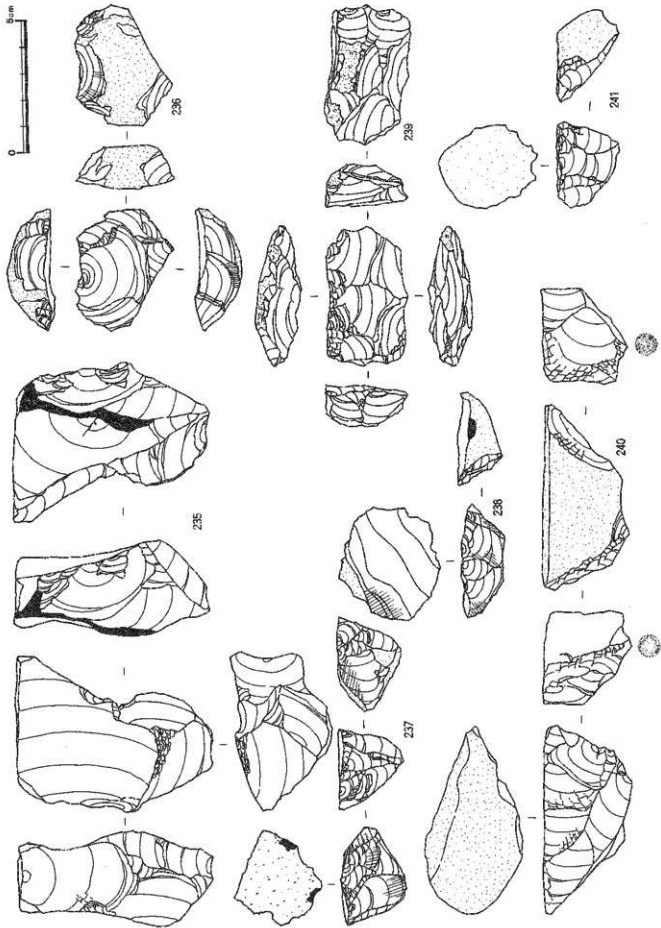
第50圖 石器実測圖14 (201、202は s-3/8)



第51圖 石碇夷洲圖15



第52圖 石器実測圖16



第53图 石器实测图17



- B…浅く抉りこむもの
- C…直線的に抉るもの
- D…Cより深く抉るもの
- E…丸く深く抉るもの
- F…抉りが体幹中位近くまで抉るもの

に類別される。また三角形形状のものをa、二等辺三角形形状のものをbとして記載している。

1 A類…242、243

4点のうち、2点を図示。242は正三角形に近い形状を示す。周縁から再調整を施すが、腹面に一次剥離面を大きく残している。242がa類、243がb類である。図示していない2点のうち1点はa類で、素材面を残さない小型品である。他の1点はb類。

1 B類…244～247

7点のうち、4点を図示。二等辺三角形形状のb類が多く、周縁からの細調整で整形する。図示したものは、整形後研磨を施して扁平に仕上げる例で、過半数に達する。図示してない3点は打製であり、a類が1点、b類が2点である。

1 C類…248

4点出土したが、1点図示。周縁より丁寧に整形し、先鋭な脚部をなす。先端・片脚部折損。248はb類。他はa類1点、b類2点。

1 E類…249、250

9点出土し、うち2点を図示。ともに主要剥離面を留めないように丁寧に整形している。248がb類、249がa類である。他にa類1点、b類5点。

2 A類…251

2点出土で1点を図示。周縁からの二次調整を丁寧に施し、一次剥離面を留めない。251はb類である。他の1点は腹面に素材面を大きく留めるb類である。

2 B類…252、253

252は先端部をわずかに折損している。腹面に一次剥離面をわずかに留める。253は周縁加工の後、体幹の殆どを研磨する磨製である。252、253ともにb類。他の1点もb類。

2 C類…254～261

254～256、258はb類に属するもので、254のように丁寧に細調整を施す例や、やや荒い調整のものまで認められる。259、260は素材の剥片をあまり変えることなく機能を持たせたもので、小型のものである。261は腹・背面を研磨で仕上げる。他の1点も小型品でa類。

2 D類…262、263

262はb類で、剥片の周縁のみに調整を施し、腹・背面に一次剥離面を留める。263はa類で周縁加工を施し、のち両面に研磨を施したものである。非常に小型品である。他はb類で1点は研磨で仕上げている。

2 E類…264～280

この類は素材とした剥片が大きく、分厚いものから作出されており、頑丈で重い一群である。両面ともに一次剥離面を残さないものが多い中、266、276、278には素材面をわずかに留めている。272は右縁からの縄状剥離が対縁近くまで施された優品である。280は剥片の周縁のみの加工で仕上げたもので、非常に小型品である。b類。他は11点全てがb類。

#### 2 F類…281

a、b類ともに出土している。281はa類で、素材面を残さないように丁寧に整形されている。挟りは大きく、体幹中位まで行われる。図化していない資料中には2/3程まで挟りこんでいる例がある。他の3点のうちa類1点、b類2点。

#### 3 C…282

プロペラ様の形態を示すように二側縁を調整している。3類はこれのみで、a類に属する。

#### 4 A…283

変形の五角形ともとれなくはないが、左右非対称の類である。調整加工は荒い。b類である。他の1点もb類で、同形・同巧である。

#### 4 E…284

剥片を大きく変えることなく、機能を持たせている。右脚は折損ではなく、単脚である。5類にも分類できるが、4Aの存在からこの類とするのが妥当であろう。

#### 6 A…285

同縁加工のみで素材を大きく変えることなく機能を持たせている。形態的には粘地型Bタイプに類似するが、素材面を多く残しているためこの類としておく。他は素材面を残さないような丁寧な調整を行うものが多く、ともにb類である。

6B…図示していないが、図版27-1に掲載している一群である。a類に属するものが多く、肩部は中ほどにある。

#### 6 C…286

小型扁平のもので、脚部が外方に張り出す例である。

#### 6 E…287~292

287、288は素材である剥片の縁辺を最大限利用した例で、剥片鏃である。形態上からこの類に含めたが、石鏃としての機能を持たせる結果、五角形状を示したものであり、別類とすべきであろう。289~292は符櫛の駒型を呈すもので、291を除いて素材面を残さないように調整が施される。脚部は基部が外下方に全て開くように作出している。292は調整後、背面を研磨で仕上げた例である。この類には前述の2例を除いた14資料中7資料に研磨が施され、6類と研磨の結びつきが強い。他は全てb類である。

7A…図示していないが、図版27-1に掲載している。肩部はかなり下位に位置する。背面に原礫面を留め、腹面は一部一次剥離面を残すように調整している。

#### 7 E…293~295

6Eの肩部を基部近くに移動した形態を示すものである。294は293、295が6E例の如く脚

形式 96.5	平邊形基式						凹邊形基式					
	A	B	C	D	E	F						
1												
2												
3												
4												
5												
6												
7												
8												
9												
10												
11												
12												

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	
4	2	0	2	5	1	0	2	2	1	19																	
7	0	0	0	4	0	0	0	1	0	0																	
4	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0																	
4	9	1	0	5	0	0	0	0	0	0																	
0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0																	
0	4	0	0	0	0	1	0	0	2	0																	
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0																	
9	28	0	1	16	4	0	2	0	0	0																	
0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0																	
0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0																	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0																	
24	50	1	3	30	5	1	4	5	1	124																	
4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0																	

第14表 石縁形態分類図・表 (出土した数量/うち、局部磨製の数量)

基部が外下方開くものと比較すると、脚端部の納め方が異なる。また二側縁が鋸歯状縁に調整する手法も異なっている。よってこの類のうち、293、295は6Eとの類縁性を強く認めることができる。他の1点はb類で全面に調整が施され、やや肉厚である。

8D…図示していないが、図版27-1に掲載している。肩部は中位よりわずかに下位にあり、先端部にさらに肩部を有する。形態的には6類から導き出されるもので、その類縁性が強い。b類で精巧な作りである。

9A…無花果型に近い形態を示す。腹面側に周縁より調整を施すが、成形程度であり、ために断面形が薄い半円状を呈している。

9E…無花果型よりさらに周縁を円形に調整するため、逆ハート型を呈する。挟りは円形状に仕上げる。断面形状はA類同様である。

10A…図示していないが、ともにb類である。

10B…296

体幹中位以下を脚部の機能を誇張させるように作出したもので、先端部は直線的に納めている。二側縁からの剥離で、素材面は留めていない。

10D…297

大形の薄い剥片を素材に、全面を丁寧な剥離で整形している。脚部を誇張する下膨らみの傾向が窺える。挟り部は大きく、直線的に調整している。他の1点は先端部を折損するが、297同様薄く仕上げ、下膨らみの度合いがさらに強い。また内縁りは直線的である。b類。

11A…298

長さが幅の約2倍の法量を示すもので、やや大きい部類に入る。大久保型、粘地型Aタイプ類比例。調整は燧状剥離が中央稜線を越す剥離面もあり、丁寧に整形している。

299は小形の木葉形尖頭器である。良質の黒曜石を素材とし、やや風化している。素材は横広の剥片を使用し、周縁から細調整を施して仕上げている。体幹中央部には一部に一次剥離面を留めるが、左右対称形に細調整・整形している。

300~301は尖頭器を一括した。300は安山岩を素材にしているが、風化が著しく稜線は鈍くなっている。剥片の周縁から細調整を施し、略三角形に整形している。中央部には一次剥離面を留めている。

301も風化の著しい安山岩を素材としている。素材は剥片ではなく、切片状の原石に周縁加工して整形している。

302は異形石器である。素材は良質な安山岩の大形縦長剥片を素材としており、体幹はやや湾曲している。周縁加工により整形をし、後に体幹表裏及び刃部に研磨を施して仕上げ、施刃している。刃部は両刃に仕上げている。体幹上位と中位に左右両方から挟り部を設けている。



刃部は使用により若干潰れが看取される。

303～312は石斧で、303～305、312は磨製・局部磨製石斧で、他は打製石斧である。303は蛇紋岩の扁平礫の周縁を、平坦に敲打整形し、のち研磨して仕上げる。研磨による短い線状痕は看取されるが、明確ではない。石斧の頭部かと推定される。

304は蛇紋岩を素材にした磨製石斧の刃部破片である。研磨面及び破損面ともに風化が激しく白色化している。刃部は直線状に研ぎ出され、両刃の輪刃に整形・研磨している。刃こぼれと潰れが看取され、使用によるものと推察される。表裏に研磨の線状痕が認められる。

305は試掘調査4調査区、すなわち本調査2区F-4調査区出土の石斧で、第5図、図版11-1のように上石の下に刃部が見えるように埋置されたものである。石斧は完形で全体に風化が激しく、剥離面の稜線は磨耗し、表面は爪で削り取れるくらいである。素材は輝石安山岩の扁平礫の周縁に調整を施して整形し、のち刃部を表裏から研磨して両刃に仕上げている。体幹中位には線刻によると思われる短沈線の組み合わせ記号様の文様(?)や複数の短沈線が、またアミ掛けの部分に齧歯類の噛み跡のような短沈線が看取される。

312は長大な乳棒状石斧で、先端部を欠損している。素材は他の石斧と同じく輝石安山岩を用いている。風化により敲打・調整痕や研磨痕は明瞭でない。体幹は断面円形状に仕上げ、頭部の石突部は尖頭状に仕上げている。刃部は大きく折損しているため、形状は不明である。重さ2.04kgを量る。

306～311は打製石斧である。素材として輝石安山岩の扁平礫を使用しており、周縁部には両面に調整剝離を数回行って仕上げる例が多く見られる。着柄の方法が明確でないが、体幹にかなりの衝撃が生じるものと推察され、折損するものが多い。

313～315は円盤状石製品としたものである。313は輝石安山岩の扁平礫の周縁を両面にかけて敲打・整形している。全周に鈍い稜線をもつ。風化が激しく使用痕等の観察は難しい。

314は、より円形度を増した例で、両面にかけて周縁より整形・調整している。313より鋭い稜線を全縁にもつが、使用痕等は観察できないほど風化している。

315は同形・異素材の資料である。素材は結晶片岩を用いており、周縁より敲打・整形し、左縁部を除くと刃部と想定している断面が鈍いながらも尖るように調整している。

316は凹石である。輝石安山岩の円礫を素材としており、上下両面がともに凹状になるように使用されている。周縁部への使用痕は認められない。大きさに比して軽い。

317～319は石皿で、すべて砂岩製である。また全出土点数6点はいずれも破片であり、原形に復するものはない。317は臼部の資料で、中央部に向かって球状凹面をなしている。

318は大形の石皿で、半割した資料である。直径の2点が接合し、約半分に復元できるものである。臼部は直径で17cm前後、深さ約2cmほどに復元可能な状況であり、裏面にも同形状の

臼部を残している。

319は前例ほど明確な臼部を形成しないものであるが、臼部である浅い凹部が奪取される。全体的に磨耗か手ずれが認められる。

320～324は砂岩製の砥石である。素材の砂岩は金雲母、角閃石、石英、片岩と思われる極めて微細な鉱物粒子を含むやや軟質のもので、当地に産するものを採取して使用している。砥石は全出土点数が24点で、その多くは細片化しており、機能を廃止したものがほとんどである。

320は直近の2点が接合した資料である。扁平な砂岩を素材としており、表面の砥石面は使用により滑沢面（アミ掛け部分）をなし、裏面はザラザラとした原石面の状況を呈している。表面の砥石面には一定方向に幾条もの断面V字形の長・短線状痕が残っている。

321は周縁を敲打・調整して掌に入るように整形している。表面には滑沢面と、320より細かい線状痕が一定方向に残っている。

322は長方形を呈すると思われる破片で、頭部は原礫面に近く、両側縁はやや丸みを帯びるように磨耗している。また表裏面ともに滑沢面がある。頭部中央部位に1孔を穿つが、形状は正円にちかく、孔の断面は糸巻き状である。砥石としての機能については今ひとつ明確でないが、この類に含めておく。

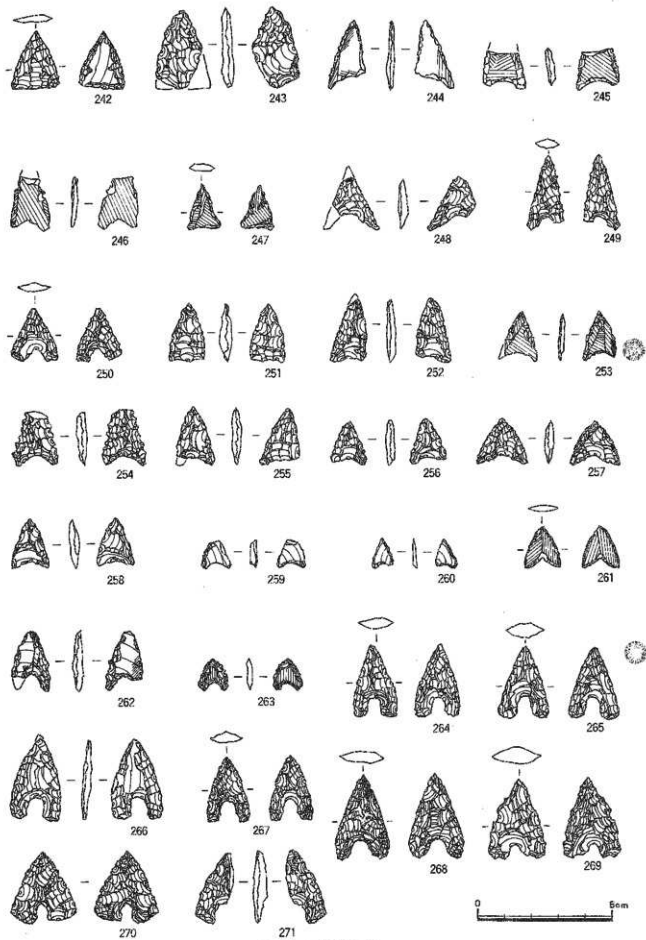
323は破片となっている資料で、表面は滑沢面であり、他面は素材面のままである。線状の痕跡は認められないため、刃部等の面多的な研ぎ出しに機能したものであろう。

324は不整形に打割された資料である。表面の滑沢面には、5mmほどの幅の極浅の溝状痕跡があり、右方に滑沢面、左方に一部溝状痕跡を越した一定方向の線状痕が看取される。

325・326は輝石安山岩の礫で、砥石を利用した投弾と考えられる。遺跡内では当該資料は出土しないため、他所から搬入されたものである。

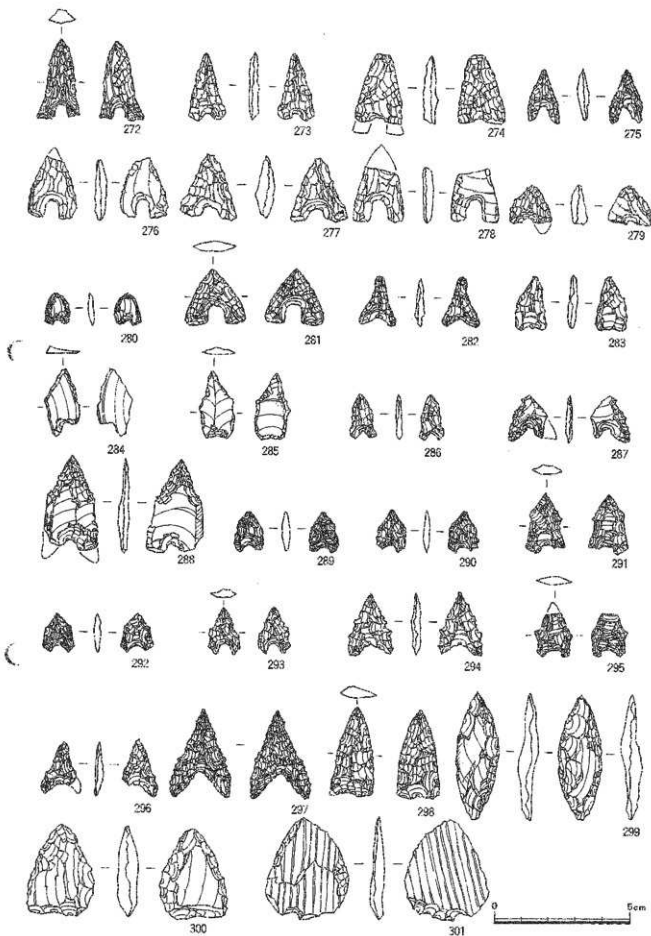
327は原材料石と考えられる。素材は結晶片岩で、遺跡内に搬入された原石の上位を打割している。周縁は丸みを帯びた端面を呈しているが、原石面か、或いは敲打面か不分明である。いずれにしても土器の混和材として搬入されたものであろう。

註1 白石浩之「縄文時代草創期の石鏃について」『考古学研究』第28巻第4号 1982

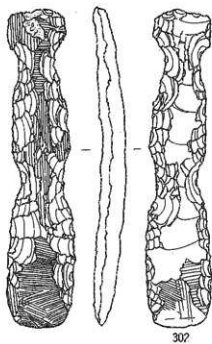


第54图 石器实测图18

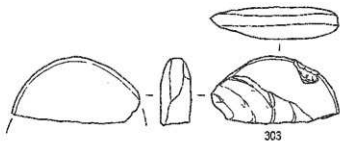




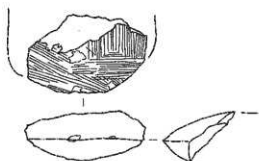
第55圖 石標実測圖19



302



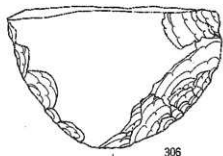
303



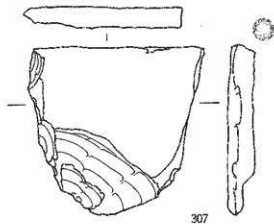
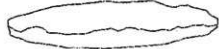
304



305



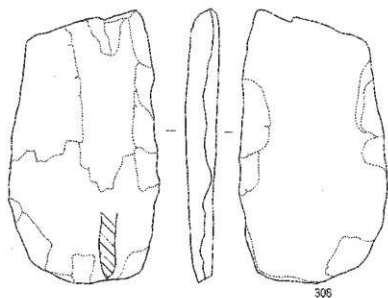
306



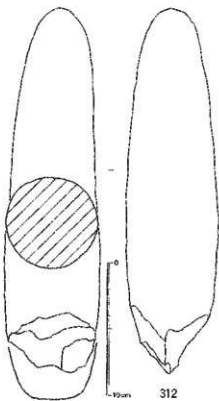
307



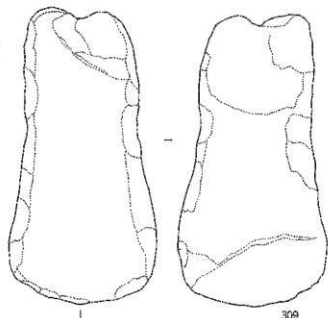
第56圖 石器実測圖20



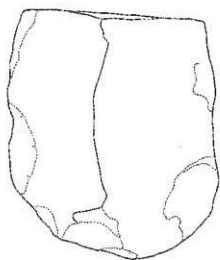
306



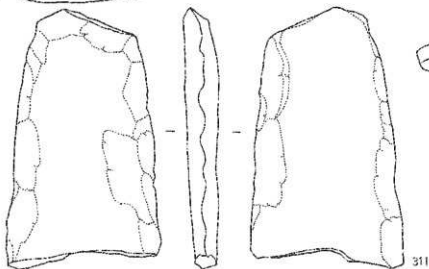
312



309



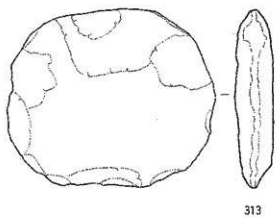
310



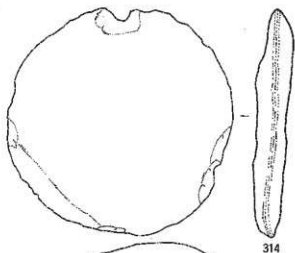
311



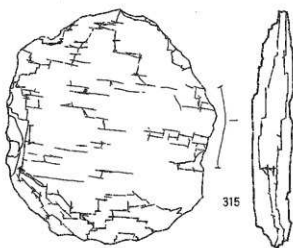
第57图 石器尖洲21 (312はS-3/8)



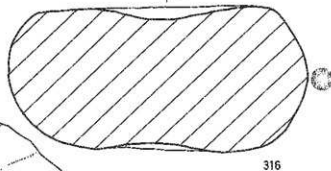
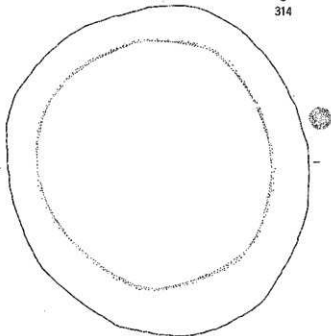
313



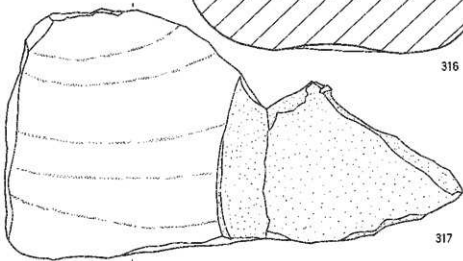
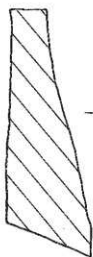
314



315

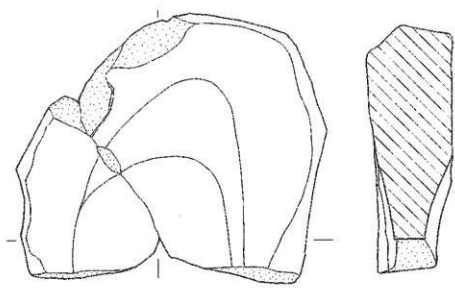


316

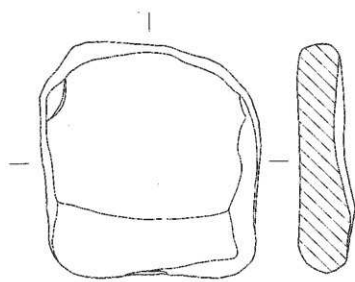
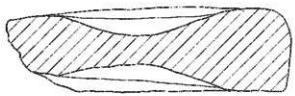


317

第58图 石器类图22



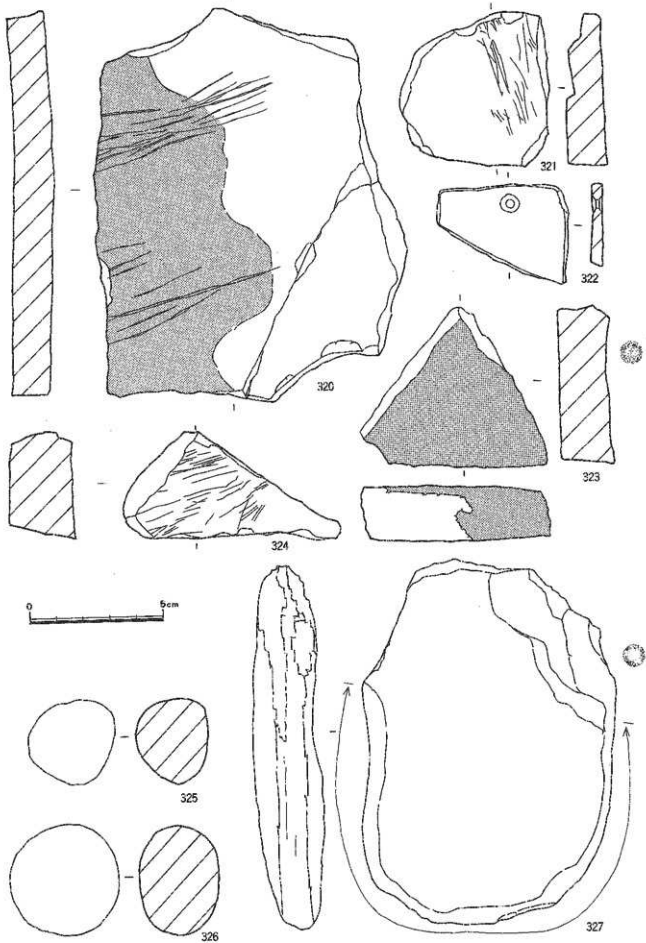
318



319



第59圖 石器実測圖23



第60圖 石器実測図24

1	D	2	52	f	4層	20	12	3.6	0.7	黒曜石2	2	E	4	419	石碓	3層	32	22	6.8	4.9	黒曜石2	
1	D	2	46	f	4層	27	23	7.9	4.7	安山岩	1	D	11	535	石碓	3層	23	14	5.7	1.9	黒曜石1	
1	D	7	30	ナイフ形石碓	3層	53.8	25	5.1	6.5	黒曜石2	1	B	11	59	石碓	3層	26.5	12	8.1	2.2	黒曜石1	
1	C	9	152	ナイフ形石碓	3層	26	21.5	8	4.9	黒曜石2	2	B	4	390	f	3層	25	15	8.8	2.2	黒曜石1	
1	B	11	44	ナイフ形石碓	3層	27	9	3	0.8	黒曜石1	1	B	11	33	f	2層	18	23	6	2.3	黒曜石1	
1	E	9	73	ナイフ形石碓	3層	27	9	3.3	0.7	黒曜石1	1	B	11	49	f	3層	32	17	12.5	5.5	黒曜石3	
2	E	4	10	ナイフ形石碓	3層	28	12.5	11.5	3.7	黒曜石2	2	E	5	740	f	3層	17	17	8.1	2.2	黒曜石1	
2	E	4	367	ナイフ形石碓	3層	28	13	5.2	1.7	黒曜石1	1	E	11	873	f	3層	26	15	6.4	1.8	黒曜石1	
2	E	5	682	ナイフ形石碓	3層	26	14.6	3.6	1.2	黒曜石1	1	D	4	1	f	3層	15	16.5	5.1	1.3	黒曜石1	
2	E	9	180	ナイフ形石碓	3層	25.5	12.5	5	1.9	黒曜石2	2	E	5	775	wf	3層	25	11	5	1.4	黒曜石1	
2	E	4	304	石碓	3層	41.2	30	9.4	6.4	黒曜石2	2	E	5	579	wf	3層	25	11	4.6	0.9	黒曜石1	
2	E	12	165	台形石碓	3層	32	24	7.2	3.9	黒曜石1	1	B	7	6	f	3層	30	12	3.3	0.9	黒曜石1	
2	E	5	473	台形石碓	3層	32	22	7.7	3.9	黒曜石1	1	B	7	21	f	3層	19	13	3.4	1	黒曜石1	
1	E	11	534	台形石碓	3層	30	28.5	7	4.3	黒曜石1	2	E	5	794	f	3層	4	36	8.2	7	安山岩	
1	J	5	55	台形石碓	3層	25	15	6.2	2.3	黒曜石2	1	C	9	179	楕円石	3層	11.5	7	2.2	0.15	黒曜石1	
1	C	8	115	台形石碓	3層	27	24	8.9	4.2	0.9	黒曜石3	1	C	9	126	楕円石	3層	10.5	5.5	1.5	0.1	黒曜石1
2	E	5	688	台形石碓	3層	18.5	19	3	0.9	黒曜石1	1	D	9	103	楕円石	2層	8.3	6	2.1	0.1	黒曜石1	
1	D	4	4	削片	3層	27	29.5	4.1	3.5	黒曜石1	1	D	9	136	楕円石	3層	10	5	1.5	0.1	黒曜石1	
1	B	11	48	削片	3層	21.5	14.5	4.6	1.5	黒曜石1	1	D	9	113	楕円石	3層	12.9	5	1.5	0.1	黒曜石1	
1	B	11	48	削片	3層	21.5	14.5	4.6	1.5	黒曜石1	1	D	9	113	楕円石	3層	12.9	5	1.5	0.1	黒曜石1	
1	B	11	48	削片	3層	21.5	14.5	4.6	1.5	黒曜石1	1	D	9	113	楕円石	3層	12.9	5	1.5	0.1	黒曜石1	
1	D	10	264	角形石碓	3層	33.5	12.5	7.8	3.7	安山岩	1	D	9	137	楕円石	3層	12	5	1.2	0.1	黒曜石1	
1	D	11	533	線条状石碓	3層	24	35	4.5	3.7	黒曜石2	1	D	9	155	楕円石	3層	10	5	0.6	0.05	黒曜石1	
1	F	11	198	線条状石碓	3層	21	12.5	2.4	0.8	安山岩	1	C	9	155	楕円石	3層	10	5	0.6	0.05	黒曜石1	
1	D	3	23	uf	3層	174	22	3.7	3.3	黒曜石1	1	D	7	39	f	3層	44	40	12.1	25.7	安山岩質	
1	B	11	62	uf	3層	19	18.5	5.5	1.5	黒曜石1	1	F	9	177	石碓	3層	58.5	41	21	43.1	安山岩質	
1	D	3	49	uf	3層	18.5	14.5	2.1	0.6	黒曜石3	1	E	11	536	ナイフ形石碓	3層	36	15	12.6	7.2	安山岩質	
1	D	3	49	uf	3層	18.5	14.5	2.1	0.6	黒曜石3	1	E	11	536	ナイフ形石碓	3層	36	15	12.6	7.2	安山岩質	
2	E	5	596	uf	3層	29	14	4.4	1.9	黒曜石2	1	D	11	338	ナイフ形石碓	2層	74.4	17.7	6.3	6.5	黒曜石2	
1	C	9	161	f	3層	28	30.5	8.3	5.8	黒曜石1	2	L	8	288	ナイフ形石碓	2層	69	19.1	5.7	4.7	黒曜石3	
1	F	9	149	f	3層	24	25	10.3	6.4	黒曜石5	1	D	7	15	ナイフ形石碓	2層	46	20	4.7	4.5	黒曜石2	
2	E	4	400	f	3層	32	20.5	10.3	7.4	安山岩	1	E	9	47	ナイフ形石碓	2層	55	26	5	8.9	安山岩	
2	E	4	400	f	3層	32	20.5	10.3	7.4	安山岩	1	E	13	127	ナイフ形石碓	2層	20.7	8.2	4.2	1.1	黒曜石3	
1	J	7	43	f	3層	23	18	6.3	2.3	黒曜石1	1	D	9	145	ナイフ形石碓	2層	26.4	11.4	4.4	1.2	黒曜石3	
2	E	5	500	f	3層	31.5	21	4.4	2.2	黒曜石1	1	F	9	112	ナイフ形石碓	2層	22.9	10.4	3.3	0.8	黒曜石5	
1	C	11	277	彫跡	3層	42	18	6.1	4.5	黒曜石1	2	L	9	327	ナイフ形石碓	2層	38.3	14.4	4.2	2.2	黒曜石1	
1	B	7	7	削片	3層	11	28	7.6	3.8	黒曜石2	1	D	9	64	ナイフ形石碓	2層	18.9	12.1	2.5	0.5	黒曜石1	
1	E	11	588	削片	3層	21	20	11	3.5	黒曜石2	2	L	4	203	ナイフ形石碓	2層	25	13.6	3	1	黒曜石1	

表16 出土遺物属性一覧 1 (単位: mm、g)

(f: 削片、uf: 使用痕のある削片、黒曜石1……濃黒色黒曜石、黒曜石2……灰色黒曜石、黒曜石3……咬彩色～乳白色黒曜石、黒曜石質……黒曜石質……黒曜石質(安山岩)

試料番号	試料名	形状	寸法	重量	色澤	硬度	比重	吸水率	透水性	透氣性	備考												
1	B	12	55	ナイフ形石	2層	24.4	18.4	3.8	1.8	黒曜石1	1	F	11	29k	石塊	2層	45.1	19.5	8.6	5	黒曜石3		
2	A	1	10	71	ナイフ形石	2層	29.8	15.5	4.2	2	黒曜石3	1	C	7	18	石塊	2層	25.5	37	8.6	5.4	黒曜石1	
3	1	D	12	227	ナイフ形石	2層	37.1	17	8.8	5.1	黒曜石3	2	K	5	85	石塊	2層	28.6	22.1	6.4	4	黒曜石1	
4	1	E	11	87	ナイフ形石	2層	29.2	13.2	4.1	1.9	黒曜石3	2	W	9	8	様	2層	20.3	28	13.8	6.9	黒曜石1	
5	1	F	37	ナイフ形石	2層	68	37	9	14.7	黒曜石2	2	E	6	19	接合	2層	49.5	23.3	12.9	13.4	黒曜石2		
6	1	E	8	1	ナイフ形石	2層	38.6	24.2	7.2	6	黒曜石2	2	E	5	300	接合	2層	20	21	6.9	3.2	黒曜石1	
7	1	F	7	6	台形石	2層	40	30	11.8	5.9	黒曜石1	1	B	10	699	積層	2層	15.6	28.1	8.1	2.6	黒曜石1	
8	1	H	13	2	台形石	2層	46.2	16.3	12.3	5.6	黒曜石1	1	J	1	8	71	積層	2層	15.5	15.8	4.7	1.2	黒曜石3
9	1	G	8	18	台形石	2層	35.6	24.6	7.5	5.4	黒曜石1	1	J	6	102	積層	2層	15.2	18.4	4	0.9	黒曜石1	
10	1	D	11	374	ナイフ形石	2層	34.1	20.2	5.7	3.2	黒曜石2	試	A	4	181	角塊状石	2層	56.6	13.9	9.6	9.6	黒曜石2	
11	1	D	11	374	ナイフ形石	2層	34.1	20.2	5.7	3.2	黒曜石2	試	A	4	181	角塊状石	2層	57	19.7	15.3	15.5	黒曜石2	
12	1	H	12	169	台形石	2層	28	22.9	8.3	2.7	黒曜石1	1	B	9	25	角塊状石	2層	36.3	11.2	7.2	7.7	黒曜石1	
13	1	C	8	38	台形石	2層	19.5	27.6	5	3.5	黒曜石2	1	G	6	16	角塊状石	2層	38.4	9	9.3	10.4	黒曜石2	
14	1	J	3	2	台形石	2層	35	17.9	4.4	2	黒曜石3	1	C	12	8	角塊状石	2層	35	14.3	8.3	7.8	黒曜石2	
15	1	B	11	18	台形石	2層	30.7	19.7	6.4	3.1	黒曜石3	2	F	5	100	二次加工石	2層	18.5	21.5	4.4	2	黒曜石1	
16	1	D	10	223	台形石	2層	28	18.3	5.5	2.5	黒曜石3	2	F	5	98	二次加工石	2層	20.4	24.8	8.1	4.2	黒曜石1	
17	1	D	12	223	台形石	2層	30.8	19.2	6.9	3.2	黒曜石3	2	N	8	93	角塊状石	2層	21	28	5.5	3.8	黒曜石1	
18	2	P	8	385	台形石	2層	40.5	25	10.2	6.4	黒曜石1	1	F	9	65	角塊状石	2層	23.2	30.9	7.4	4.2	安山岩	
19	2	H	10	223	台形石	2層	27.2	23.6	7.3	3.6	黒曜石1	1	K	3	147	角塊状石	2層	19.2	30.2	10.4	4	安山岩	
20	1	E	10	640	台形石	2層	28	21.4	6.7	3.3	黒曜石1	試	A	2	39	角塊状石	2層	26	19.1	5.9	3.3	黒曜石1	
21	1	E	13	38	台形石	2層	24.5	19	8.7	4.4	黒曜石1	1	C	11	34	角塊状石	2層	33.8	15.5	11.2	14.1	黒曜石1	
22	1	E	11	365	台形石	2層	27.6	26	8.3	4.4	黒曜石1	1	D	12	94	角塊状石	2層	36.3	22.7	6	5	黒曜石3	
23	1	E	11	423	台形石	2層	23.2	23.3	6.2	2.3	黒曜石1	1	J	10	65	角塊状石	2層	35.3	30.4	8.7	8.4	黒曜石3	
24	1	B	9	22	台形石	2層	29.7	20.5	5	2.5	黒曜石1	1	J	5	49	角塊状石	2層	13.7	23.3	5.8	1.8	黒曜石3	
25	1	I	10	41	台形石	2層	21.5	21.5	4.6	2	黒曜石1	1	G	11	41	角塊状石	2層	23.7	26.1	6.2	3.1	黒曜石3	
26	1	C	10	4	台形石	2層	28	23.8	7	3.9	黒曜石1	1	C	10	38	角塊状石	2層	24.2	19.5	3	1.1	黒曜石1	
27	1	C	11	122	台形石	2層	27	18.5	5.7	2.7	黒曜石1	1	E	9	53	角塊状石	2層	30.9	8	6.4	1.2	黒曜石1	
28	1	F	2	318	台形石	2層	26.6	16	7	2.7	黒曜石3	1	F	11	76	細石	2層	31.4	30.7	14.8	11	黒曜石1	
29	2	D	4	107	台形石	2層	17	17	3	0.7	黒曜石3	1	D	11	593	細石	2層	23.6	32.1	10	9.2	黒曜石1	
30	1	E	8	30	台形石	2層	28	33.5	7.3	3.5	黒曜石1	1	B	7	11	細石	2層	35.1	20.5	11.6	11.5	黒曜石3	
31	2	K	8	192	影器	2層	18.9	18	7.6	2.6	黒曜石1	1	E	7	11	細石	2層	33.5	27.8	20	17.6	黒曜石3	
32	1	D	3	14	影器	2層	65	61.1	14.8	67.8	黒曜石2	1	B	12	29	角塊状石	2層	13.3	0.3	0.2	0.1	黒曜石1	
33	2	L	9	150	石塊	2層	43.6	27.1	14.8	18.2	安山岩	試	A	9	19	細石	2層	18.3	7.7	1.8	0.2	黒曜石1	
34	2	H	4	96	石塊	2層	43.2	30.1	7	9.2	黒曜石1	1	B	12	29	角塊状石	2層	14.5	5	1.5	0.1	黒曜石1	
35	1	D	10	132	石塊	2層	36	21	10.4	8.5	黒曜石1	1	G	9	19	細石	2層	16	5.1	1.2	0.1	黒曜石1	
36	2	K	8	142	石塊	2層	28	26.5	4	5.3	黒曜石1	1	C	10	97	細石	2層	18.3	8.8	2.3	0.5	黒曜石1	
37	1	E	8	45	石塊	2層	30	23	7.9	4.3	黒曜石1	1	F	9	49	細石	2層	18.4	6.2	1.7	0.2	黒曜石1	
38	試	4	192	石塊	2層	45	46	11.6	14.2	黒曜石1	1	G	8	13	細石	2層	16.5	5.4	1.3	0.2	黒曜石1		
39	試	1	1	石塊	2層	36	28	11.2	6.8	黒曜石2	1	D	11	203	細石	2層	14.8	6.3	2.1	0.2	黒曜石1		
40	1	D	10	29	石塊	2層	21.2	23.1	10.2	5.7	黒曜石2	1	K	5	65	細石	2層	12.8	5.7	1.7	0.2	黒曜石1	

新17表 出土遺物属性一覧 2 (単位: mm, g)  
 (f) 銅片, u f 使用痕のある角片、黒曜石1……濃茶色黒曜石、黒曜石2……灰色黒曜石、黒曜石3……灰茶色……乳白黒曜石、黒曜質……黒曜質安山岩



1	C	9	85	礫石2	2層	12.5	f	1.1	0.1	黒曜石1	2	H	10	215	uv	2層	38.8	27.4	11.5	11	黒曜石1
1	J	5	51	礫石1	2層	15.3	3.6	0.9	0.1	黒曜石1	2	F	12	63	uv	2層	34.8	23.2	11.6	10.7	黒曜石1
1	C	9	7	礫石1	2層	18.3	6.3	1.5	0.1	黒曜石1	2	W	11	72	uv	2層	46.8	20.7	5	4.7	黒曜石1
1	J	3	102	礫石1	2層	19.7	7.5	2.8	0.4	黒曜石2	2	E	10	74	uv	2層	32.3	20.4	8.7	5.5	黒曜石1
1	E	11	436	礫石+砂層	2層	25.4	13.2	4.4	3	黒曜石2	2	B	5	400	銅片+銅層	2層	42.4	18.9	8	5.1	黒曜石1
1	J	4	38	砂層	2層	21.4	21.4	4.1	1.4	安山岩	2	E	4	242	uv	2層	33.5	14.8	2.5	2	黒曜石1
2	F	7	92	砂層	2層	55.3	25.3	8.7	9.6	黒曜石1	1	E	10	43	f	2層	35.1	36.5	11.5	10.2	黒曜石1
2	1	6	31	砂層	2層	34.9	24	5.6	4.1	黒曜石1	1	E	10	176	f	2層	34.5	25.5	10.3	8.3	黒曜石1
1	J	5	148	砂層	2層	18.8	28.9	7.5	3.7	黒曜石1	2	E	5	672	uv	2層	33.7	11.8	1.9	0.6	黒曜石1
2	E	3	713	砂層	2層	56	33.4	9.5	10.3	黒曜石1	2	L	9	215	uv	2層	31.1	45.3	4.1	2.5	黒曜石1
2	Q	2	108	砂層	2層	54.5	44	11	3	安山岩	2	E	5	792	uv	2層	31.4	12.7	3.3	1.3	黒曜石1
2	G	9	127	砂層	2層	37.3	29.3	9.6	8.6	安山岩	2	M	5	41	uv	2層	34.9	12.8	3.8	1.4	黒曜石1
2	M	10	68	砂層	2層	44.6	48.7	12.8	34.3	安山岩	2	F	9	43	uv	2層	26.4	13.5	4	1.4	黒曜石1
1	I	4	5	砂層	2層	27.5	34.6	9.4	7.8	黒曜石2	2	Q	9	43	uv	2層	26.6	16.4	2.3	0.7	黒曜石1
2	L	10	182	砂層	2層	32.2	28.6	8	4.5	黒曜石3	2	E	10	92	uv	2層	29.3	18.4	5	2	黒曜石1
2	R	7	171	砂層	2層	36.5	38.5	12.6	8.8	安山岩	2	E	5	180	uv	2層	22.6	11.9	3	0.8	黒曜石1
2	I	4	38	砂層	2層	33.3	23.7	7.6	6.3	安山岩	2	E	5	341	uv	2層	27.3	10.5	3	1.2	黒曜石1
2	H	5	162	砂層	2層	58.8	48.3	14.4	16.8	安山岩	2	O	6	54	uv	2層	30.1	10.8	3.1	0.9	黒曜石1
1	C	11	38	砂層	2層	39.2	33.4	7	13.3	安山岩	2	Q	9	19	uv	2層	25.1	10	2.1	0.6	黒曜石1
2	N	9	182	砂層	2層	38.3	32.4	7.5	5.4	黒曜石2	2	G	4	88	uv	2層	31.5	9.2	2.1	0.7	黒曜石1
2	P	4	33	uv	2層	47.2	39.2	5.9	7.3	黒曜石1	2	Q	9	13	uv	2層	36.2	14.3	4.7	2	黒曜石1
2	P	5	219	uv	2層	38.1	26.9	4.1	3.1	黒曜石1	1	P	11	297	f	2層	27.2	13.9	3.5	1.3	黒曜石1
2	N	9	181	uv	2層	45.4	31.2	6.8	3.7	黒曜石1	2	M	10	89	石灰	2層	18.7	45.7	26.4	17.2	黒曜石1
2	P	4	183	uv	2層	33.9	33	11.1	8.5	黒曜石1	1	J	6	57	石灰	2層	20.7	43	14.6	13.8	黒曜石2
2	D	7	2	uv	2層	59	33.4	5.2	11.8	黒曜石1	1	F	10	133	石灰	2層	40.2	56.5	19.8	5.7	黒曜石1
2	R	7	69	uv	2層	47.6	33.2	3.2	7.2	黒曜石1	1	F	10	242	石灰	2層	42.7	38.2	24.7	32.4	黒曜石1
2	E	5	515	uv	2層	30.1	33.4	8.5	6.3	黒曜石1	1	B	9	10	石灰	2層	35	32	22.1	27.6	黒曜石5
1	F	8	43	uv	2層	43.1	38.1	9.8	12.4	黒曜石1	2	M	4	2	石灰	2層	28.6	44.7	15.6	12.4	黒曜石1
2	G	10	51	f	2層	50.2	35.6	12.4	21	黒曜石	2	M	4	2	石灰	2層	35.5	46	34.1	32.4	黒曜石1
2	E	5	485	砂層	2層	64.9	47.2	17.1	45.4	安山岩	1	D	7	33	石灰	2層	71.5	46.7	26.5	130	炭層
1	E	10	195	uv	2層	33.1	30.8	7.8	4.5	黒曜石1	2	M	10	369	石灰	2層	35	47.2	15	22.3	黒曜石1
1	F	4	44	f	2層	21.6	65.1	14.3	42.2	安山岩	1	D	9	186	石灰	2層	25.3	38.7	26.8	18.3	黒曜石1
1	F	5	21	uv	2層	27.4	30	6.4	4.9	黒曜石1	2	D	6	33	石灰	2層	15.2	44.1	16.2	14.2	黒曜石1
1	F	9	184	銅片+砂層	2層	35.5	22.2	6.8	6.4	黒曜石1	1	G	9	53	石灰	2層	28.3	71.5	31.4	31.4	安山岩
2	W	11	111	f	2層	116.5	31.4	15.5	119	無炭層質	1	B	10	13	石灰	2層	30.3	25.4	6.8	無炭層質	
2	P	8	422	f	2層	51.6	125.6	13.9	110	安山岩	2	L	10	13	石灰	2層	21.7	17.9	2.6	0.4	黒曜石2
1	E	10	47	f	2層	41.3	27.7	6.3	9.6	黒曜石1	1	K	5	8	石灰	2層	30.1	-	3.7	1.6	安山岩
2	P	5	482	uv	2層	35.2	20.7	3.2	2.2	黒曜石1	1	E	7	5	石灰	2層	26.3	-	1.9	0.6	安山岩
2	J	5	7	uv	2層	28.5	19.5	6.5	3.4	黒曜石1	1	I	9	32	石灰	2層	-	16.4	3	0.3	黒曜石3
																					黒曜石1

(f) 砂片、uv) 使用済のある砂片、黒曜石1………黒色黒曜石、黒曜石2………灰色黒曜石、黒曜石3………灰褐色～乳白色黒曜石、無炭層質………無炭層質(安山岩)

第18表 出土遺物属性一覧 3 (単位: mm、g)

試料番号	試料	重量	色	形状	硬度	比重	結晶	成分	備考												
2	M	8	108	石炭	2層	17.1	11.6	2.5	0.4	黒曜石3	1	G	9	14	9	20.8	4	2	黒曜石1		
1	K	8	38	石炭	2層	19.3	—	2.9	0.6	黒曜石1	2	B	4	58	—	14.6	10.7	2.8	0.4	黒曜石1	
2	M	10	245	石炭	2層	18	14	4.8	1.2	黒曜石2	2	C	7	87	—	15.3	11.3	2.2	0.3	黒曜石2	
2	K	9	69	石炭	2層	18.4	17.7	3.9	0.8	黒曜石2	2	J	6	4	—	22.3	14.7	3.5	0.8	黒曜石1	
試	4	74	石炭	2層	20.9	13.6	4.3	1	—	黒曜石2	2	P	8	92	—	14.6	11.7	2.4	0.3	黒曜石2	
1	G	9	85	石炭	2層	24.4	13.5	3.6	0.8	黒曜石1	2	C	5	72	—	17.5	11.9	3	0.4	黒曜石2	
1	K	4	86	石炭	2層	18	—	2	0.4	黒曜石1	1	H	5	72-2	—	22.9	16.7	3.5	0.9	黒曜石2	
試	4	72	石炭	2層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	黒曜石1
1	D	10	34	石炭	2層	21.3	—	3.6	3.7	1.1	黒曜石3	2	M	8	87	—	13.5	3.2	0.6	黒曜石1	
1	P	11	84	石炭	2層	16.3	13.5	3	0.5	黒曜石3	2	P	8	87	—	32.3	22.8	3.3	1.4	黒曜石1	
1	G	11	72	石炭	2層	18.5	16.3	3.4	0.7	黒曜石3	2	I	9	49	—	32.8	15.7	5.3	2.3	黒曜石1	
1	E	10	20	石炭	2層	17.3	13.9	3	0.7	黒曜石3	—	—	—	—	—	46	16.5	5.9	4.6	黒曜石1	
1	E	10	20	石炭	2層	17.3	13.9	3	0.7	黒曜石3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	黒曜石1
2	J	7	39	石炭	2層	10.3	10.2	2.2	0.2	黒曜石2	2	A	1	K	3	178	—	—	—	—	安山岩
2	X	7	30	石炭	2層	10.4	7.8	1.3	0.1	黒曜石2	2	J	1	K	3	146	—	—	—	—	安山岩
2	H	8	10	石炭	2層	15.3	13.4	2.1	0.4	黒曜石3	2	I	C	10	31	—	100.8	26.3	9.1	34.3	安山岩
1	D	9	165	石炭	2層	22.7	—	3.3	0.7	黒曜石1	2	E	4	260	—	2.5	46.6	11.3	15.7	—	枕成岩
2	E	5	96	石炭	2層	11.7	11.4	1.9	0.2	黒曜石2	2	O	11	11	—	2.9	4.3	12.1	15.3	—	枕成岩
2	L	9	356	石炭	2層	27.4	16.7	4.7	1.5	安山岩	1	Q	8	327	—	168	72.2	34	240	—	輝石安山岩
2	G	7	80	石炭	2層	27.4	19	5.8	1.8	安山岩	2	O	8	327	—	53.4	78.9	15.4	84.5	—	輝石安山岩
1	I	5	83	石炭	2層	30.3	18.8	3.5	1.7	黒曜石2	2	L	10	77	—	61.6	65.3	9.7	92.3	—	輝石安山岩
2	P	4	70	石炭	2層	23.8	16.1	4.5	1.2	黒曜石2	2	R	7	2	—	101.2	56.7	9.4	85	—	輝石安山岩
2	N	6	169	石炭	2層	30.4	20.9	6.9	3	黒曜石1	2	V	10	51	—	108.3	58.2	15.3	120	—	輝石安山岩
2	O	8	8	石炭	2層	26	24.4	4.8	2	黒曜石1	2	E	5	276	—	91	78.9	20.3	210	—	輝石安山岩
1	J	2	212	石炭	2層	27.8	—	4.8	1.3	黒曜石1	2	P	7	58	—	56.2	57.2	11.6	94	—	輝石安山岩
2	P	8	13	石炭	2層	28.5	16	4.4	1.2	黒曜石2	2	L	10	62	—	67	78.3	12.4	106	—	輝石安山岩
2	E	9	104	石炭	2層	24.8	13.4	3.5	0.8	安山岩	2	M	7	22	—	73.8	82.6	11.4	110	—	輝石安山岩
1	K	3	128	石炭	2層	26.6	7.3	5.2	2	—	2	V	12	20	—	88.5	77.7	12.4	125	—	輝石安山岩
1	K	6	25	石炭	2層	20.3	12.2	4.3	0.6	黒曜石1	2	M	5	136	—	123.4	110.7	56.2	960	—	輝石安山岩
1	E	9	29	石炭	2層	—	—	—	—	—	2	N	9	126	—	171.6	98.3	33.2	—	—	砂岩
1	I	10	31	石炭	2層	24.2	27	6.4	2.2	安山岩	2	M	5	135	—	319	272	91.5	—	—	砂岩
1	K	5	179	石炭	2層	—	—	—	—	—	1	D	10	183	—	247	231	61	—	—	砂岩
2	H	5	19	石炭	2層	13.8	15.8	4.6	1	安山岩	2	L	8	167	—	147.9	116.9	13.9	410	—	砂岩
2	G	7	117	石炭	2層	11.4	9.2	2	0.2	黒曜石2	2	E	9	26	—	2.9	58.5	56	15.7	73.5	砂岩
1	I	5	2	石炭	2層	20	21.5	4	1.1	黒曜石1	2	R	9	79	—	36.3	45.2	5.4	15.1	—	砂岩
1	F	11	97	石炭	2層	20	12	3.7	0.7	黒曜石2	1	K	3	91	—	63.9	58.8	20.3	100	—	砂岩
2	M	10	45	石炭	2層	25.2	12.8	2.7	0.8	黒曜石2	2	M	10	310	—	77.4	36.7	25.5	82	—	砂岩
2	E	8	76	石炭	2層	24.5	13.1	2.7	0.8	黒曜石2	2	T	9	83	—	34.8	30.1	27.2	31	—	輝石安山岩
1	D	11	603	石炭	2層	16.4	9.6	2	0.2	黒曜石2	2	S	9	2	—	40.4	42.2	29.7	55.6	—	輝石安山岩
1	K	6	5	石炭	2層	15.6	—	2.3	0.4	黒曜石1	2	S	9	2	—	136.3	94	23.8	460	—	輝石安山岩

新19表 出土遺物属性一覽 4 (単位: mm, g)

(f: 剥片, u: 使用痕のある剥片, 黒曜石1……深黒色黒曜石、黒曜石2……灰色黒曜石、黒曜石3……灰青色・乳白色黒曜石、黒曜石……高透明度安山岩)

## ④ 土器

### 一ア、土器の接合について

出土した土器片は風化が進み、細片化したものが多く、接合は困難であった。特に破断面の風化は著しく接合作業の妨げとなったが、その中で、別表のように試掘を含めて52件の接合例を見出すことができた。実測図を掲載したものについては、その番号を付しているので参照されたい。

#### 1) 1区の状況(第62図)

1区においては6件の接合例があり、すべて縄文晩期の資料と判断される。そのうち3片以上の接合例が2件あって、いずれもE-11調査区出土資料である。この付近は1区における遺物集中区のひとつであり、他の4例もE-11調査区に隣接した調査区からの出土であって、同じ集中区に含まれる。

#### 2) 2区の状況(第63～74図)

2区においては、45件の接合例がある。内訳は、縄文晩期が41例、平安期と思われる内黒碗が2例、その他2例である。

##### a) 縄文晩期の土器

縄文晩期の接合例のうち最も多くの破片が接合した資料は、R-7調査区から出土している(第20表-45)。壺胴部の破片15片が接合し、ほぼ一周した。同時に同一個体の口縁部(第20表-46)も出土しており、やや離れて出土した底部と併せて一箇体分の実測図とすることができた(第77図-130)。埋没の可能性もあるが、確認できなかった。

やや特異な出土状況にあると思われるのは、E-8調査区の場合である(第64図)。この調査区には13件の接合例があるが、すべて水平方向にも垂直方向にも狭い範囲にまとまって出土している。発掘作業時の観察では、この付近からは多数の土器片や黒曜石の破片が、磁北方向に尖った楔形の平面形で、地面の割れ目に詰まったような状況で出土している。結果的に、その中に13件の土器接合例が見出されたわけであるが、このような現象が起きた背景については、現段階では説明できない。

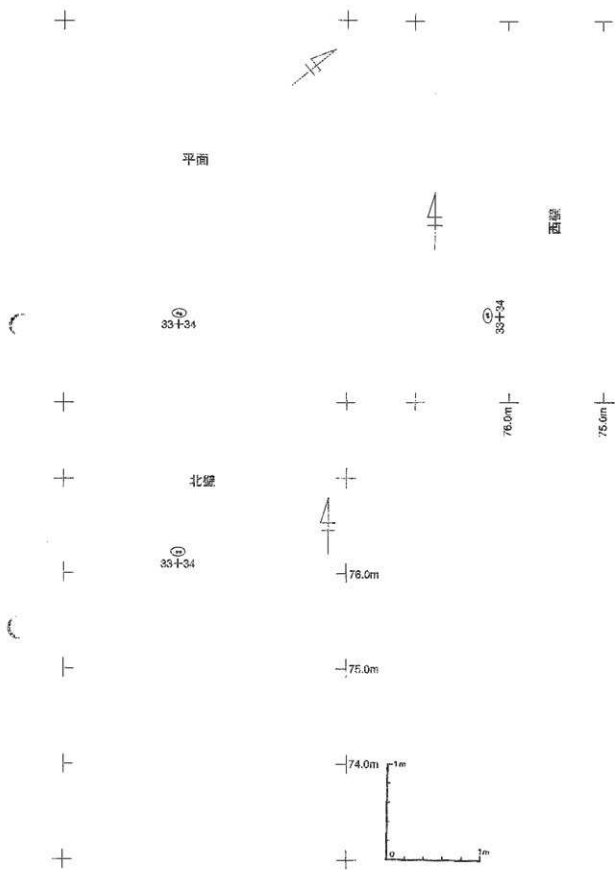
##### b) 内黒碗

内黒碗の接合は2件である。出土地点に傾斜があることや、比較的浅いところにあったことなどの理由によって、失われた部分が多いと思われる。

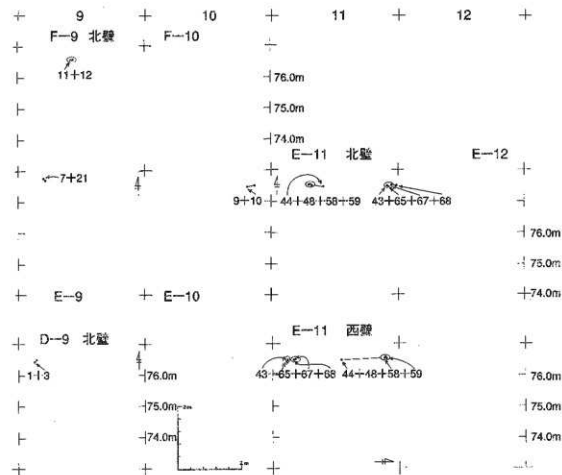
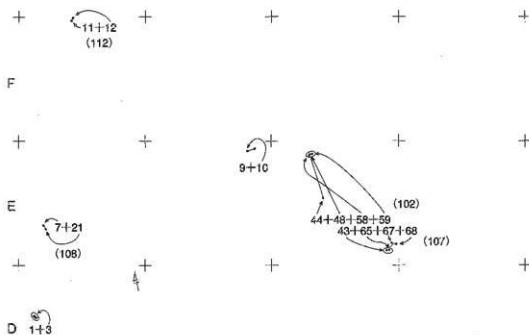
F-8調査区出土の高台部分は、一ブロック飛ばした6.5m先のH-9調査区出土の破片と接合した。標高の低いH-9調査区の方へ、傾斜に沿って移動したものと思われる。

F-9調査区出土の口縁は約3mの移動であるが、方向は前者とは同じである。

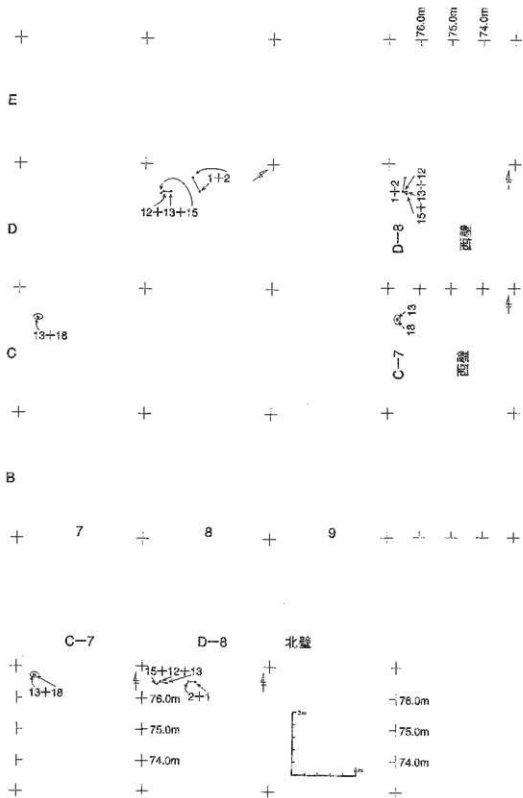




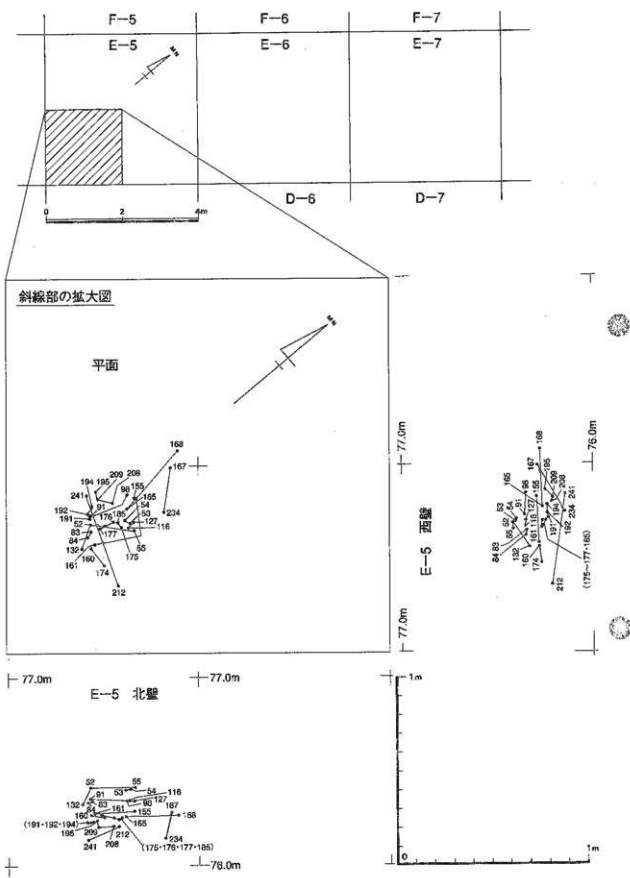
第51图 试掘4调查区土器接合图 (S-1/40)



第62图 Ⅰ区D~F-9~11调查区土器接合图(S-1/120)

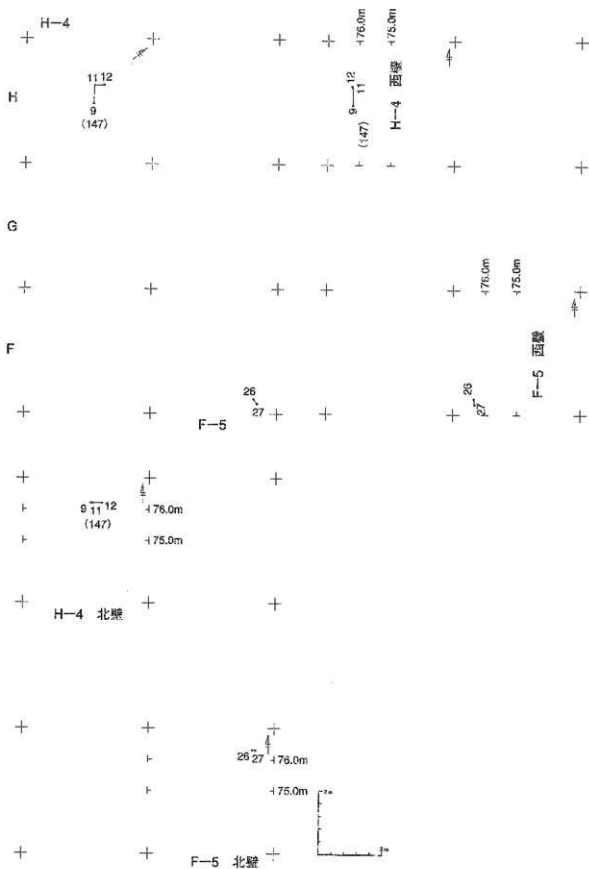


第63图 2区C-7、D-8调查区土器接合图(S-1/120)

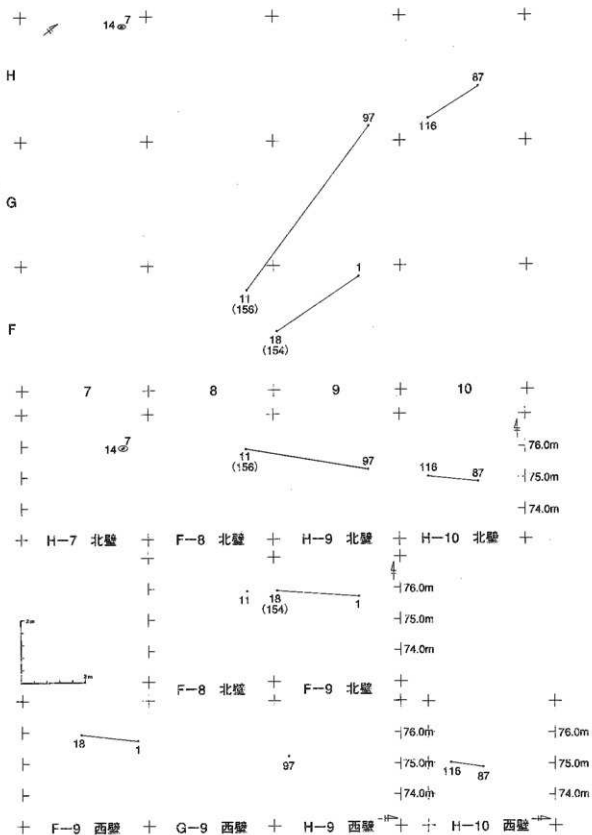


第54図 2区E-5調査区土器接合図 (S-1/20, 1/100)

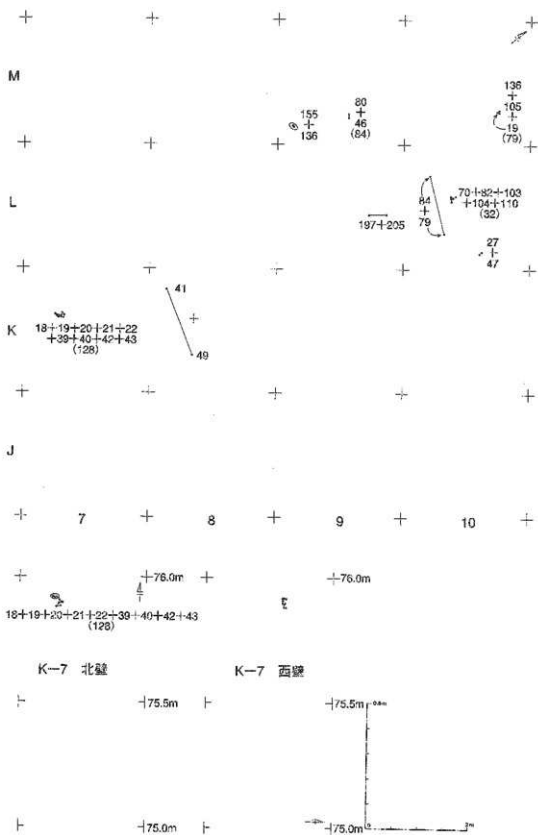




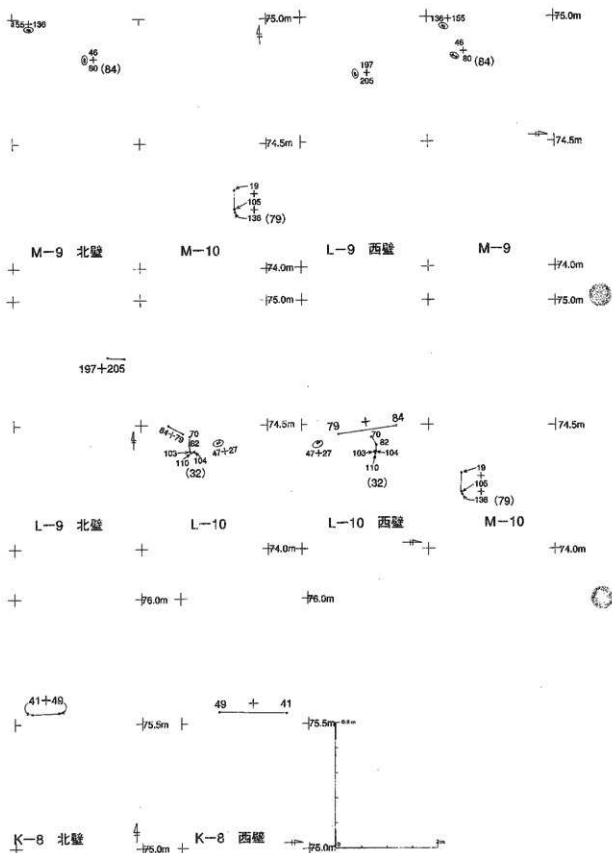
第65图 2区F-5、H-4调查区土器接合图(S-1/120)



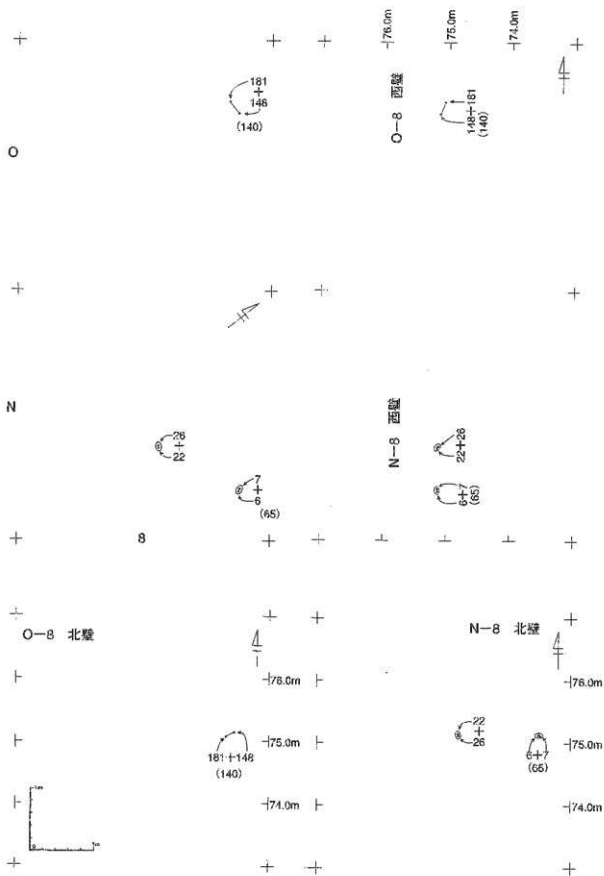
第66图 2区F~H-7~10调查区土壤剖面图(S-1/120)



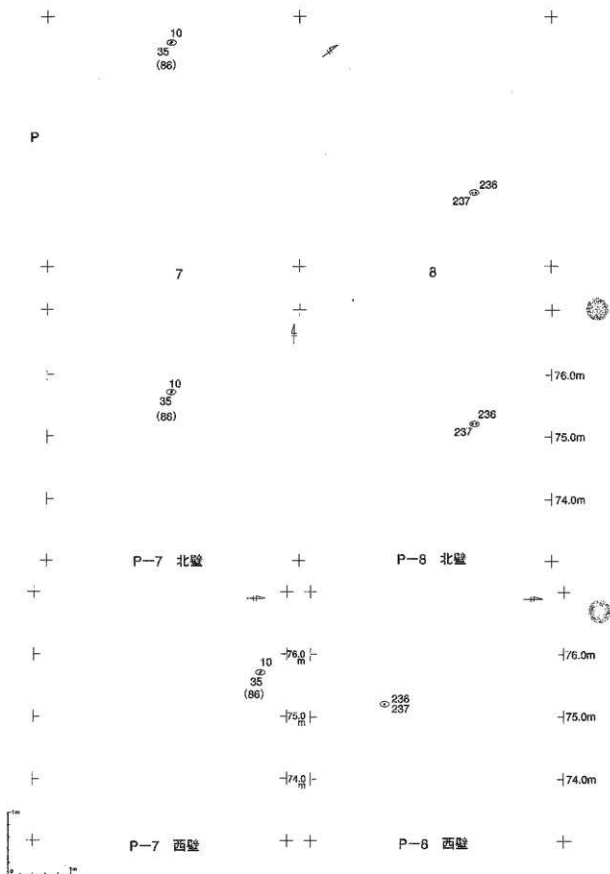
第67图 2区K~M-7~10调查区土器接合图(平面分布)(S—水平1/120、垂直1/15)



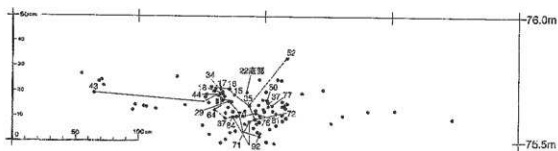
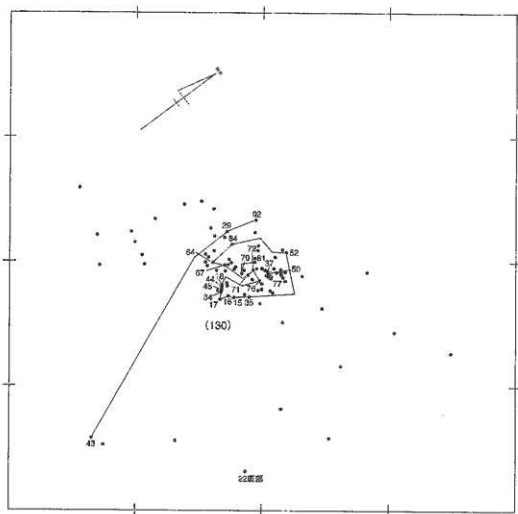
第68圖 2区K~M--7~10調查区土器接合圖(垂直分布)(S—水平1/120、垂直1/15)



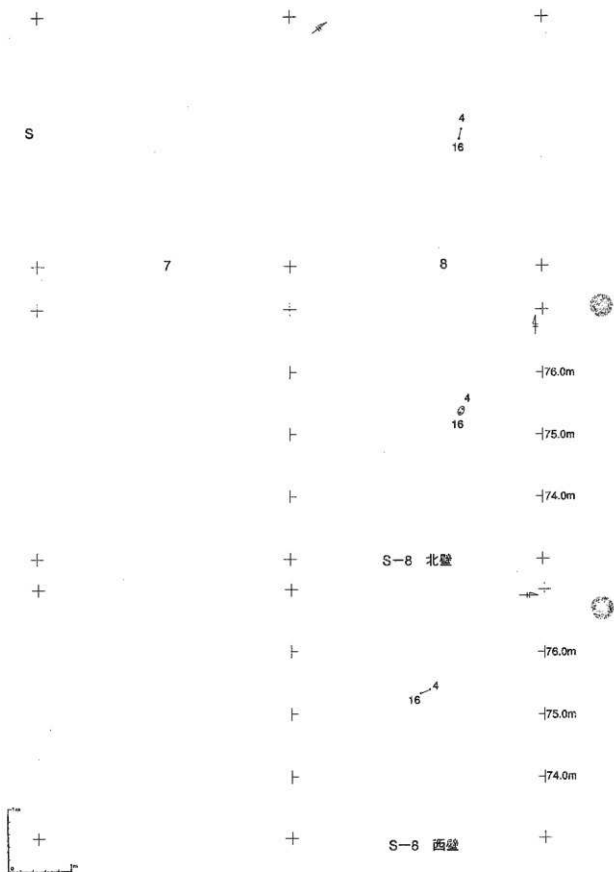
第69圖 2區N·O-3調查區土器接合圖 (S-1/60)



第70图 2区P-7·8调查区土器接合图(S-1/60)

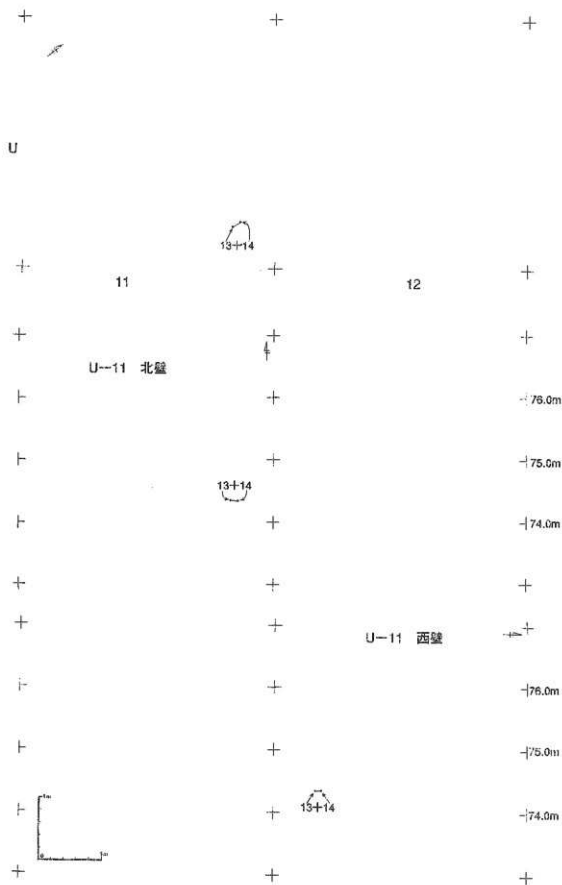


第71图 2区R-7测区土器接合图 (S-水平1/30、垂直1/15)

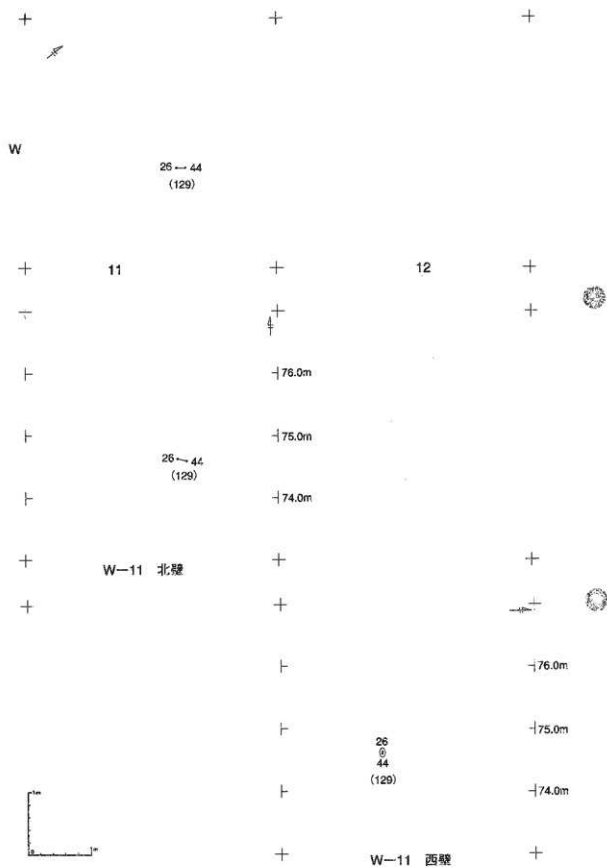


第72图 2区S-8调查区土器接合图(S-1/60)





第73图 2区U-11调查区土器接合图(S-1/60)



第74图 2区W-11调查区土器接合图 (S-1/60)

## 一イ、縄文土器

### 〔4層の土器〕

4層からは3点出土している。1区B-11調査区から1点、同G-2調査区からの2点である。いずれも小破片で文様等の特徴もなく、図化できなかった。3点とも角閃石、長石を含む砂分に富む胎土で、黄褐色～褐色を呈し晚期土器の範疇を出ないと思われる。従ってこれらの土器は、木根の貫入等何らかの原因で4層に入りこんだと考えられる。

### 〔3層の土器〕

3層からは4点出土している。これも4層の場合と同じく、1区のみでB-7調査区から2点、D-2、E-11調査区から各1点である。いずれも角閃石、長石を含む砂分に富む胎土で、黄褐色～褐色を呈する。これらも4層の場合と同様の原因で入りこんだものと思われる。

### 〔2層の土器〕

1・2区計5,660点余りの縄文土器破片が出土しているが、後期以前と判断したものは、約80点で全体の1.4%となる。なお、中・後期の資料として図示できる土器は出土していない。また、晩期以降の環境の変化とこの地域の土壌の性質によるためか、土器の細片化が進み、さらに表面が剥がれた土器が多いのも特徴のひとつである。

## 1) 早期～前期の土器

この期の土器については、細片まで含めて提示しているが、結果的に2区のみ出土資料となった。全体に風化が進み、文様が不鮮明な資料が多いが、早期後半の土器が多く含まれていると思われる。

### a) 爪形文土器 (第75図-1～3)

3点の出土である。いずれも傷みが進み、文様は不鮮明である。1は2区M-10調査区出土で胎土に石英・角閃石とともに滑石粉末を含んでいる。2はO-7調査区、3はP-8調査区出土で、細片のため詳細不明。

### b) 押型文土器 (第75図-4～9)

4は口縁で、内側に稜線があり刻み状の変化があるが、はっきりしない。背面に山形の押型文を施していると思われる。K-9調査区出土。5はL-5調査区出土で、背面に山形文があると思われるが、不鮮明である。6は背面に太目の山形文が押されている。内面は平滑であって、若干の成形痕が残る。L-10調査区出土。7はL-9調査区出土で、楯形の押型文と思われる。胎土に含まれる粒子は微細である。8も楯形の押型文があったと思われるが、磨耗が著しく、不鮮明である。O-8調査区出土。9はP-8調査区出土で、山形文と思われるが、文

様の残りは悪い。

c) 沈線文土器 (第75図-10~26)

外面に沈線を多用するグループで、壺形土器の頸部と思われる破片も含まれるが、全形を推定できる資料は出土していない。幅の狭い沈線をつけるのに用いた工具は、三角形のやや尖った先端をしていると推定される。

10はおおきく外に開く口縁の破片で、外面に数条の沈線が認められる。E-5調査区出土で2片の接合である。11は直口の口縁で、L-7調査区出土。12は10と同じくらいに外反する。M-9調査区出土。13は口縁端の外側に割り箸で押さえたような文様がある。P-8調査区出土。14は直口であるがわずかに内湾する。H-10区出土。

15は口唇外側に1条の沈線を施すが、別系統の土器の可能性もある。細片のため詳細不明。N-9調査区出土。

16は口縁に近い部分と思われる。幅広い沈線と右下がりの沈線を併用している。内面には刺突状の痕跡があるが、表面の傷みによってそのように見える可能性もあり断定できない。P-8調査区出土。

17、18、19は壺形土器の頸部のような傾きを持つ破片である。断面図、拓本ともよく似ているが、それぞれ別区からの出土である。

20~26は保存状態の悪い破片や細片を並べている。従って後出の隆帯文土器や条痕文土器の破片も存在している可能性がある。

20はE-5調査区出土。外面の傷みが激しいが、2条の細い沈線の痕跡がある。内面には成形痕が残る。21はM-9調査区出土。断面三角形の沈線が観察される。22はO-7調査区出土。比較的太目の沈線である。23は凹線状で、次の分類である隆帯文に含めるべきかもしれない。P-8調査区出土。24は細い断面三角形の沈線の痕跡が3条残っている。R-7調査区出土。25は細片であって曲線を描く沈線があるように見えるが、後世の傷である可能性もあり詳細不明。

26は器壁が薄く黒色を呈し、他の土器と異なる様相があり、時期的に古くなる可能性がある。

d) 隆帯文土器 (第75図-27~37)

細い粘土紐を帯状に貼り付けたように見える土器の一群を隆帯文土器とした。他に然るべき名称があれば変更する必要があると思われる。このグループに含まれる資料には壺形土器が多く、隆帯の断面形はおおむね三角形で、刺突文を伴うものがある。

27は口縁部の資料である。磨耗が著しいが、現存部分に3条の隆帯が認められる。I-9調査区出土。

28は壺形土器の頸部と思われる。2~3条の隆帯があり、さらに刺突を加えたように見える。内面にも刺突状の痕跡がある。胎土には小孔が多い。P-6調査区出土。29は28とほぼ同じ部

位の破片と思われる。K-9 調査区出土。30は頸部から肩部にかけての破片と思われる。E-5 調査区出土。

32はL-10調査区出土で、5片を接合した。壺形土器の頸部～肩部の破片と思われ、肩帯部に2条の段をつけ、刺突を加えている。内外とも剥落が進み、調整は不明。外面は赤褐色、内面は黄褐色を呈する。砂分の多い胎土である。なお後出の底部資料として一括したものの内、O-8 調査区出土の88はこの壺形土器に良く似た様相を持つため、同系統の土器の底部である可能性がある。

上記の壺形土器に類した資料は、本遺跡に隣接する上峰原遺跡（注1）や南高来郡国見町の松尾遺跡、百花台遺跡（注2）から出土している。なお鷹島海底遺跡からは押型文の壺形土器が出土していることが報告されている（注3）。

33～36は磨耗著しく隆帯の残りは悪い。いずれも長石、角閃石を含んだ砂分の多い胎土である。

33はH-7調査区出土。表面の傷みが激しいが、5条ほどの隆帯が観察される。34はL-4調査区出土。35は右下がりの条痕状の文様である。M-10調査区出土。36は風化著しく、隆帯とも沈線とも条痕とも言える状況である。N-4 調査区出土。

37は隆帯については不明であるが、32に良く似た刺突文が施されているのでここに分類した。

31はやや薄い器壁と色調が26と共通する。細い隆起線状の文様があるが細片のため不詳。26と同様にここに提示した資料の中では古い様相が認められる。

（注1）本遺跡に近接した「上峰原遺跡」（峰ノ原遺跡）の調査が、1974～1975年に実施されており、その際本遺跡出土の壺形土器に類似した資料が出土している。『「諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 図録編」長崎県教育委員会 1975』P26所載の土器実測図参照。

（注2）報告書は未見であるが、下記の文献で紹介されている。  
辻田直人「長崎県における新発見の遺構・遺物について—縄文時代早期を中心に—」『西海考古第2号』西海考古同人会 2000

（注3）「鷹島海底遺跡」長崎県鷹島町教育委員会 1993

#### e) 条痕文土器（第76図-38～60）

本遺跡においては、早期の土器と晩期の土器が混在して出土している。従って条痕のある土器には両時期のものが含まれていると思われる。そのうち古い様相を持つものを早期の資料として提示するが、資料が小破片の状況であるため、両者を明確に分離することは困難であり、晩期の土器が混入している可能性がある。口縁部等、部位による特徴がないため調査区順に掲載した。

38・39はD-5調査区出土。38は口縁の可能性はある。39は黒曜石のような粒を含んでいる。40・41はE-4調査区出土。どちらもやや外反する傾向にある。

42～45はE-5調査区出土。この内43・45は黄褐色系統の色調や砂粒の入り方に共通性があ

る。44は前の2点とはほぼ同じであるが、長石、角閃石の他に白色粒子が認められる点で異なっている。42は前3点よりも褐色気味の色調である。

46はH-9調査区出土。内面はナデ仕上げと思われるが、ところどころ剥落している。47はJ-8調査区出土。傷みが激しい。48はK-6調査区出土。斜め方向の曲線を描く条痕と思われる。

49はL-9調査区出土。細片のため確定できないが、縦方向の条痕と思われる。50・51はM-9調査区出土。50は磨耗著しく、痕跡程度に文様が残っている。51も同様である。

52・53はM-10調査区出土。52は右下がりの細かな条痕がある。53は縦方向で作図したが、あるいは横方向の条痕かもしれない。滑石粉末を含む。

54はN-9調査区出土。文様の残りは悪い。55・56はO-8調査区出土。55は斜め方向の条痕と思われる。56は横方向の荒い条痕である。胎土が荒く、晩期の雰囲気もある。

57・58はP-8調査区出土。57は細かな条痕に見えるが、押型文であったかもしれない。58は堅緻な焼成であり、内面は平滑である。

59はR-7調査区出土。この区からは晩期の甕も出土しており、この破片も晩期に属する可能性もある。

60はW-11調査区出土。荒い深い条痕が残っている。

#### f) 滑石を多量に含む土器 (第77図-61)

61は2区I-4調査区出土。小破片のため断定はできないが、早期～前期の土器と思われる。外面の調整は炭化物の行着と風化で確認できない。内面に横方向の条痕があり、胎土に多量の滑石をふくむ。外表面は淡黄褐色であるが、破面は銀黒色である。

## 2) 晩期の土器

### a) 浅鉢形土器 (第77図-62～101)

62～101は浅鉢形土器の資料である。そのほとんどが表面を研磨しているが、いわゆる「黒色」のものは少なく、茶色、褐色、黄褐色の表現に含まれる資料が多い。

62は丸く張った胴部に直接玉縁状のふくらみを付け口縁としている。玉縁の内面に沈線があった可能性がある。形状とともに、胎土に石英細砂を含み黒褐色である点も他と異なる。

63は丸く張った胴部に、垂直に近い立ち上がりの短い口縁部を付けたタイプである。

64・65は63よりもやや外側に口縁部が傾き、口唇部のつくりが簡略化されている。64の復元口径は21.2cm。

66～68は丸く張った胴部に、「く」の字形に外反する短い口縁部を付けるタイプである。78がほぼ全形を知りうる資料で、口径17.3cm、胴径19cmに復元できる。口径は胴径を上回らず、口唇部の内外に、一本ずつの沈線(凹線)を用いて段を付けるのが基本形と思われるが、口唇部の細かな変異が個体ごとに認められるのも特徴的である。

79～84は直線的な口縁部を、直線的な胴部に段違いに貼り付けている。口縁は水平ではなく、緩やかな曲線を描くものと思われる。口縁端はやや角張り、81・83のように口唇外側に痕跡程度の沈線を施したものがある。

86は浅い皿状の胴部に大きく外反する口縁部を持つ器形であり、屈曲部に明瞭な段差を持たない。85はその口縁と思われる破片である。86の復元口径は22.8cm、器高は6.6cm。屈曲部外面に炭化物が付着しており、これより上は褐色、下方に行くに従って赤褐色となる。なおこの浅鉢には研磨が認められず、全体ナア仕上げと思われる。

87～97は口縁部小破片の資料である。93は中央部を凹ませた俵状の突起をのせている。

94は口縁端の内側に断面半円形状の突起を付け、その上に2連式の突起を付けたものと思われるが、提示資料は1個が脱落している。

97には補修孔と思われる孔の一部が残っている。

98は張りの弱い胴部とゆるく外反する口縁部を持つ器形である。99は98によく似た曲線を持つ破片であるが、かなり厚みがある。研磨痕は明瞭である。

100・101は98の口縁部を上方に引き伸ばした器形と思われる。101は口唇外側の装飾が多い。

#### b) 鉢形土器 (第77図-102～108)

102は口唇内側に角を立て、外側に凹線を用いてアクセントをつけた口縁部の破片である。高坏の坏部であるかもしれない。103はほぼ同タイプの細片である。

104～106は全体の器形を想定するには足りないが、ここに分類した。あるいは強の口縁かもしれない。104は山形をなす口縁の一部で背面にかすかな沈線状の文様が残る。

105は波状の口縁で、内外面とも条痕の調整であった可能性がある。106は外面に条痕が残る。口縁端は水平ではない。107の口縁に相当するのではと思われる。

107は深鉢形の胴部である。1区E-11調査区からの出土の接合資料である。屈曲部より上は横方向の条痕があり、下方は平滑であってナア仕上げと思われる。外面の所々に煤が付着している。屈曲部の内面に接合の痕跡が残り、一部に指跡状の凹みがある。胎土には長石、角閃石とともに結晶片岩の粒子を含む。

108は内外ともに研磨された土器である。

#### c) 碗形土器 (第77図-109～111)

109は47と同一区で出土。剥落著しいが、研磨されていたと思われる。

110は口縁が水平ではない。内外とも研磨されていたと思われる。

111も研磨と思われるが外面に条痕の痕跡が若干残る。110・111は2区E-5調査区出土。

#### d) 甕形土器 (第78図-112～130)

130は甕形土器の中で唯一全形を想定できる資料である。2区R-7調査区の遺物集中区で

出土した。「埋蓋」に使用されるタイプであるが、遺構を伴わず、黒曜石の破片や他の土器片と一緒に出土したので、包含層内遺物として提示している。

口縁部で3点、胴部で15点の破片を接合することができた。図の点線部分の破片もあると思われるが、直接には接合できていない。復元口径は28cm前後であるが歪が大きい。高さは30.5cm程度。全般に風雨にさらされたように風化が進んでいる。

外面には条痕があり、内面は平滑である。外面の色調はおおむね褐色であるが、胴下部から底部にかけては赤褐色である。内面は褐色～黒褐色で胴下部から底部にかけては黒色である。胎土は荒く、砂粒を固めたような感がある。

112～121は蓋の口縁資料であり、いずれも粗製である。112・113は頂部が角張っている。

114は緩やかに波打つ口縁と思われる。115・116は外面に条痕が残る。

117は直線状の立ち上がりで、外面に横方向の条痕がある。

118は突帯を貼り付けた口縁に見えるが、頂部が傷んでおり、この部分で折れている可能性もある。119は黒色で、外面に荒い条痕がある。あるいは深鉢になるかもしれない。

120は内類する口縁の資料であり、外面のみ条痕がある。121は口唇部を欠くが120と同様の口縁であると思われる。

122～129は胴部の破片である。122は2区K-5調査区の作業ビットから出土した資料で、焼成が弱く、取り上げ時に破損している。外面に条痕があり、炭化物が付着している。かつて下峰原遺跡で出土した埋蓋に酷似している。

123は作業ビット上面の近くで出土した資料で、焼成弱く外面に炭化物が付着している。胎土に細かな有機物を混ぜて焼いたように見え、気泡状の孔があり、炭化したままの粒も見られる。

124は外面に横方向の荒い条痕があり、内面は横方向の細かな条痕が施されている。125～129は外面にのみ条痕のある資料である。いずれも焼成の程度は良い。

#### e) 底部資料 (第78図-131-145)

年代及び器種を特定する手がかりに乏しい破片がほとんどである。131～139はくびれがあるもの、140～142はくびれない資料である。後者には年代を古くすべき資料が含まれていると思われる。

143は厚みのある底部で、通常の器形からはずれている。144は鉢類の底部と思われる。145は細片であるが、コップ状の土器の底部になるような形状である。



一ウ、その他の土器資料

1) 刷毛目のある土器 (第79図-146~152)

146は2区N-9調査区出土。細片で詳細不明であるが、内面に刷毛目があり弥生土器の可能性がある。

147は2区H-4調査区出土。一部撓乱を受けているが、5片の接合資料である。丸底に近い荒い作りの底部であり、内面に指跡が残る。外面は傷みが激しく磨耗等観察できないが、内面には細かな刷毛目がある。弥生終末期の土器と思われる。148は147と同一個体と思われる破片で、刷毛目が比較的よく残っている。

149・150は2区G-8調査区撓乱層出土で、147と同系統の土器であるが、この2点には外面に刷毛目が残っている。

151は土師器と思われる資料である。残存状況は悪いが、外面に刷毛目の痕跡がある。152は151に続く部分と思われる。外面に刷毛目があり、ところどころに炭化物が付着している。内面はヘラケズリと思われる。2区I-6調査区出土。

2) 内黒碗、瓦質土器等 (第79図-153~160)

2区F-9調査区を中心に平安期と思われる土器が出土している。いずれも胎土は精製され雲母の微粉末を含んでいる。153は、もう少し大きく復元できるかもしれないが、小ぶりの碗形で外面は褐色、内面は黒色である。

154は口唇部外面から内面にかけては黒色で、外面下方は肌色である。155は口唇部外面から内面にかけては黒色で、外面下方は黄白色である。内面にはミガキの痕が観察できる。

156は低い高台を持つ底部である。F-8調査区出土の破片と、やや離れたH-9調査区出土の破片が接合している。内面は灰黒色で瓦質化し、ミガキ痕がある。外面は肌色で軟らかい。

157は高い高台の底部である。内面は灰黒色、外面は肌色である。

158は瓦質で、芯まで黒色である。内外とも横方向のミガキを施し、光沢を持たせている。焼成良く硬質である。

159は瓦質の低い高台の底部で、内外とも黒色であり、芯は灰色である。内面にはわずかに光沢が残る。

160は土師質の皿である。肌色で軟質。保存が悪く、底面の切り離しの状況は不明。

一エ、近世~近代の資料

1) 近世の資料 (第79図-161~172)

161~164は2区O-5区から礫群とともに出土した資料である。161は陶器のすり鉢で、残存部分は無釉。暗紫色で焼成は良い。

162は陶器の甕の破片でクタクキ成形の後、格子目を板状の工具で消している。内外とも施釉。近隣では大村市の「土井の浦窯」でこのようなすり鉢や甕を焼いている。

163は染付碗の口縁である。164は砥石の小破片である。表裏の2面を使用しており、両面に細い溝状の研ぎ痕がある。

165は2区表深の陶器碗の底部である。白い精良な胎土に透明釉を掛けている。「京風陶器」のうち、高台裏まで施釉するタイプである。類品は前出の土井の浦窯にも見られる。

## 2) 近世～近代の資料(第79図-166～172)

1区と2区の境界付近で、表土層から近世末～近代の陶磁器類がまとまって出土したが、生活遺構を伴わず、廃棄物として持ち込まれたものと判断される。

166はいわゆる「くらわんか手」の染付碗である。生地は灰色がかっており、呉須の発色は悪く、暗い。

167は染付の底部で、高台が高く大きい。口縁が外開きになる「広東碗」型の底部と思われる。近隣の窯では「長与窯」で大量に生産されている。

168・169は明治期の印判手の碗である。168は小碗で、全く同形・同一意匠の別個体が1区L-7調査区で出土している。169の見込みには文様とともに熔着痕が残る。

170は2区の表探資料で、「メンコ」である。緑色染料を用いたシルクスクリーン印刷の文様がある磁器碗の高台脇を打ち欠いて作っている。大正～昭和期ではないだろうか。

171は万古焼の急須で、「萬古」の銘のある部分の拓図を掲載した。金彩を用いた精巧で非常に薄い作りの破片が数点出土している。

172は1区K-9調査区表土層出土の寛永通宝で、判読困難な状態まで錆が進んでいる。

## (参考文献)

### 一 縄文晩期関連一

- ① 黄川光夫「九州」『新版考古学講座3 先史文化』雄山閣 1969
- ② 「黒丸遺跡ほか発掘調査概報1」長崎県大村市教育委員会 1997
- ③ 「黒丸遺跡ほか発掘調査概報2」長崎県大村市教育委員会 2000
- ④ 「京ノ坪遺跡」長崎県壱岐町文化財保護協会 1994

### 一 近世陶器関連一

- ⑤ 「土井の浦古窯跡」長崎県大村市教育委員会 1991

番号	記号	母音	子音	数	種別	時期	不明	部位	文字	角	長	他	色	備考
1	II	M	10	80	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	番号の可能性もある
2	II	P	8	134	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
3	II	O	7	22	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
4	II	X	9	52	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
5	II	L	5	3	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	微細粒子
6	II	L	10	125	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	微細粒子
7	II	L	9	115	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	微細粒子(角・長)
8	II	O	8	180	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
9	II	P	8	343	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
10	II	E	5	53+54	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	微細粒子
11	II	L	7	1	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
12	II	M	9	95	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
13	II	P	8	83	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
14	II	H	10	121	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
15	II	N	9	63	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
16	II	P	8	334	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
17	II	D	5	52	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
18	II	H	5	1	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	板状 炭化物付着
19	II	L	9	79	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	混乱であるが掲載
20	II	E	5	47	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
21	II	M	9	25	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
22	II	O	7	34	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
23	II	P	8	272	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
24	II	R	7	65	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
25	II	V	11	12	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
26	II	U	12	41	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
27	II	I	9	30	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
28	II	P	6	34	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
29	II	K	9	55	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	微細粒子
30	II	E	5	74	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	刻みあり
31	II	L	9	243	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
32	II	L	10	110外	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	やや古い模相
33	II	H	7	5	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	突帯に割突が刻み
34	II	L	4	1	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
35	II	M	10	289	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
36	II	N	4	25	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
37	II	J	9	30	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	刺突文
38	II	D	5	5	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
39	II	D	5	124	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	黒曜石?を含む
40	II	E	4	87	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
41	II	E	4	124	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
42	II	E	5	35	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
43	II	E	5	36	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
44	II	E	5	80	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
45	II	E	5	85	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
46	II	H	9	32	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
47	II	J	8	41	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
48	II	K	6	36	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
49	II	L	9	179	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
50	II	M	9	34	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
51	II	M	9	92	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
52	II	M	10	8	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
53	II	M	10	22	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
54	II	N	9	54	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
55	II	O	8	163	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
56	II	O	8	182	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
57	II	P	8	197	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
58	II	P	8	330	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
59	II	R	7	88	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	
60	II	W	11	49	2	縄文	早期	不明	爪形文	角	長	他	褐色	

第21表 掲載土器一覽表 1

(粒子の略号 角=角閃石、長=長石、雲=雲母、英=石英、滑=滑石、他=その他の粒子)

番号	層	位置	年代	土質	形状	時期	部位	原料	滑石多量	色	備考		
61	II	I	4	3	2	縄文	不明	胴部	多重	不良	淡黄褐色	炭化物付着	
62	E	M	10	124	2	縄文	不明	口縁	不明	不良	黒褐色		
63	II	J	9	11	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	見えない	良	茶色	
64	II	P	7	52	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	褐色	
65	II	N	8	9	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	赤褐色	
66	II	E	5	27	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長・他	良	褐色	
67	I	D	5	59	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	黄褐色	
68	I	E	4	5	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	灰茶色	
69	II	J	8	65	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	不良	褐色	
70	I	G	10	4	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	不良	茶色	
71	I	B	12	16	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	灰茶色	
72	I	F	10	12	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	角・長	良	褐色	
73	E	E	7	6	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	見えない	良	肌色	
74	II	N	9	44	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	角・長	良	黄褐色	
75	II	J	9	12	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	灰黒色	
76	II	L	9	49	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長・他	良	黄褐色	
77	II	L	9	151	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	黄褐色	
78	II	E	5	134+186	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長・雲	良	黒色	
79	II	M	10	19*	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	黄褐色	
80	II	M	9	15	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	角・長	良	褐色	
81	II	L	10	48	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	黄褐色	
82	I	E	12	9	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	角・長・他	不良	黄褐色	
83	II	M	9	157	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	不良	黄褐色	
84	II	M	9	46+80	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	褐色	
85	I	D	10	1	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	粗	良	こげ茶	
86	II	P	7	10+35	2	縄文	晩期	浅鉢	ナデ	角・長	良	褐色	
87	II	J	9	29	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	黒褐色	
88	I	C	11	34	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	不良	灰茶	
89	II	E	4	113	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	角・長	良	黄褐色	
90	II	E	5	229	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	精	良	茶色	
91	II	E	5	32	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	角・長	良	褐色	
92	II	溝	A	5+6		縄文	晩期	浅鉢	不明	角・長	良	黒褐色	
93	II	N	8	2	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	赤褐色	
94	II	N	4	13	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長・英	良	褐色	
95	II	L	6	1	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	淡黄褐色	
96	II	N	5	24	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	角・長	良	黄褐色	
97	II	I	10	24	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	角・長	良	黄褐色	
98	II	試	4	33+34	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長・他	不良	茶色	
99	II	J	8	50	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	不良	灰茶色	
100	I	G	8	6	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長・他	良	黄褐色	
101	I	J	2	70	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	角・長	良	赤褐色	
102	I	E	11	44*	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	角・長・他	良	薄茶	
103	I	F	10	48	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	角・長	良	黄土色	
104	II	O	5	7	2	縄文	晩期	浅鉢	不明	粗	角・長・英	良	褐色
105	II	R	7	39	2	縄文	晩期	浅鉢	条痕	角・長	良	褐色	
106	II	E	5	6	2	縄文	晩期	深鉢	条痕	角・長	良	黄褐色	
107	I	E	11	43*	2	縄文	晩期	深鉢	条痕	角・長・他	良	褐色	
108	I	E	9	7+21	2	縄文	晩期	浅鉢	研磨	角・長	良	灰茶色	
109	I	E	11	36	2	縄文	晩期	碗	研磨	角・長	良	薄茶	
110	II	F	5	54	2	縄文	晩期	碗形	研磨	角・長	良	褐色	
111	II	E	5	188	2	縄文	晩期	碗形	研磨	角・長	良	黒色	
112	I	F	9	11+12	2	縄文	晩期	丸	不明	粗	角・長・他	良	褐色
113	II	L	9	241	2	縄文	晩期	丸	不明	粗	角・長	良	黄褐色
114	II	E	6	7	2	縄文	晩期	丸	不明	粗	角・長・他	良	褐色
115	II	R	7	79	2	縄文	晩期	丸	条痕	角・長	不良	褐色	
116	E	R	9	5	2	縄文	晩期	丸	条痕	角・長	不良	褐色	
117	II	J	6	3	2	縄文	晩期	丸	条痕	粗	角・長	不良	茶褐色
118	II	R	7	80	2	縄文	晩期	丸	ナデ	角・長	良	黄褐色	
119	I	F	10	63+64	2	縄文	晩期	丸	不明	粗	角・長	不良	黒色
120	I	J	2	66	2	縄文	晩期	丸	不明	粗	角・長	不良	薄茶

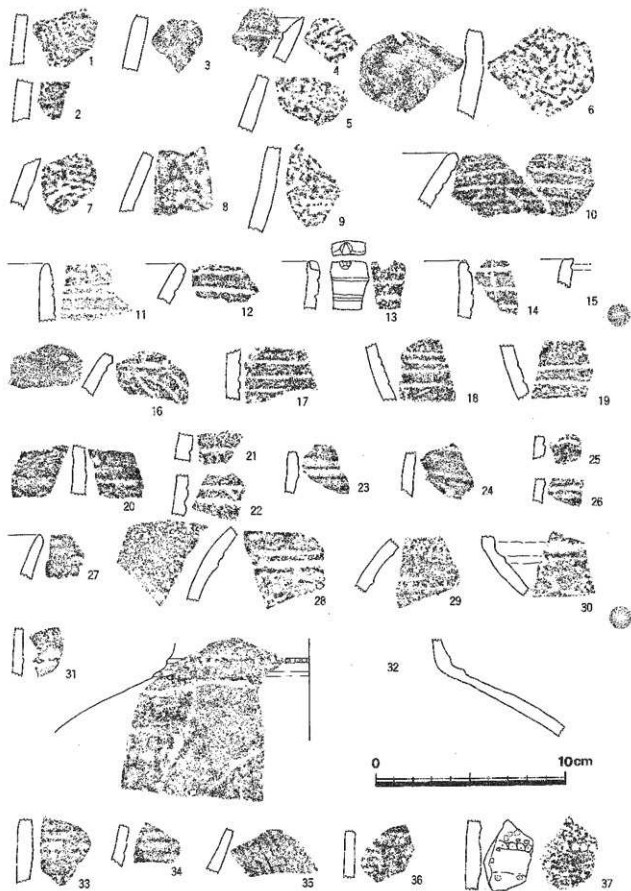
第22表 掘出土器一覽表 2

(粒子の略号 角=角閃石、長=長石、雲=雲母、英=石英、滑=滑石、他=その他の粒子)

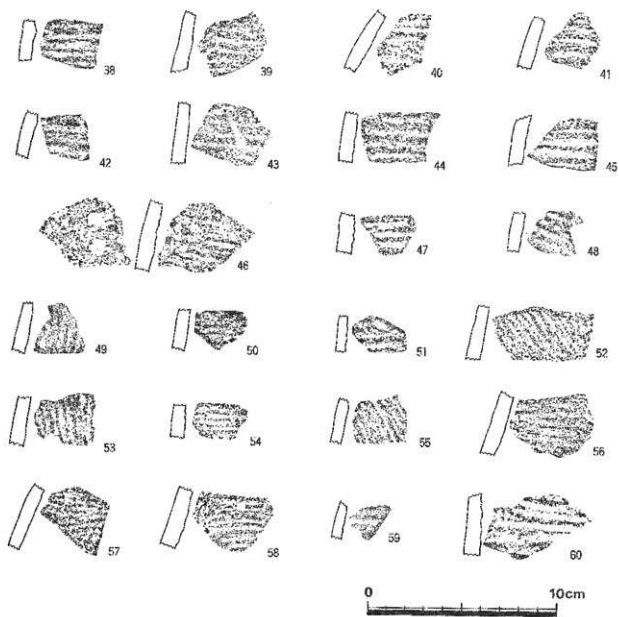
121	II	試	4	2	2	魏文	晚期	察	胴部	染風	角	長	他	良	黄褐色	
122	II	K	5	239	2	魏文	晩期	察	胴部	染風	角	長	他	不	暗褐色	作業ビット
123	II	K	5	23	2	魏文	晩期	察	胴部	染風	角	長	他	不	灰白色	
124	II	E	5	247	2	魏文	晩期	不明	胴部	染風	角	長	良	不	褐色	
125	II	L	10	132	2	魏文	晩期	不明	胴部	染風	角	長	英	良	褐色	
126	II	N	4	26	2	魏文	晩期	不明	胴部	染風	角	長	英	良	赤褐色	
127	II	E	5	139	2	魏文	晩期	不明	胴部	染風	角	長	他	良	黄褐色	
128	II	K	7	184	2	魏文	晩期	不明	胴部	染風	角	長	他	良	褐色	
129	II	W	11	26+44	2	魏文	晩期	不明	胴部	染風	角	長	他	良	褐色	
130	II	R	7	294	2	魏文	晩期	不明	胴部	染風	角	長	他	良	褐色	
131	I	G	9	9	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	他	良	褐色	
132	II	E	5	69	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	他	良	褐色	底面平滑
133	II	E	4	71	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	他	良	褐色	
134	II	E	5	100	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	他	良	黒褐色	
135	II	E	5	239	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	他	良	赤褐色	
136	II	K	10	33	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	他	良	黒褐色	
137	II	L	9	59	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	英	良	赤褐色	
138	II	P	8	127	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	他	良	赤褐色	
139	II	Q	9	29	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	他	良	暗赤褐色	
140	II	O	8	148	2	魏文	早期	不明	底部	不明	角	長	他	良	黒色	
141	II	R	9	43	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	他	不	赤褐色	内面炭化物
142	II	C	6	11	2	魏文	不明	不明	底部	不明	角	長	他	不	褐色	
143	II	試	4	16	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	他	良	淡赤褐色	重い
144	II	E	5	45	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	他	良	暗赤褐色	
145	II	N	9	61	2	魏文	晩期	不明	底部	不明	角	長	他	良	赤褐色	
146	II	N	9	58	2	察?	不明	不明	底部	不明	角	長	他	良	淡赤褐色	
147	II	H	4	2外	2	誕生	終末	不明	底部	刷毛目	角	長	他	不	黄褐色	一部復乱
148	II	H	4	7	—	誕生	終末	不明	胴部	刷毛目	角	長	他	良	黄褐色	
149	II	G	8	表土	—	誕生	終末	不明	胴部	刷毛目	角	長	他	不	黄褐色	75の上層と思われる
150	II	G	8	1	2	誕生	終末	不明	底部	刷毛目	角	長	他	良	黄褐色	
151	II	I	6	5	2	土師	不明	不明	胴部	刷毛目	角	長	他	良	褐色	
152	II	I	6	4	2	土師	不明	不明	胴部	刷毛目	角	長	他	良	褐色	77の下層と思われる
153	II	E	7	1	2	古代	平安	内黒	口縁	不明	蓋母	良	良	褐色		
154	II	F	9	1+18	2	古代	平安	内黒	口縁	不明	蓋母	良	良	肌色		
155	II	E	8	18+19	2	古代	平安	内黒	口縁	ミガキ	蓋母	不	不	黒色		
156	II	F	8	11外	2	古代	平安	内黒	底部	ミガキ	蓋母	不	不	肌色		
157	II	F	9	2	2	古代	平安	内黒	底部	不明	蓋母	不	不	肌色		
158	II	F	5	表土	—	古代	平安	瓦質	口縁	ミガキ	蓋母	良	良	肌色	窯質	
159	II	F	9	15	2	古代	平安	瓦質	底部	ミガキ	蓋母	良	良	黒色		
160	II	F	9	17	2	古代	平安	土質	—	ミ	蓋母	不	不	肌色		
161	II	O	5	黒石1	—	近世	陶器すり鉢	—	胴部	—	—	—	—	暗紫色	18世紀初	
162	II	O	5	黒石1	—	近世	陶器壺	—	胴部	—	—	—	—	黒色	格子目	
163	II	O	5	黒石1	—	近世	磁器鉢	—	口縁	—	—	—	—	良	草花文	
164	II	O	5	黒石1	—	近世	磁器碗	—	口縁	—	—	—	—	—	2面使用	
165	II	表土	表土	表土	—	近世	陶器碗	—	底部	—	—	—	—	—	京風・真釉種	
166	II	C	5	表土	表土	近世	磁器染付碗	—	口縁	—	—	—	—	—	くらわんか手	
167	II	C	5	表土	表土	近世	磁器染付碗	—	底部	—	—	—	—	—	—	
168	II	C	5	表土	表土	近代	磁器染付碗	—	全形	—	—	—	—	—	広東磁器	
169	I	J	7	表土	表土	近代	磁器染付碗	—	全形	—	—	—	—	—	印刷手	
170	II	H	7	表土	表土	近代	磁器メンコ	—	全形	—	—	—	—	—	シルクスクリーン印刷	
171	I	L	7	表土	表土	近代	陶器きょうす	—	胴部	—	—	—	—	—	—	万古焼
172	I	K	9	表土	表土	近世	寛永通宝	—	全形	—	—	—	—	—	—	焼化進む

第23表 掲載土器一覽表 3

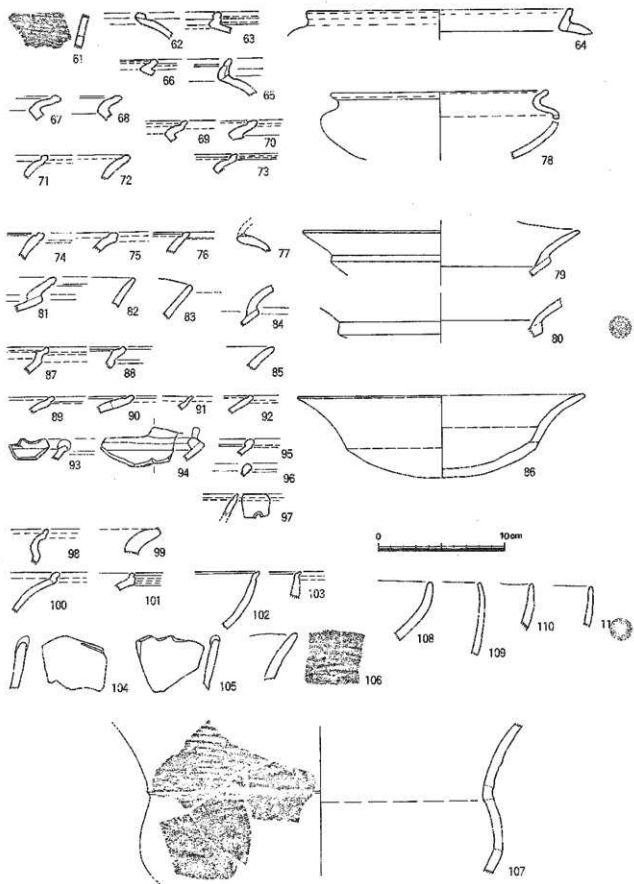
(粒子の略号 角=角閃石、長=長石、縹=磁母、英=石英、滑=滑石、他=その他の粒子)



第75图 土样采集图

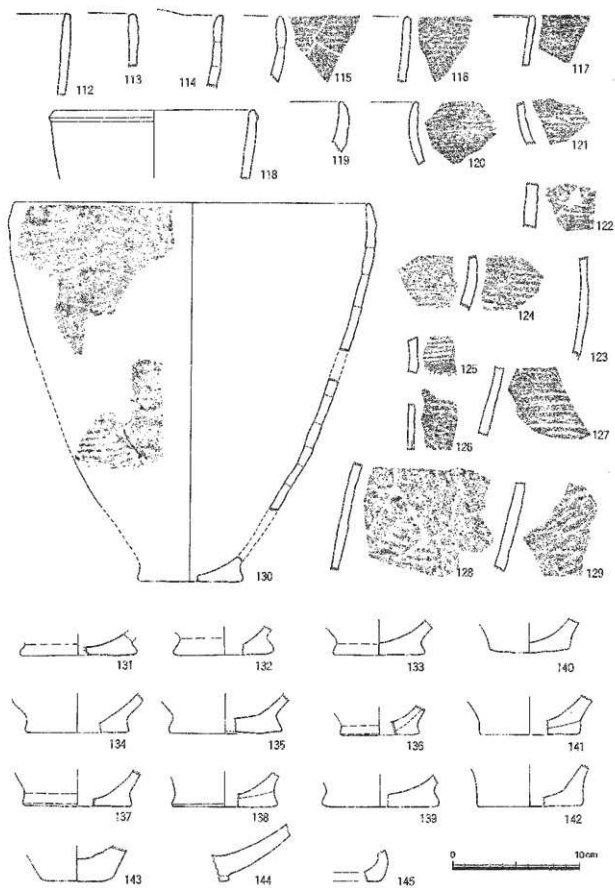


第76圖 土器実測圖 2

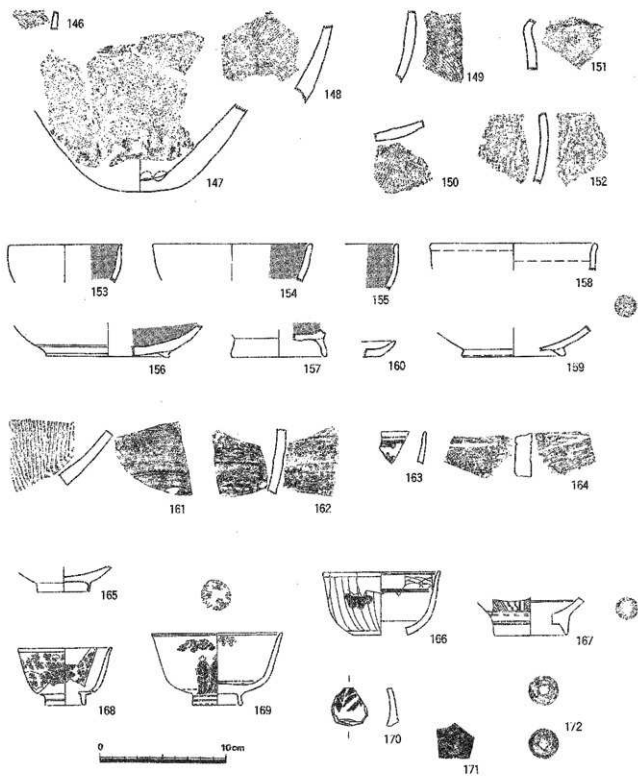


第77圖 土器実測圖 3





第78图 土器实例图 4



第79圖 土器実測図 5

## IV 総括

### 一 本遺跡出土石器群の所属する時期

今回検出された遺物で、旧石器時代に属するものとして第3層石器群が挙げられる。

3層石器群は、二側縁加工ナイフ形石器、小型ナイフ形石器、部分加工のナイフ形石器、原の辻型台形石器、その他の台形石器、縦長石刃を素材とした彫器、搔器、石錐、鋸齒縁石器、角錐状石器などから組成されている。

この3層石器群の平面分布をもとに、主体的な石器を中心にして遺物分布の纏まりをユニットとして13箇所確認した。その組成は第13表に揭示したとおりであるが、各ユニットの遺物総数が414点と極めて少なく、本来の石器組成を示しているとは考えにくい。そこで、2層包含中の遺物を追加(註1)して組成させたものが第24表である。2層遺物の追加は60点で、3層の主たる石器と合わせても130点を数えるに過ぎない。なお2層遺物の追加については各ユニットの分布範囲内を基本にして、2層遺物中ナイフ形石器など主体的石器のみを抽出した。

追加前の組成で主たる石器類を保有しないユニットは4、5、6、12、13に認められた。追加後は6、13に主体的石器が組成されず、ユニットの機能差を表象しているものと考えられる。これは、ユニット13に隣接してピット群が検出され、かつ遺物の分布も見られないことから、本遺跡のユニットとピット群は場の機能に関し相関関係を有しているのではないかと想定される。

つぎに3層石器群の時間的位置付けについて触れてみたい。各ユニットの遺物保有関係については、ユニット4、5、9、10でそれぞれ台形石器Ⅱ類を保有している。原の辻型に分類されるもので、ユニット10では3点の台形石器がすべてこの類である。また2層からの追加遺物中にはナイフ形石器Ⅱ、Ⅵ類を包含し、ともに鎗野・椎葉川産の失透質灰茶色黒曜石を素材としており、同ユニットにおける石器素材選択の規制が認められる。この椎葉川産素材の石製品はユニット1、2、3、10、13にも確認でき、遺物の接合関係や共有関係は確認できないものの分布関係にあったことが判明し、これは同時性をも表象していると思われる。

ユニット12は無斑晶質安山岩製石製品を4点保有すること、2層の分布の密集(第32図)から他のユニットとは若干性格を異にする向きもあるものの、前記椎葉川産素材のナイフ形石器Ⅱ類を有することや、ユニット7にも無斑晶質安山岩製石製品を保有することから共時性が窺われよう。

さらに、ユニット7には無斑晶質安山岩製石製品とともにナイフ形石器Ⅰ、Ⅵ類を保有していることから、ナイフ形石器Ⅰ類とⅡ類の共時性が導き出される。

以上の各ユニットの遺物保有関係からすると、ユニット個々に遺物組成の異同は存在するものの、いずれも同一時期に成立・機能していたものと見なされ、石器組成の異同・すなわちユニット間の差は補完的な関係にあったものと想定される。そしてその時期は角錐状石器の存在や、これらを含む石器組成から、A T降灰以後の西輪久道遺跡上層石器群(註2)、百花台東Ⅰ石器群(註3)との併行関係を想定している。

なお、ユニット3とした2層出土の台形石器の中に、腹・背面に平坦剥離を多用した枝去木型の例(第44図106)や小型縦長剥片を横位に用いた百花台型の例(第44図111)が存在してい

2 層建物の該当件数番号																								
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13												
B 7	12	0	0	8	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	24	26	122,125
B11.12	32	0	0	9	3	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	49	52	94,97,241
C 8, 9	39	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	48	53	76,95,106,135,232
C10	19	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	21	108
C11	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	21	109
D11	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19	20	137
C12	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19	20	137
D7	6	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	11	73,87
D9	14	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	43	
D10.11	93	0	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	101	110	70,86,93,98,104,105,118,123,130
D12	24	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	26	31	75,83,85,99,103
E12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	
E 9, 10	18	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	25	74,102,150
F 9	17	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	24	77,193,200,240
G 9	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	34	37	124,208,231
E11	33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
F11.12	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
計	345	1	32	4	1	2	1	11	2	3	3	6	2	1	0	0	0	0	0	0	0	414	474	
	0	4	1	1	1	0	5	1	20	0	13	0	11	0	2	1	1	1	1	1	1	60		

第24表 1区3層ユニット組成一覧(3層設置/2層追加設置)

るが、当該期の所産として理解しておきたい。

3層石器群に続く石器群に、縄石器文化期の一群がある。ユニット8で確認されたもので、細石刃26本、近接する他調査区2層検出の遊離状態にある細石刃核3点と表土出土の1点、遊離状態の細石刃126点から組成されるが、共存する石器群の実態は現在のところ明確でない。

ただ2層出土遺物のうちわずか1点であるが草創期の所産かと推察される隆線文土器が存在する(註4)。縄文時代草創期に属する細石器群か、あるいは旧石器時代終末期の所産であるのか、今後の類例の増加により解決すべき課題である。

## 一 2 土器について

本調査出土の土器については当初、試掘調査の結果から、縄文時代晩期を主体とする土器群が存在するものと想定していた。ところが、整理を進めるうちに特異な石鏃の存在や縄文時代の早期に位置付けられる石核の存在が明らかとなり、土器についても再度の検討を行う必要が生じた。その結果、第75・76図に掲載する土器群が、当初想定した晩期土器群から分離されることが判明した。

いずれも、器表が風化して剥落していたため、調整手法等の観察は困難な状態であり、施文手法等に重きをおいて検討した。

その結果、

1. 爪形文系統のもの
  2. 押型文系統のもの
  3. 沈線文系統のもの
  4. 隆帯(線)文系統のもの
  5. 条痕文系統のもの
- の存在が明らかとなった。

このなかで押型文土器は楕円・山形文ともに認められ、楕円文は1cm前後であり、また山形文は粗大で円延びしているもの(第75図6)が見受けられる。

ただ同図4としたものは口縁内部に段をつくり、上位に刺突を施したもので、外面は山形押形文ではなく、口縁外部の文様帯を区画する凹線文の可能性も残る。外反する口縁部形態を含めて勘察すると壺ノ神様式の一型式と見られる。

専ら、昭和49・50年度調査の降ノ原遺跡出土土器(註5)には平栝様式の文様モチーフも認められ、また第75図32と同様の、頸部に突帯を有し刺突を施す壺形土器も出土しており、これら壺形土器群は同一モチーフで製作されたものであり、両遺跡が非常に近接した時間帯を共有していたことが窺われるのである。さらに、これら壺形土器は瀛島海底遺跡(註6)で検出された以外、本県での類例を知らず、西九州との関連を示す遺物である。またこの傾向を支持する遺物として石鏃6～8類型の存在を提示したい。県内では複数遺跡で散見されるものの、纏まって出土する遺跡が少なく、本遺跡で取り上げるものであり、本章第3節で後述する。

また、この石鏃に視点を当てて市内の遺跡を通観すると、平遺跡(註7)で押型文土器、壺ノ神式土器、轟式土器に前述の石鏃6 E類型が共伴し、また鷹野遺跡A地点(註8)では尖底

の楕円押型文土器と円筒形と思われる条痕文土器に石鏃6Aが共伴、さらに同遺跡B地点では楕円目押型文土器と円筒形条痕文土器に6A類型の石鏃が伴うなど、遺跡相互間に石鏃を通しての関連が窺えるのである。

本遺跡をはじめ、縄文時代早期後半期において、これら遺跡群は相互に距離的・時間的・動態的に近接した様相が読み取れよう。

### 一三 石鏃について

本遺跡で出土した石鏃の中に小型・五角形で将棋の駒型・局部磨製といった属性に特徴を示すものが認められ本項で考察を加えることとした。石鏃の分類については高場遺跡の石鏃分類(第14表)を用いている。

石鏃は縄文時代の石器として代表的なものであるが九州では縄文時代草創期に細石刃と共伴して出現するとされている。後期旧石器時代より新石器時代への移行期である縄文時代草創期・早期という石器時代文化の大きな変換点を迎えたとき、その時代の人達が生活のために持ちえた発見要素のひとつが石鏃であったはずである。

縄文時代早期に入って九州では無文土器の時期に小型の石鏃が増加する傾向がみえ、押型文土器の時期には凹基無茎のEに分類されるいわゆる鋳形鏃を含んだ中型を主体に、大型・小型をまじえて法量、形態ともに複雑な様相を示すようになる。局部磨製石鏃が多くみられるのもこの時期である。

また粘地型及びその類似タイプの大型石鏃が縄文時代早期末の遺跡から検出される例が多いことは各地の調査によって明らかにされている。長崎県でまとまった出土が報告されているのは東彼杵町大久保遺跡である。報告書では同類の大型石鏃が各地の縄文時代早期から前期にかけての遺跡で、他の石鏃にわずかの数が混じって検出されることに注目し、所属時期を想定している(藤田和裕1991)。なお大久保遺跡で検出された小型石鏃に6-A・B類と7-A・B類がみられるが、局部磨製石鏃は検出されていない。同様の傾向は広平遺跡の報告書でも論考がなされている(渡辺康行1997)。これら九州における石鏃の出土状況は、各地の縄文時代草創期・早期に係る報告書を参照した中でも看取された。そこで中型石鏃が主体となってゆく縄文時代早期中葉末より後葉にかけて小型石鏃が大型石鏃と共に数を減じながらも検出されることに着目してみたい。

小型石鏃はその形態・法量から考えて機能面・用途面に限られたものがあつたと考えるのが妥当であろう。そうした観点から考えると当該時期に始まった気候変動による自然環境の変化がもたらした新しい生産形態に関係した現象として捉えることは出来ないのだろうか。従来から縄文時代に入って古い時期の石鏃については小型三角形のものが多くと言われてきた。しかしながら、大分県成仏岩跡第5層検出資料のように小型石鏃が主体を占めるのは普遍的でない印象が強い。むしろこの時期にはそれまでになかった新しい石器として機能面・用途面に対しての試行錯誤が繰り返えされたのであり、尖頭器的な要素を残す大型石鏃が残存するなか、飛射による新しい機能面・用途面への対応として一部の遺跡で小型石鏃の数が多くなる現象を生んだのではないかと考えている。小型石鏃については吹き矢・罌瓶の部品などといった機能

面・用途面からの検討とともに、単に狩猟対象による形態・法量の小型化といったことで解決しない問題として今後取り組んでいかなければならない課題のひとつであろう。

局部磨製石鏃については、佐世保市岩下洞穴出土資料に基づく論考(下川達彌1972)によれば、3層から6層に177点の集みがみられ縄文時代早期押型文土器の時期に係わるものでないかとされている。また岩下洞穴の発掘調査報告書(麻生 優1968)によれば、局部磨製石鏃は1層から8層までの各層から検出されており、第8層の押型文土器に伴うものが最下層である。一方、泉福寺洞穴においては4層条痕文土器に伴って検出されている(泉福寺洞穴研究編2002)。

現在長崎県内においては、局部磨製石鏃の出土が縄文時代早期以降弥生時代にいたる各時期にわたってみられると言われているが果たしてそうであろうか。因みに、縄文時代後期末より弥生時代にいたる遺跡で、石鏃の出土量が多いと報告されている遺跡を選んで考察を加えてみたが、所属時期が確実な局部磨製石鏃の検出を報告したものはなかった。

考察の対象にして石鏃は主として6・7-A-E類に分類されるものに着目しているが、類似する形態は縄文時代各時期にわたって各地の遺跡でみられ、遺跡での出土数量としては少数であるため報告書の中でも特にとりあげて論じられることはなかったようである。

そこで長崎県内及び九州各県の報告書中、洞穴遺跡及びテフラ層によって時期が確定できる遺跡を主体に選定した上で、考察の対象にした石鏃と概形が類似したものを抽出し、岩下洞穴の各層別検出資料を基準にして第80図に示してみた。

図示したものは縄文時代草創期・早期に属するものである。1~14は長崎県佐世保市岩下洞穴3~6層・9層から検出されたものである。1・2は3層検出のもので1は局部磨製石鏃である。図のように概して小形に属するものが多い傾向にあって6層まで局部磨製石鏃を含んだ6・7-A-E類が検出されている。岩下洞穴で土器を検出した最下層である9層の条痕文土器に伴って出土した石鏃の中に12・13の7-B類が2点検出されている。高場遺跡出土資料には7-A類に分類した小型石鏃が1点出土している。従って基部形態に違いがあるもの高場遺跡の小型石鏃は第9層の時期まで上がる可能性を残している。また同層には14の粘地型類似の大型石鏃が検出されている。15は泉福寺洞穴3層押型文土器に伴って検出された資料で、局部磨製である。16は泉福寺洞穴4層条痕文土器に伴って検出された資料で、岩下洞穴9層類型の資料である。17・18は長崎県江迎町久保遺跡検出資料で、17の形態は高場遺跡の資料に近いものである。19~23は長崎県東彼杵町大久保遺跡で検出された資料である。24・25は佐賀県伊万里市白蛇岩陰9層検出のもので、いずれも押型文土器に伴って検出された資料である。26は広島県香取観音堂洞窟20・21層、27は馬渡岩陰4層検出の資料である。28・29は佐賀県唐津市日の出松遺跡2層、30~32は同市中尾二ツ枝遺跡2層から検出された資料である。33は熊本県人吉市白鳥平B遺跡5層縄文時代早期、34~37は同遺跡6層縄文時代草創期から検出された資料である。38~40は宮崎県小林市内屋敷遺跡6・7層の南九州早期土器に伴って検出された資料である。41・42は宮崎県北方町早日渡遺跡7層の押型文土器に伴って検出された資料であり、43・44は同町矢野原遺跡4層検出の資料である。45・46は鹿児島県喜入町粘地遺跡第6地点8層縄文早期から検出された資料である。

次に諫早市内の代表的な遺跡として西輪久遺跡・鷹野・平の三遺跡から検出された資料を挙げる。47～51は鷹野遺跡A地点で押型文土器・円筒形と思われる条痕文土器に伴って検出され、52～58は同遺跡B地点で押型文土器・壺ノ神式土器・円筒形条痕文土器に伴って検出された資料である。59・60は平遺跡で押型文土器・霽式土器に伴って検出された資料である。61・62は西輪久で押型文土器・壺ノ神式土器・円筒形条痕文土器に伴って検出された資料である。なお鷹野遺跡A地点50は炉穴遺構検出資料で遺構内検出資料をC<sup>3</sup>による年代測定がなされている(註9)。

ここで高場遺跡における石鏃の検出状況について述べると、調査区全体で出土した石鏃は総数173点を数えたが、そのうち形態・法量によって分類できたものは124点であった。分類できた石鏃の属性は、1・2-E類及び6～9-E類に分類できた鏃形鏃をはじめとする縄文時代早期の形態のものが60点と多く、48%を占めている。この60点にさらに細かい観察を加えてみると、6・7・8類とした五角形または七角形に属するものは、6-A～C・Eが30点、7-A・Eが5点、8-Dが1点であった。

そのうち6-E類に分類された将棋の駒形を呈するもの16点は、剥片鏃2点を除く14点中、7点に局部磨裂が施されている。さらに6-E類に分類したなかにも、長さ1.5cm前後で、基部を丸く扱るように腹・背全面を剥離調整し、脚部は周縁下方より斜め内側に先端を尖らせるように整形した五角形石鏃(第55図-289-290-292)、及び図示出来なかった同形石鏃2点(図版27-1・98-105)を含む5点があり、五角形鏃のなかでも固定化された形態を示している。また、今回の調査で検出された局部磨裂石鏃は、前述の6-E類のほか、1-B類に4点、2-B・C類にそれぞれ1点、2-D類に2点、6-C類に2点、合計10点が検出されている。他に11-A類に分類した帖地型石鏃Aタイプ類似資料(第55図-298)1点と、2-E類に分類した石鏃脚部調整を偶線から斜め方向へ後を超えて一気に押圧剥離を平行して行うタイプ(第55図-272)等がみられる。何れも各地の調査報告書によれば縄文時代早期のもたとされている。

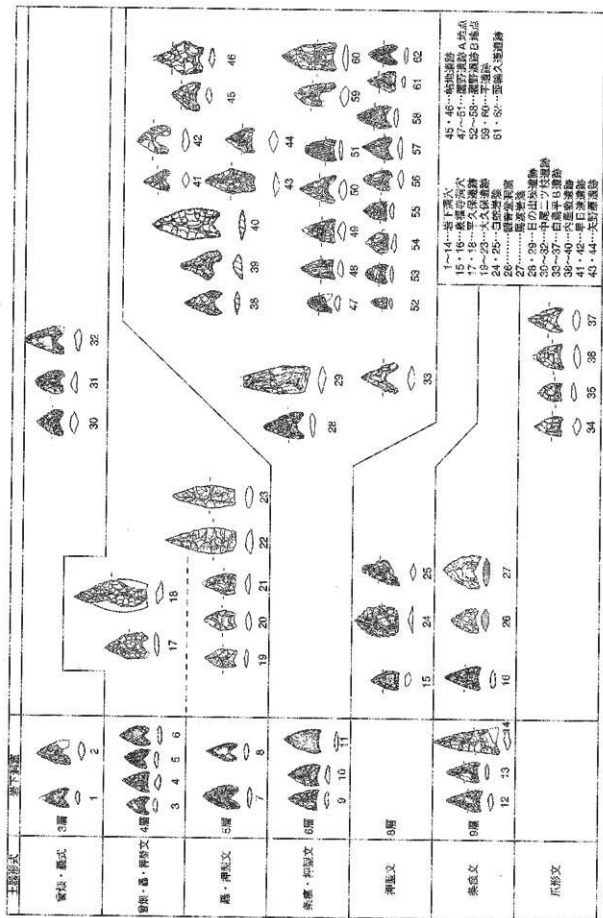
次に今回の調査で出土した石器の組成をみると、石核の中に福岡市柏原F遺跡で確認された(山崎・小畑1983)安山岩を素材にした柏原型石核に類似するもの(第53図-239)がある。また、尖頭器には黒曜石楕円剥片を素材にして周縁から細調整を加えて整形した小型の木葉形尖頭器(第55図-299)と、安山岩剥片を素材にして周縁からの細調整により略三角形に整形した小型尖頭器(第55図-300)、及び安山岩切片状原石を素材にして周縁からの細調整により整形した小型尖頭器(第55図-301)計3点が出土している。これらの石器は先に述べた局部磨裂石鏃を含む一群の石鏃とともに縄文時代草創期から早期に属する石器組成と考えられる。

また鷹野遺跡・平遺跡・西輪久遺跡から検出された石鏃には、その形態に全く相似するものはみられないものの、形態・法量の選択に近似性が看取され、伴出した土器も同時期のものとみられるところから遺跡相互間の関連を窺わせる。

高場遺跡では縄文時代草創期隆帯文土器と思われるもの(註10)をはじめとして、押型文土器・壺ノ神式土器が、数こそ少ないものの出土していて、これらの土器は相関的に石器の一期を示唆しているものとして矛盾はないと思われる。

以上述べてきたような観点から今回出土した将棋の駒型した小型石鏃5点については、縄文時代早期末のものとして高場遺跡特有の属性をもっているものと考えている。





1~14...岩下洞穴  
 15・16...熊澤寺洞穴  
 17・18...千久保城跡  
 19~23...久保城跡  
 24・25...白旗城跡  
 26...藤原城跡  
 27...藤原城跡  
 28・29...巨の山城跡  
 30~32...白旗平山城跡  
 33~37...白旗平山城跡  
 38~40...内庭城跡  
 41・42...春日城跡  
 43・44...天野城跡  
 45・46...蛤地城跡  
 47~51...蘆野城跡A地点  
 52~58...蘆野城跡B地点  
 59・60...千選跡  
 61・62...蘆野城跡

第80図 石造葉成図 (縮尺約1/2)

- 註1 本遺跡では4層上位から2層上位まで始良 Tn 降下火山灰が含まれ、また2層中には鬼界アカホヤ降下火山灰が検出 (V参照) されている。このことから2層包含遺物は本来3層に包含されていたのであり、後世の人為や自然現象によって浮きあがったものと考えられるため、敢えて3層組成の中に組み込んだ。また3層の堆積期間はユニット8に細石刃文化期の遺物が認められるため、この時期までの所産と考えられる。
- 註2 長崎県教育委員会 『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ』 1985
- 註3 同志社大学文学部文化化学科 『百花台東遺跡』 1994
- 註4 長崎県教育委員会文化課の川道寛氏に突見していただいた資料中、第75図31は胎土・焼成・色調において茶園遺跡Ⅳ層出土の草創期土器と近似している、とのご教示を得た。
- 註5 長崎県教育委員会 『諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第1集 図録編』 1975
- 註6 鷹島町教育委員会 『鷹島海底遺跡Ⅱ』 1993
- 註7 長崎県教育委員会 『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ』 1985
- 註8 長崎県教育委員会 『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』 1986
- 註9 鷹野 No.8 資料は15号炉穴より採取されたもので、C<sup>14</sup>年代測定によって8970±90 Y. B. P (8710±90 Y. B. P.) と報告されている
- 註10 註4と同じ

#### 参考文献

- 麻生 優 編 『岩下洞穴の発掘記録』 佐世保市教育委員会 1968
- 麻生 優 編著 『泉福寺洞穴の発掘記録』 佐世保市教育委員会 1994
- 下川達彌 『局部磨製石鏃について—長崎県佐世保市岩下洞穴出土資料をとりあげて—』 『長崎県立美術館紀要』 第1号 長崎県立美術館 1972
- 白石浩之 『縄文時代草創期の石鏃について』 『考古学研究』 第28巻4号 考古学研究会 1982
- 長崎県教育委員会 『諫早市中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ』 1983
- 長崎県教育委員会 『諫早市中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ』 1985
- 長崎県教育委員会 『諫早市中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』 1986
- 長崎県教育委員会 『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ』 1983
- 長崎県教育委員会 『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ』 1991
- 長崎県佐世保市教育委員会 『四反田遺跡』 1994
- 長崎県教育委員会 『長崎県文化財調査報告書 第137集』 1997
- 長崎県教育委員会 『長崎県文化財調査報告書 第132集』 1997
- 長崎県江迎町教育委員会 『広久保遺跡』 1998
- 長崎県有明町教育委員会 『大野原遺跡』 2001
- 長崎市教育委員会 『柿泊遺跡』 1997
- 帝釈峽遺跡群発掘調査団 『帝釈峽遺跡群』 1976
- 宮崎県教育委員会 『一般国道218号稚畑バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1995
- 宮崎県埋蔵文化財センター 『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』 第14集 1999
- 熊本県教育委員会 『熊本県文化財調査報告』 第142集 1994
- 佐賀県立博物館 『佐賀県立博物館調査研究書』 第1集 1974
- 府津市教育委員会 『府津市埋蔵文化財調査報告』 第47集 1991
- 唐津市教育委員会 『唐津市埋蔵文化財調査報告』 第55集 1993
- 鹿児島県喜入町教育委員会 『喜入町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)』 1999

## V 下峰原高場遺跡の地形地質

長峰大学教育学部 長岡 信治

東京都立大学大学院理学研究科 大石 雅之

鈴木 毅彦

下峰原高場遺跡は、本明川中流右岸のなだらかな丘陵の頂部、標高70m付近に位置する(図1)。この丘陵は、藤津層(山崎ほか、1965)または多良火山泥流(阪口ほか、1989)と呼ばれる更新世の安山岩質礫層からなっている。丘陵は現在、本明川により東側の多良岳火山とは地形的に分断されているが、礫層から藤津層は、かつての多良岳火山からの火山扇状地堆積物であり、遺跡の載る丘陵はこの扇状地の一部が侵食されて丘陵化したものと推定される。

遺跡はこの藤津層を覆う土壌の中に挟んでいる。遺跡の地質は、下位より丘陵を構成する藤津層、それを覆う土壌の5層、4層、3層、2層、1層に区分されている(図2)。

藤津層は、厚さ150cm以上で、巨~中礫大の不淘汰な砂質マトリクス支持の無層逶迤角礫層で、扇状地を構成する土石流堆積物と考えられる。礫は、黄褐~灰褐色の安山岩質で、指で潰れるほどに強く風化し、いわゆる“くさり礫”となっている。マトリクスも粘土状に風化している。こうした風化の程度から、藤津層の時代は前~中期更新世と推定される。

5層は厚さ40cmの黄赤褐色粘土質土壌、4層は厚さ10cmの黄褐色粘土質土壌、3層は厚さ20cmの黄褐色シルト質土壌、2層は厚さ80cmの褐色シルト質土壌、1層は厚さ10cmの暗褐色シルト質土壌である。

土壌に含まれるテフラの火山ガラスを検出、同定するために、4~1層を5~数10cmおきに採取し(試料000803-1A~000803-1I、図3)、超音波洗浄および乾燥後、実体顕微鏡で観察、さらに東京都立大学大学院にて、京都フィッシュントラック社製の屈折率測定装置RIMS2000で屈折率の測定を行った。その結果、5層上部から2層上部までの全ての層準(試料番号000803-1A~000803-1I)から、始良Tn降下火山灰(AT)(町田・新井、1992)の火山ガラスを検出した(図3、表1-1~1-9)。また、2層全体(試料番号000803-1G~000803-1I)から鬼界アカホヤ降下火山灰(K-Ah)(町田・新井、1992)が検出された。(図2、表1-1~1-9)。したがって、5~3層が25,000~6,300年前に、2層が6,300年前以降に形成されたと推定される。この結果は、各層準から出土した遺物の推定時代と矛盾しない。

さらに、3層の試料000803-1Eから1.504~1.510の屈折率の火山ガラスが検出されている(図3、表1-5)。これは、84,000~89,000年前の阿蘇4火砕流(Aso-4)(町田・新井、1992)の可能性があるが、少量のため詳細は不明である。いずれにせよATと混在していることから、遺物の時代とは矛盾しないと考えられる。

引用文献

- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス—日本列島とその周辺。東京大学出版会、276p。  
 阪口和則・西村輝希・堀口承明 (1989) 諫早市西諫早付近の第四系—特に古貝津湖層と火山灰の分布—。長崎県地学会誌、49号、1—18。  
 山崎達雄・松本征夫・菟田正俊 (1965) 諫早炭田の地質。九州大学生産科学研究所報告、40号、8—25。

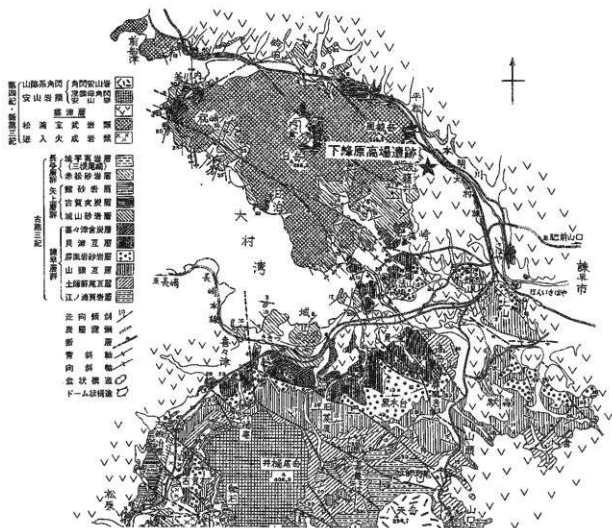


図1 諫早西部の地質と下峰原高場遺跡の位置  
(山崎ほか、1965)

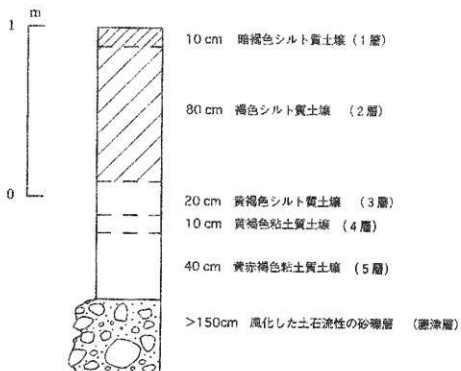


図2 下峰原高場遺跡の地質柱状図  
(1・2調査区の地質断面を結合したもの)

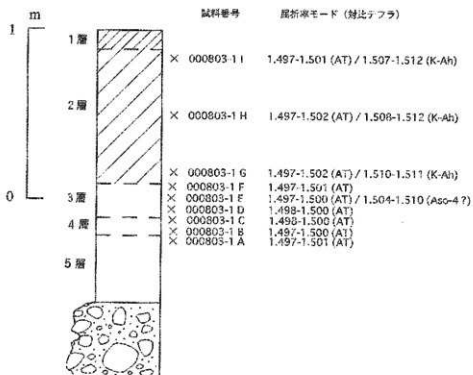


図3 試料採取層準と火山ガラスの屈折率

Series Name : 謙早下峰原高場遺跡  
 Sample Name : 000803-1 A  
 Analyst : Ooisi  
 Material : V.Gl.  
 Immersion Oil: No.3.8 (nd=1.51915-0.000387-1)

1.4983 1.4981 1.4977 1.4974 1.5005 1.4999 1.4994 1.4990 1.4991 1.4990  
 1.4986 1.4983 1.4990 1.4989 1.4987 1.4984 1.4991 1.4982 1.4976 1.4996  
 1.4994 1.4988 1.4985 1.4988

Total	count	min.	max.	range	mean	median	st. dev.	skew.
:	24	1.4974	1.5005	0.0031	1.4988	1.4988	0.0007	0.2400

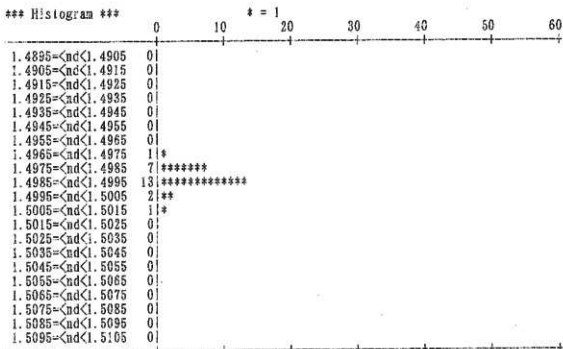


表 1 - 1 試料000803-1 A の火山ガラスの屈折率

Series Name : 藤早下峰原高場遺跡  
 Sample Name : 000803-1 B  
 Analyst : Ooisi  
 Material : V.Gl.  
 Immersion Oil: No.3.8 (nd=1.51915-0.000387-t)

1.4991	1.4987	1.4985	1.4981	1.4976	1.4993	1.4990	1.4984	1.4983	1.4980
1.4993	1.4985	1.4981	1.4978	1.4977	1.4987	1.4984	1.4979	1.4973	1.4969
1.4986	1.4982	1.4979	1.4977	1.4996	1.4990	1.4987	1.4986	1.4980	1.4972
1.4969	1.4991	1.4987	1.4984						

Total	count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
:	34	1.4969	1.4996	0.0027	1.4983	1.4984	0.0007	-0.2801

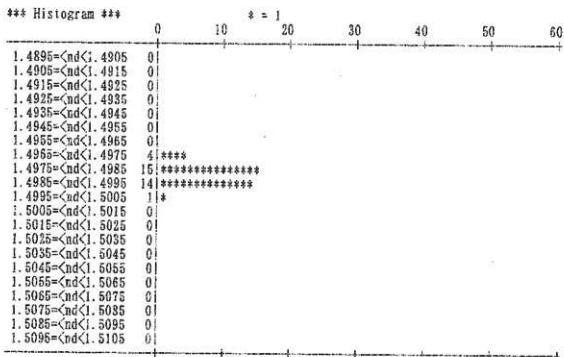


表1-2 試料000803-1 Bの火山ガラスの屈折率

Series Name : 諫早下峰原高湯遺跡  
 Sample Name : 000803-1 C  
 Analyst : Ooisi  
 Material : V. Gl.  
 Immersion Oil: No. 3. 8 (nd=1.51915-0.000387-t)

1.4995 1.4985 1.4984 1.4982 1.4992 1.4987 1.4977 1.4993 1.4992 1.4990  
 1.4987 1.4983 1.4998 1.4994 1.4990 1.4987 1.4985 1.4996 1.4991 1.4988  
 1.4976 1.4990 1.4983 1.4981 1.4997 1.4987 1.4980

	count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
Total :	27	1.4976	1.4998	0.0022	1.4988	1.4987	0.0006	-0.1592

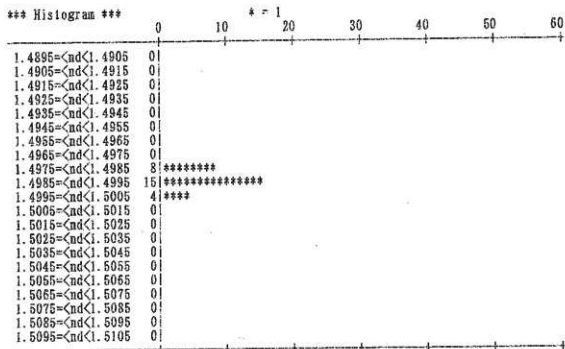


表 1-3 試料000803-1Cの火山ガラスの屈折率



Series Name : 隼早下峰原高場遺跡  
 Sample Name : 000803-1 D  
 Analyst : Ooisi  
 Material : V.GI.  
 Immersion Oil: No.3.8 (nd=1.51915-0.000387·t)

1.4994	1.4997	1.4995	1.4993	1.4990	1.4989	1.4991	1.4995	1.5002	1.4980
1.4988	1.4990	1.4994	1.4996	1.4983	1.4984	1.4987	1.4989	1.4992	1.4985
1.4987	1.4988	1.4984	1.4988	1.4991	1.4995	1.4980	1.4987	1.4991	1.4984
1.4992	1.4994	1.4999							

Total	count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
:	33	1.4980	1.5002	0.0022	1.4990	1.4990	0.0065	0.0204

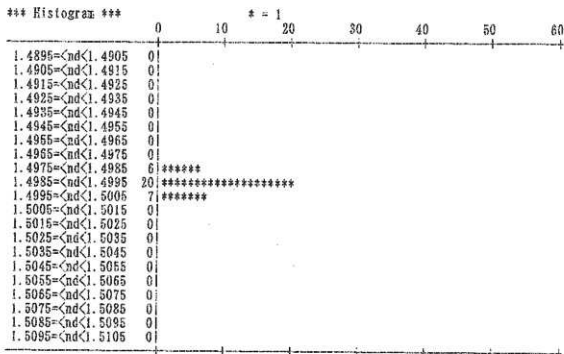


表 1-4 試料000803-1 Dの火山ガラスの屈折率

Series Name : 龍早下峰原高場遺跡  
 Sample Name : 000803-1 E  
 Analyst : Ooisi  
 Material : V.Gl.  
 Immersion Oil: No.3.8 (nd=1.51915-0.000387·t)

1.4983	1.4987	1.4992	1.4995	1.4980	1.4985	1.4989	1.4992	1.4997	1.4981
1.4984	1.4991	1.4994	1.4999	1.4981	1.4985	1.4989	1.4995	1.4998	1.4971
1.4978	1.4987	1.4992	1.4994	1.4983	1.4985	1.4991	1.4992	1.5002	1.4973
1.4988	1.4995	1.4975	1.4981	1.4984	1.4989	1.4978	1.4985	1.4990	1.4998
1.4976	1.4983	1.4988	1.4990	1.5096	1.5100	1.5037	1.5066	1.5079	1.5084

Total	count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
:	50	1.4971	1.5100	0.0129	1.4998	1.4989	0.0031	2.4033

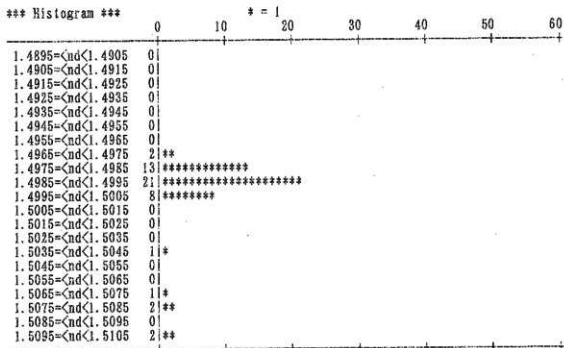


表 1-5 試料000803-1Eの火山ガラスの屈折率

Series Name : 諫早下峰原高橋遺跡  
 Sample Name : 000803-1 F  
 Analyst : Golsi  
 Material : V. Gl.  
 Immersion Oil: No. 3.8 (nd=1.51915-0.000387-t)

1.4985 1.4982 1.4980 1.4978 1.4973 1.4994 1.4989 1.4988 1.4980 1.4973  
 1.4867 1.5011 1.5002 1.4987 1.4985 1.4980 1.4987 1.4983 1.4986 1.4978  
 1.4974 1.4879 1.4972 1.5004 1.4991 1.4989 1.4987 1.5013 1.4997 1.4993  
 1.4985 1.4976 1.4990 1.4986 1.4990 1.4971 1.4968 1.4993 1.4988 1.4978  
 1.4973 1.4969 1.5002 1.4996 1.4989 1.4985 1.4976 1.4988 1.4983 1.4979  
 1.4972

	count	min.	max.	range	mean	median	st. dev.	skew.
Total :	51	1.4967	1.5013	0.0046	1.4984	1.4985	0.0010	0.6937

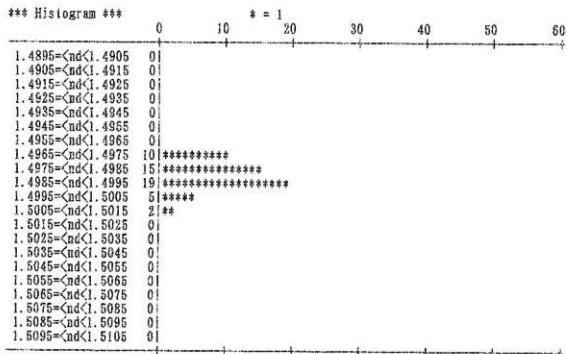


表1-6 試料000803-1Fの火山ガラスの屈折率

Series Name : 疎早下峰原高場遺跡  
 Sample Name : 000803-1 G  
 Analyst : Ooisi  
 Material : V.Gl.  
 Immersion Oil: No.3.8 (nd=1.51915-0.000387*i*)

1.4981	1.4992	1.4996	1.4982	1.4986	1.4992	1.4997	1.5002	1.4977	1.4985
1.4992	1.4994	1.5001	1.4973	1.4981	1.4985	1.4990	1.4996	1.4982	1.4985
1.4989	1.4999	1.5007	1.4970	1.4979	1.4984	1.4990	1.4997	1.4984	1.4986
1.4994	1.4986	1.4990	1.4993	1.4988	1.5001	1.4969	1.4976	1.4981	1.4986
1.4982	1.4991	1.5021	1.5112	1.5099					

	count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
Total :	45	1.4969	1.5112	0.0143	1.4994	1.4990	0.0026	3.6171

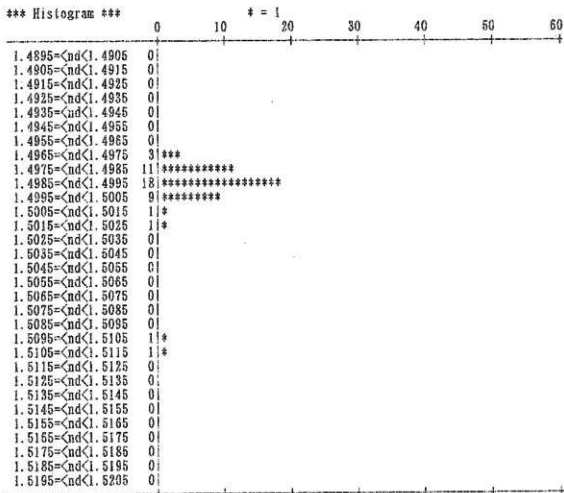


表 1-7 試料000803-1 Gの火山ガラスの屈折率

Series Name : 神早下降原高橋遺跡  
 Sample Name : 000803-1 H  
 Analyst : Ocisj  
 Material : V.Gl.  
 Immersion Oil: No.3.8 (nd=1.51915-0.000387-t)

1.4992	1.4991	1.4984	1.4978	1.4999	1.4993	1.4991	1.4980	1.4978	1.4997
1.4991	1.4990	1.4987	1.4984	1.4998	1.4994	1.4990	1.4986	1.4983	1.4991
1.4988	1.4986	1.4983	1.4978	1.4986	1.4981	1.4978	1.4976	1.4971	1.4991
1.4985	1.4982	1.4979	1.4975	1.5018	1.5011	1.4998	1.4989	1.4979	1.5001
1.4996	1.4989	1.4985	1.5089	1.5093	1.5085	1.5099	1.5087	1.5078	1.5123

Total	count	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
	50	1.4971	1.5123	0.0152	1.5003	1.4990	0.0038	2.0153

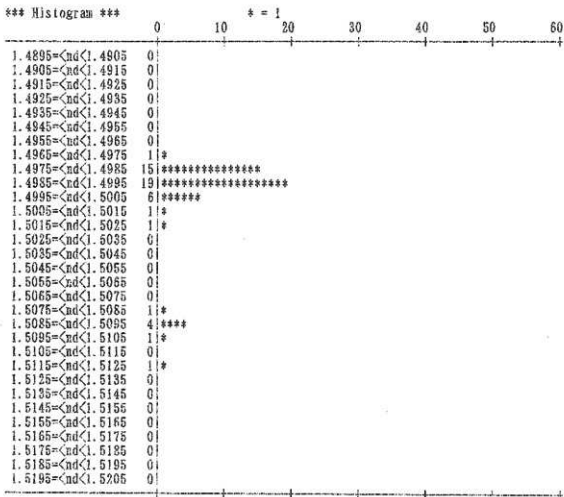


表1-8 試料000803-1Hの火山ガラスの屈折率

Series Name : 諏早下峰原高湯遺跡  
 Sample Name : 000803-1  
 Analyst : Oo1sj  
 Material : V.Gl.  
 Immersion Oil: No.3.8 (nd=1.51915-0.000387·t)

1.4996	1.4985	1.4993	1.4975	1.4998	1.4995	1.4991	1.4988	1.4980	1.5006
1.4996	1.4982	1.4979	1.4998	1.4995	1.4991	1.4987	1.4995	1.4991	1.4984
1.4976	1.4992	1.4987	1.4983	1.4978	1.5121	1.5104	1.5100	1.5081	1.5066
1.5073	1.5080	1.5084	1.5091	1.5095	1.5102	1.5110	1.5097	1.5100	1.5105
1.5099	1.5108								

	couni	min.	max.	range	mean	median	st.dev.	skew.
Total	42	1.4975	1.5121	0.0146	1.5032	1.4996	0.0054	0.4448

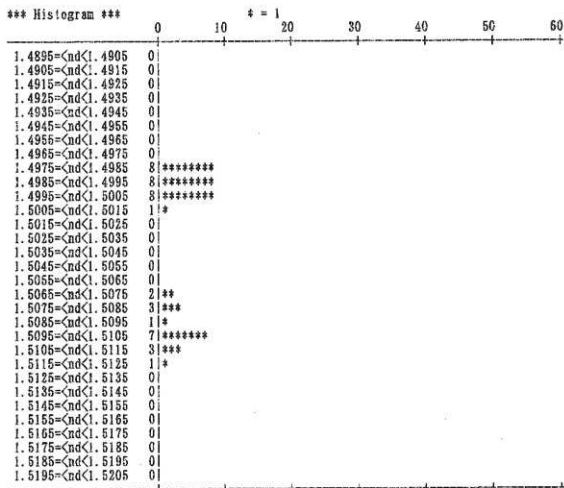


表1-9 試料000803-11の火山ガラスの屈折率